

大イノベーション～信仰と自立～

与国秀行

はじめに

「ダメもとでも何かしなければいけない」、おそらくそんな想いは、『幸福の科学』の三帰者ならば今、誰にでもあるのではないのでしょうか。

本書『大イノベーション～信仰と自立～』は、『幸福の科学出版』が主催されている「ユートピア学術賞」に応募した原稿です。しかし私は本書を書いた者として、「非常に重要な内容と情報である」と考えているために、あえてネット等で広く公開することにいたしました。

「少しでも早く『幸福の科学』がイノベーションを成し遂げ、弟子の力でもって、法輪を転じていかなければならない」、それが本書を書き、そして公開した私の想いです。

おそらく多くの方々が、忙しく、時間に追われ、なかなかこれだけの分量の原稿は読めないでしょう。

しかしせめて、序章だけでも読んでいただきたく思います。

なぜなら「仏法真理の観点から、僧団にイノベーションを起こす重要な鍵が確かにある」、そう私は自負しているからです。

私たちは総裁先生より、「主を信じ、主を愛し、主と一体となる」ということを教えて頂いておりますが、しかし「人を救うためには自立しなければならない」とも教えて頂いております。

「主と一体となって自立する」、この矛盾した意味を、本書の序章で説き明かしたいと思います。

本書は、序章で「イノベーションの鍵」を仏法真理の観点から触れると共に、一章から三章では、宗教および全人類救済に関する多くの「情報」をお届けし、そして「四章」では伝道や選挙における「戦略」について語り、さらに最終章では、「未来への展望」について、少しだけ触れております。

そしてご紹介する「情報」は、「悪魔」、「悪質宇宙人」、そしてどうやら「邪神」も深く関わっており、「大救世主の降臨」という福音を、人類に宣べ伝える上で、とても大事な「情報」と言えるでしょう。

なぜ私は、こんな「情報」にたどり着いたのか、それは私が悪の中を生き抜いてきたから、悪を見抜くことに長けていること、さらには『TOEIC』10点の私が、奇人変人だからでしょう。

本書は、あくまでも一般向けに書かれたものではなく、あくまでも会内向けに、僧団にイノベーションを起こし、法輪を転じることを目的に書いたものです。よって一般向けの原稿は、また別に書きます。

そしてもしかしたら誰かにとっては、耳の痛い話かもしれませんが、しかし私はけっして誰かを裁くつもりで書いたものではありません。なぜなら本書は、あくまでもイノベーションを目的としたものだからです。

ですからもし、「裁かれている」と感じている方がいたら、本当に申し訳ございません。

私は主に感謝すると共に、出家在家を問わず、すべての法友に対して感謝している、あるいは「深い感謝の想いを持たねばならない」と考えております。

なぜなら主より私たちは、「感謝から愛が生まれてくる」と教えて頂き、さらには「信仰の証明とは、汝の隣人を愛することである」とも教えて頂いているからです。

これはつまり「信仰とは主に対して深く感謝して、主を絶対的に愛し、さらには法友の存在にも感謝して、愛することである」とも表現できます。

私は心未熟ですから、この世の人、あの世の天使も悪魔も、すべての存在を愛せるほど、仏のような大いなる愛を持ち合わせてはおりません。しかし法友は敵ではなく、あくまでも仲間なのですから、すべての法友の存在に対して感謝せんと心がけております。

それはつまり、たしかに私は心未熟な愛乏しき者ではありますが、すべての法友の存在に対して感謝せずして、「愛に始まり愛に終わる主の教えを学んでいる者」とは言えないからです。

ですから私は信仰者として、「主に感謝し、すべて法友を感謝せんとしている」、そんな思いから本書を書いていることを、どうかご了承ください。

与国秀行

序章 絶対的信仰と情動的自立

トラウマとスコトーマ

今こそ金太郎飴型伝道の開発を

2010年9月5日、総裁先生は『本物の伝道』というご説法をお説きくださり、その中で「金太郎飴型の伝道」というお言葉を発されました。

「そろそろ、もう少し“金太郎飴型”の伝道[注]をしなければいけない時期が来ているのかな」と感じています。
伝道のスタイルを、金太郎飴のように、どこを切っても同じものにし、「幸福の科学の伝道スタイルは固まってきた」と言えるようにしたいのです。

これを踏まえて、現代の日本において、伝道が成功して、人が次から次へと増えている支部が、果たして存在するでしょうか。もしも伝道に成功して、次から次へと人が増えている支部があれば、金太郎飴のように、その「成功パターン」を他の支部にも輸入できるはずですが。「A支部でこのようなやり方をしたら、伝道が次々に成功したから、そのやり方をB支部にも、C支部でもやってみたら、続々と三帰者がでた」ということが起きているでしょうか。

そしてもしも「日本国内ならば、どこでも効果的な伝道成功パターン」が完成すれば、おそらく法輪は大きく転じられていくはずですが。

しかし残念ながら現実には、「伝道の成功パターン」を他の支部に輸出できるような支部は、おそらく日本に一つも無いはずですが。

ですから私たちは、「日本国内ならば、どこでも通じる伝道の成功パターン」というものを、考える必要があります。

もちろん人間は一人一人、個性は様々ですから、悩みも夢も人それぞれ違います。しかし日本人が全体的に持っている、「宗教に対する価値観」、「宗教への共通意識」というものは確実に存在しています。

生かす愛に必要な理解すること

伝道において、信仰心が大切なことは言うまでもありませんが、やはり信仰心の証明でもある愛が、伝道には欠かせません。

では、伝道における愛とは、果たしていかなる愛なのかと言えば、やはり「人を導く愛」、すなわち「生かす愛」と言えるでしょう。

主は『人を愛し、人を生かし、人を許せ。』の中で、「生かす愛」について、次のように教えて頂いております。

いくら力があっても、なかなかすべての人を導いていくことはできないというのが、人間の真実の姿だと思えます。【中略】「こうすれば、その人はこうなる」「こうした教えを説けば、このような反応がある」「こうした努力をすると、このような結果になる」という原因・結果のプロセスが見えないと、人を正しく導くことは難しいのです。それゆえに、幸福の科学で説いている「知」は、実は「原因・結果のプロセスを見抜く力」と言ってもよいでしょう。

主は『人を愛し、人を生かし、人を許せ。』の中で、「原因・結果のプロセスが見えないと、人を正しく導くことは難しい」と教えてくださっているわけですが、しかしこれは逆を返せば、「原因・結果のプロセスが見えれば、その人を正しく導くことは易しい」とも言い換えられます。

では、どうしたら私たちは、原因・結果のプロセスを見抜いて、「生かす愛」の実践を成すことができるのでしょうか。

私たちは主より、伝道に関して、「対機説法が大切である」と教えて頂いております。そして主より、『「仏陀再誕」講義』の中で、「対機説法とは応病施薬である」とも教えて頂いております。応病施薬とは、「骨折した人には添え木を、風邪をひいた人には内服薬を、相手の病状に応じて治療や薬を施すように、相手に合わせて仏法真理を伝えることが大切である」ということです。

「対機説法」こそまさに「生かす愛」なわけですが、主は「対機説法」について、『幸福へのヒント』の中で、「愛の器を広げる方法」として、次のように教えて下さっております。

愛に関しては、基本的には、人を理解できるかどうかが大事です。「理解した」ということは、「愛した」ということと、ほぼ同義なのです。

愛せないのは、理解できないからです。【中略】人は、理解できれば愛せるのです。

対機説法についても同じであり、どれだけの人を理解できるかが大事だと思います。【中略】

たいていは、自分の話を一方的に押し付けているのであって、相手の話を聴いていないのです。

「生かす愛」を実践していくためには、相手を理解して愛することが大切であると言えるでしょう。表現を変えれば、「理解という愛があるからこそ、生かす愛が生じてくる」、そのようにも言い換えられるかもしれません。

すなわち「理解」という愛が原因であり、そこに原因・結果のプロセスを見抜く「生かす愛」が加わることによって、「伝道」という成果、結果に繋がっていく、そうとも言えるかもしれません。

ですから「金太郎飴型の伝道の成功パターン」を開発するためには、私たちは日本国民の心を、深く深く理解しなければなりません。

では、私たち仏弟子は、果たしてどれだけ日本国民の心を、深く理解し、そして愛しているのでしょうか？

たしかに私たちは仏弟子として、「上求菩提・下化衆生」という仏教の基本的精神に基づいて、仏に向かっては悟りを求め、世の人々を少しでも悟らしめんとしております。しかし本当に私たち仏弟子は、衆生の心を深く理解し、愛し切れているのでしょうか。

たしかに主の御説法を聞いたり、経典を読んだり、研修を受ければ、「上求菩提」は行えます。では本当にそれだけで、私たちは衆生の心を深く理解して、生かす愛によって対機説法を行い、「下化衆生」が行えるようになるのでしょうか。

私たち仏弟子は、研修やセミナーなどの「養成」では「下化衆生」ができていても、「伝道」という意味での「下化衆生」は行えているのでしょうか。

批判を覚悟であえて言わせて頂くならば、私たち仏弟子は今、「上求菩提・下化衆生」のうち、真理の探究という「上求菩提」は真剣に行ってはおりますが、しかし実のところ目覚めぬ衆生の心を深く理解するための研究という意味での、「下化衆生」は足りていないのではないのでしょうか。

それはつまり、私たちは日々、真理の探究は行いつつも、結局において、「理解することによって成せる対機説法」が伝道では出来ていない、すなわち私たちは「生かす愛」を十分に発揮できてはない、そのように言えるのではないのでしょうか。

それは結局において、愛の器を広げなければならない、という言葉に言い換えられるでしょう。

主は三千書目の『自分を鍛える道』において、「人の気持ちが分からないということは菩薩になれない」とも、「宇宙の法も、メシアの法も大切だが、大勢の人には菩薩の法が必要であろう」とも説かれましたが、私たち修行者は、ある程度は真理を分かっておりながら、まだまだ衆生の気持ちが理解できていないのかもしれませんが。

トラウマとアレルギーの違い

では、多くの日本人は『幸福の科学』を、どのように見ているのでしょうか。

おそらく多くの方が、これまでの活動から、「日本人の心の中には、『新興宗教＝洗脳する恐怖の団体』という方程式がある」と感じているはずで。

そしてこの方程式を、もっと詳しく見ていくと、これは「宗教アレルギー」ではなく、「新興宗教トラウマ」ということが分かります。

「アレルギー」と「トラウマ」は違います。

「アレルギー」というものは、花粉が鼻の中に入り込んだり、蕎麦を食べたり、何かを味わったり、触れてから拒絶反応を示すものです。しかし「トラウマ」は違います。なぜなら「トラウマ」は、味わったり、触れることなく、見ただけで、思い出ただけで拒絶反応を示すからです。

海で溺れた経験のある人は、プールでは見事な泳ぎを披露することができても、海を見ただけでも過去の記憶がフラッシュバックして、足がすくんでしまうということがあります。あるいは生まれたばかりの赤ん坊が、看護婦さんが手を滑らせて、床に落としてしまった経験から、本人の表面意識では、そのことを憶えていないのに高所恐怖症になるということがあります。高いところを想像するだけで、足がすくむということがあるのです。

そして大勢の人間が同時にトラウマにかかるパターンは、大きくわけて3つあると言われており、一つは「戦争」、もう一つは地震や津波といった「災害」、そして3つ目が「テロ」です。

この国にはかつて、「オウム」という新興宗教が起こしたテロがありました。そしてマスコミは「まだ犯人の仲間が逃亡しているから、またテロの危険性もある」と報じました。その結果、多くの日本人が、電車に乗る時も、コンサートなど大勢の人が集まる所に行く時も、緊張感しながら行動しなければならない時期がありました。あの時から、日本中のトイレには、「不審物を見つけたら係員まで」と張り紙が貼られるようになりました。今も駅という駅には「テロを風化させない」というポスターが貼ってあります。また毎年3月になると、まるで『幸福の科学』に対する嫌がらせのように、テレビはオウム事件の特集番組を報道しています。

多くの日本国民は気づいてはおりませんが、オウムのテロによって、新興宗教に対する「トラウマ」が日本国民の間に生まれてしまったと言えるでしょう。

その結果、本人もそれを「トラウマ」と自覚していなくとも、善悪を問わず新興宗教の中身に触れることなく、教えを少しも味わうことなく、ただ拒絶反応を示すようになってしまったと言えるでしょう。

それは『旧統一教会』も同じです。この新興宗教は、歪んだ歴史観を持ち、気味悪い「合同結婚式」を行い、「靈感商法」も行い、信者から身ぐるみお金を巻き上げて、関係者が理解不能な理由で「安倍元総理銃撃事件」も起こしました。

『オウム』、『旧統一教会』、あるいはその他の邪教によって、やはり日本国民の多くが、「新興宗教トラウマ」をより強めたことは事実でしょう。

今も日本人は、初詣に大行列を作り、お祭りに出かけ、葬式や法事にも参加し、たとえ無信仰でも結婚式では神の御前で永遠の愛を誓ったりしています。ですから日本人は「宗教」が嫌いなわけではなく、「新興宗教」が嫌いなわけです。

そして「アレルギー」は、触れたり味わってから拒絶反応を示すが、多くの日本国民が『幸福の科学』の教えに触れたり、味わうことなく拒絶反応を示しているのですから、やはりこれは「トラウマ」と言えます。

以上のことから、私たち仏弟子は「愛の器」を広げるためにも、「日本人には宗教アレルギーがあるのではなく、新興宗教トラウマがあるのだ」と理解すべきであると言えるでしょう。

「新興宗教」という言葉の意味

では、こうした「新興宗教トラウマ」が存在することによって、当会と多くの日本人との間で、果たして何が起きているのでしょうか。

たとえば私たち信仰者は、もしも法友から主の経典をプレゼントされれば嬉しいものです。

そしてたとえ真理に目覚めていない人であっても、もしも主の経典を献本されて、真面目に真剣に読んでもらえたら必ず魂が洗われ、法雨の涙を流すことでしょう。そのために、私たち信仰者は、相手の仏性を信じ、その「法雨の涙の可能性」にかけて、「汝がなされたいがごとく他の人になせ」という黄金律の観点から、一生懸命に献本を行っているわけです。

しかし「新興宗教トラウマ」が大きな壁となって、献本した書籍が真面目に読まれることは、あまり多くありません。

それはちょうど、こんな例え話で説明できるでしょう。

「桃太郎」という話には、実は二つの種類あります。一つは昔話の「桃太郎」で、桃太郎が善で、鬼が悪で、誰もが知っている鬼退治の話です。しかし芥川龍之介の「桃太郎」は善悪が逆でした。こちらの「桃太郎」では鬼が善で、桃太郎が悪で、桃太郎が暴れまわる話だったのです。

ですからもしも仮に、「桃太郎」と書かれた書籍を手渡されたとしても、中を開いて内容に触れてみなければ、桃太郎と鬼のどちらに善と悪があるのか分からないわけです。

これと同様に、当会と書籍と、他の新興宗教の書籍を誰かに手渡したとしても、中を開いて内容に触れてみなければ善悪が分からないわけです。しかし現代の多くの日本人が、「新興宗教トラウマ」による拒絶反応が働くことで、真面目に読むことが少ないわけです。

「新興宗教」という日本語は、「新しく興った宗教」という意味ですが、現代の日本人の心を見つめていく時、この日本語が正しく使われていないことが分かります。

たとえば「ターキー (Turkey)」という言葉は、もともと「トルコ共和国」の通称でしたが、しかし中世の時代、ヨーロッパでは、イスラム世界から伝来したものには、なんでも「ターキー」と呼んでいたことから、七面鳥のことを「ターキー」と呼ぶようになりました。一つの言葉に、別の意味が付け加えられたわけです。

しかもとあるボウリング場が、ストライクを3回出したお客さんに七面鳥をプレゼントしたことから、ボウリング場では世界中どこでも「ターキー」と言えば、「ストライクを3回出すこと」という意味を連想し、「トルコ共和国」を連想することはないでしょう。

しかもさらにややこしいことに、トルコ式のお風呂がとても優雅で、盛大であることから、かつて日本では性風俗店のことを「トルコ」と呼んでおり、昭和の時代に「あの人は頻繁にトルコに行っている」と聞けば、Hなことが連想されました。

すなわち言葉というものは、本来の意味とは異なり、違う意味が加わったり、まったく異なる意味を連想をしたりすることがあるわけです。

これと同様に日本人は今、神道、仏教、キリスト教といった宗教の行事には参加するものの、「新興宗教」という言葉を聞くと、「かがわしい」、「気味悪い」、「洗脳される」ということを連想してしまうわけです。

そのために主の経典を献本されても、中身に触れないことがあるわけです。

これこそが、「献本」と「伝道」が比例していかない最大の原因ですが、この問題はどこかの支部の問題などではなく、日本全国の支部が抱えている大問題と言えるでしょう。

だからこそ、この対応策もまた、日本全体におよぶと言えるでしょう。

伝統宗教によるスコトーマ

そして「新興宗教トラウマ」ともう一つ、日本の心をよくよく見つめていくと、宗教的な問題として「スコトーマ」があると私は考えております。「スコトーマ」とは心理的盲点という意味です。

人間は過去の自分の経験に基づいて、価値観を築き上げることから、知らぬ間に心理的な盲点が生まれると言われております。

たとえば科学者の苔米地英人という方が書かれた『脳にいい勉強法』という書籍に、実に興味深い話があります。

あるフランス人たちと食事をする機会がありました。夏の暑い日に、和室での食事でした。私と彼らはそこでいろいろな話をしました。食事をひととおり終えたころだったと思います。

私はその部屋で食事の最初からずっと鳴り続けていた風鈴を指差して、彼らに言いました。

「ところであなたは、あの音を出しているものが何だかわかりますか？」

彼らはきょとんとしていました。そして、こう言いました。

「まったくわかりません。あんなものが部屋にあったことも気づきませんでしたし、こんな素敵な音が鳴っていたことも、いま言われてるまで気がつきませんでした。

私はこう説明しました。

「これは”風鈴”といいます。”メンタル・エアー・コンディショナー”とでも言いましょうか。この音で涼しい気持ちにする道具です」

彼らはしばらく風鈴の音色に聞き入ってしまった。

風鈴をしらなかった彼らは、その存在に気づかなかったどころか、きこえていたはずの音も認識していなかったのです。

「風を音で楽しむ」、これは日本独特の文化であるために、日本で生まれ育った人であるならば、過去の経験から風鈴の価値を知っております。そのためにももしも風鈴が鳴っていれば、すぐにそのことに気がつくものです。

しかし外国にはその文化がありません。そのためずっと風鈴が鳴っていたというのに、その外国人たちは、風鈴の存在どころか、その音が鳴っていたことにも気がつかなかったというのです。

同じことは「鈴虫」でもあります。日本人は秋になれば草むらで鳴く「鈴虫」を楽しみます。虫かごに入れて売られ、わざわざお金を出して買ってまで、鈴虫の鳴き声を楽しむ人もいます。しかしその文化が無い外国の人は、鈴虫に価値を感じないために、鈴虫が鳴いていても気にもかけないというのです。

このように人間は、過去の経験から価値観を築き上げるために、たとえ価値がある尊いものであっても、それが「スコトーマ（心理的盲点）」になることがあるわけです。

そしてこれは宗教においても、やはり同じことが言えます。世の人々は、伝統仏教のお葬式に参加したり、七五三や初詣に出かけたり、教会で行われる結婚式に参加したことはあっても、本物の説法に触れたことはありません。

現代日本人の大多数が、冠婚葬祭で宗教に触れていても、真理に触れたことがない人がほとんどです。

つまり多くの日本国民の宗教に対する認識は、「宗教とは結婚式や葬式といった冠婚葬祭の専門業で、家族や友人と初詣や縁日には行くが、しかし新しい宗教は間違っている、たとえ間違っていない新しい宗教があったとしても、自分の人生にはまったく関係ない」という認識なわけです。

なぜなら多くの日本国民が、「仏法真理が人々に悟りを授け、その悟りが幸福に繋がっていく」とは想像もしていないからです。

そのために外国人が風鈴の音色に気づかなかったように、多くの日本人も主のお言葉が、「スコトーマ」になってしまっていると言えるでしょう。

この「スコトーマ」の結果、多くの日本人が「新しい宗教の中にも、きっと善いものあるだろう。もしかしたら『幸福の科学』は悪い宗教ではないのかもしれない。しかしたとえ善い宗教があったとしても、それが自分の人生にプラスになるとは到底、思えない」と考えているわけです。

このように新興宗教によって生じた「トラウマ」、もしくは伝統宗教によって生じた「スコトーマ」が、日本人の心の内にはあると言えるでしょう。

ならば私たちは、その日本国民の心を深く理解する必要があると言えるでしょう。

ですからストレートに伝道して、救済できる相手であるならば、「宗教的アプローチ」を行っていくべきですが、しかし現代の日本人の中には、「宗教的アプローチ」のストレートな伝道が通じない人もかなり多いわけです。

そのために、勇気をもって献本したのに受け取ってさえもらえない、あるいはせつかく献本したけど突っ返された、もしくは友人や親族の集まりに、献本用の書籍を持って行ったけれども、しかしカバンから出す空気にさえならなかった、こうしたことが日本中でたくさん起きていると言えるでしょう。

それでももちろん、私たち仏弟子は、臆することなく勇気をもって、堂々と伝道を行っていくべきです。

イノベーションを起こす

心の傷は癒すことができる

そしてもしかしたらこの「トラウマ」と「スコトーマ」は、この光と闇の戦いにおける「悪魔の戦略」な

のかもしれない。

つまり「新興宗教トラウマ」と「伝統宗教スコトーマ」は、単なる偶然の産物として日本人の心の中に築かれたものではなく、悪魔やレプタリアン、あるいは邪神などの悪意ある戦略によって、意図的に日本人の心の中に築き上げられたものだったのかもしれない。

主はご法話『リーダーの条件』の中で、「**リーダーとは自分が何をすべきかが分かる人、何をすべきかが分からない人はフォロアーである**」と定義された上で、次に「軍事的リーダーの重要性」について語られました。なぜなら指導者が軍事的な面に弱いと、国を亡ぼすことも十分にありえるからです。

そして「軍事的な面」は、この「光と闇の戦い」においても、やはりまったく同じことが言えるでしょう。「戦^{いくさ}」ということについて、ゼウスは初期の霊言の中で、次のように教えてくださっておられます。

私は、数多くの戦をこなしていくなかで、必要にかられて、「戦の要諦(物事の大事な点)は、敵の戦略をいち早く見抜くことにある」と知った。

「敵を知り己を知れば百戦危うからず」、これは『孫子の兵法』の言葉ですが、ゼウスが述べられたように、敵の「戦略」をいち早く見抜いた上で、こちら側が「戦略」を立てることができれば、たしかに「戦^{いくさ}」は有利になります。

では、我々が光の戦士として、この光と闇の戦いに勝利するために、一体いかなる戦略を立てれば良いのでしょうか。

やはり「アレルギー」というものは肉体の不調ですが、「トラウマ」というものは心の傷なので、私たち宗教者は心の医者として、もしくは心の看護師として、日本国民の心の傷を癒していく必要があります。

たとえば原因不明の理由から、高所恐怖症であった男性が退行催眠を行って、潜在意識の中にある赤ん坊の頃に、看護婦さんが手を滑らせていた記憶を取り戻すと、表面意識から恐怖心が消えるということがあります。これと同様に、「トラウマ」という知らぬ間に築かれた心の傷は癒すことができるのです。

それに何よりも現代の日本人も、過去世では必ず真理に触れているために、日本人のトラウマを癒し、拒絶反応を取り除いて、素直な心で仏法真理に触れさえすれば、やがては「スコトーマ(心理的盲点)」も消えてなくなり、いずれ主の教えの尊さが分かっていくことでしょう。

行基菩薩に習う伝道方法

では、どうすれば、私たちは心の医者として、多くの日本人の心の傷を癒していけるのでしょうか。

やはり私は、この時に必要なこととして、主のかねてよりの願いである、「僧団のイノベーション」ということが必要不可欠あると考えます。

すなわち弟子の力で法輪を転じて、大伝道を行っていくためには、日本国民の心の傷を癒さなければならないわけですが、しかし日本国民の心を癒すためには、まずは当会の側がイノベーションしなければならない、そう私は述べているわけです。

総裁先生は、私たち仏弟子に対して、『どうすれば仕事ができるようになるか』において、「**永遠に未完成のものを求め続けなければいけない**」と教えてくださっておられます。

あるいは『リーダーに贈る「必勝の戦略」』では、「**イノベーションしつづけ、常に創意工夫をして、新しい戦略を組み直せるような組織や個人でなければいけない**」と、イノベーションの重要性を教えてくださっておられます。

さらに『凡事徹底と成功への道』の中で、「**幸福の科学を始めてから、私が組織文化をつくっているつもりでしたが、現実はそのようになってはいませんでした。実際には、転職で入った人がいろいろなところの“企業文化”を持ち寄ってやっていたわけです**」と説かれました。

この主のお言葉からも、『幸福の科学』は組織文化には問題があり、イノベーションをおこなさなければならないことは歴然なわけです。

これはつまり、個人において反省し、心境が変わることによって人生が開けていくことがあるように、僧団においてもイノベーションし、組織文化が変わることによって法輪が転じられていくこともあるでしょう。

では、私たちの僧団は、一体いかなる方法でもって、イノベーションを成し遂げ、法輪を転じていけば良いのでしょうか。

総裁先生は、『ユートピア創造論』「第3章 天使の条件」の中で、「**現状維持即脱落**」ということも教えてくださっておられます。あるいは『忍耐の法』「第1章 スランプの乗り切り方」では、「**もし、スランプの理由が、能力、あるいは、仕事のやり方が、今までどおりの延長線上では行けないために、壁に突き当たった**』ということであるならば、**考え方を変えなくてははいけません**」とも教えてくださっておられます。

また『創造の法』の「まえがき」にはこうあります。

まえがき

これからの時代、過去の延長上に未来は築けないだろう。昨日の成功を今日は捨て去り、今日の成功を、明日は破壊し、さらなる創造の新境地を拓く。そうであってこそ、未来に生きる人たちにも夢が花咲くのだ。

私たちは、日々に老化させ、朽ち果てさせようとしている見えない力と闘っている。

いままではこれでうまく行ったという意味での『常識』を墨守している人たちは、滅びていく種族である。

以上のことから、「これまでとは異なる新たな伝道、救済活動がある」と言えるでしょう。

そして私が提言する「新たな伝道・救済活動」とは、かつて行基菩薩が土木事業を行って、人々を政治的に救済しながら、スーパー説法を行って伝道を行っていた活動に似ております。

つまり行基菩薩という方は、まずは「政治的アプローチ」から入って、次に「宗教的アプローチ」を行って伝道していたわけです。

当時は読み書きもできない人も多く、食べていくことも困難な貧しい時代でした。そんな貧しい時代の中、行基菩薩という方は、まず土木事業という形で「政治的アプローチ」を行って、大衆の心に寄り添ってから、説法という「宗教的アプローチ」を行っていたわけです。

もちろん現代の日本において、「宗教的アプローチ」によって、ストレートに伝道できる方に対しては、そのままそうすべきであります。

しかしこれまでの伝道方法で、伝道が成功しているのであるならば、すでに日本は仏国土となっていたことでしょう。なぜならその成功パターンを、他の支部にも持って行けば良いからです。

しかし現代の日本国民の心には、「トラウマ」と「スコトーマ」があるために、なかなかストレートな伝道が通用しないわけです。

だからこそ行基菩薩が土木事業を行われたように、現代においても「新たな政治的アプローチ」を行ってから、次に「宗教的アプローチ」を行って伝道を行っていくべきであり、そうした戦略もある、と私は主張しているわけです。

実際に、積党首の後援会長をされている方は、もともと信者ではありませんでした。しかし彼は国防意識が高く、「どこかに一つくらい、中国から日本を守ってくれる政党はないか」と思い、様々な政党のマニフェストを取り寄せて、『幸福実現党』の政策の素晴らしさを知って黨員になりました。

そしてその後援会長の方が、『幸福の科学』はおかしな宗教じゃなさそうだと思って、フラットな目で当会を見始めたところで、『太陽の法』を献本されて三帰されました。つまり政治から宗教に目覚めたわけです。

こうした「政治的アプローチ」によって、信仰に目覚めるということは、おそらく日本全国で起きていることでしょう。

新たな政治的アプローチ

そしてこの「最初に、政治的アプローチを行ってから、次に宗教的アプローチを行って導いていく」ということが、やはり僧団の一つの大きなイノベーションに繋がると言えるでしょう。

なぜなら、私が述べている「政治的アプローチ」とは、これまでの『幸福実現党』にはまったく存在しない、

「新たな政治的アプローチ」だからです。

もし、これまで通りの「従来の政治的アプローチ」で『幸福実現党』が支持者を増やして、選挙に勝ち、それが伝道にも繋がっているのならば、すでに『幸福実現党』は国政選挙にも勝利していたことでしょう。

しかし現実として、『幸福実現党』の地方議員が50人名に増えたといっても、公明党も共産党も、すでに共に約2500人ほどの地方議員を抱えております。両党の地方議員を合わせると5000人を超えるために、この光と闇の戦いにおける、地方議員の戦力差は100分の1ということになります。

自民、公明、共産などは、市議会議員を幾年か務めたら県議会議員になり、県議会議員を幾年か務めたら国会議員になる、というエスカレーターが出来上がっている一方、『幸福実現党』には、そのエスカレーターがまだないために、その戦力差はさらに大きいと言えるでしょう。

ですから私が述べる「政治的アプローチ」とは、「従来のもの」ではなく、「新たなもの」です。

そして「新たな政治的アプローチ」を行っていくためには、僧団にイノベーションが起こらなければなりません。

むしろ僧団にイノベーションが起こらなければ、私がこれからご紹介する「新たな政治的アプローチ」も成すことは敵わず、本書を書いている私の願いも、ただ虚しく終わると言えるでしょう。

ですから、まず最初に私がお伝えしたいことは、あくまでも「新たな政治的アプローチ」であり、そして「新たな政治的アプローチ」を行うためには、「僧団のイノベーション」が必要不可欠であるということです。

異質の知の統合

では、「イノベーション」というものは、どうしたら起こるのでしょうか？

総裁先生は、『幸福の科学興国論』の中で、「『知の原理』を入れたということは、宗教としては、かなり革命的なことですし、幸福の科学が、時代の変化とともに、『時代適合性』を発揮するためのイノベーション(革新)をしていかない限り、宗教として生き残れないことを意味しているのです」と説かれておられます。

では、どうすれば私たちは、「知の原理」を駆使してイノベーションできるのでしょうか。総裁先生は、『大学生からの超高速回転学習法』の中で、次のように教えてくださっておられます。

やはり、異質なものを知っていなければイノベーションは起きません。要するに、自分がしたことしか繰り返せないという“竹槍で突撃ばかり繰り返している戦い方”をしていたら、イノベーションは起きないのです。

そういう意味で、ほかの考え方や学問を知っている場合、それらを結合することによって、新しい考え方が生み出されることがあります。

すなわち「知の原理」を入れたことが、『幸福の科学』の「イノベーション」に繋がり、そして「イノベーション」というものは、他の考え方や学問など異質なものの同士を統合することによって、新しい考え方を生み出される、そう総裁先生は教えて下さっているわけです。

では、この「異質な知識の統合」の時に、必要なものとはなんなのでしょうか。

総裁先生は、『選ばれし人となるためには』の「第6章 信仰者としての成長」の中で、組織の問題点について、次のようにお説きになられておられます。

私は、幸福の科学を二十年以上運営してきましたが、組織としての問題点のほとんどは、基本的に、こうしたヒエラルキー(階層制)の問題から発生しています。【中略】

そこで、今、教団をできるだけ自由な気風に変えたいと努力しているところです。

宗教の組織は、軍隊によく似ていると言われており、階層性が非常に強いのですが、【中略】上にある者には、「謙虚さ」が求められますが、下にある者や低い立場にある者には、「勇気」と、自分で磨き出すところの「自信」とでも言うべきものが必要とされるのです。

私たち信仰者は、イエス様より『信仰薄き者たちへ』と言われてしまいました。

ですから私たちには、まさに信仰者としての成長が求められています。

そして総裁先生は、この『信仰者としての成長』というご説法の中で、『幸福の科学』の組織としての問題点

は、ほとんどヒエラルキー（階層制）から発生しており、だから上にある者は出来るだけ謙虚になり、多くの人の声に耳を傾けなければならない、逆に下にある者は卑怯者になることなく、勇気と自信をださなければならない」ということを教えてくださっておられます。

以上のことから、宗教の中では、まだまだ私のような若輩者が、勇気と自信をもって、新たな意見や知識を述べて、異質な知の統合を行っていくことが、『幸福の科学』のイノベーションに繋がっていくことは容易に想像できます。

一年間に千冊読む気概

では、私たち仏弟子は、一体いかなる新たな意見を述べて、何の知を深めて、そして異質な知識を統合すれば良いのでしょうか。総裁先生は、『大学生からの超高速回転学習法』の中で、こうも教えてくださっておられます。

一九九二年ごろ、私が天上界の行基菩薩から専門のことについて指導されたことなのですが、「宗教家なのだから、『宗教について知らないことがある』ということは恥ずかしいことだ」という話でした。

「どんなことであっても、『聞いたことがない』ということであっては恥ずかしい。全部が全部、精読できないかもしれないが、一冊、五分でも十分でもよいので、宗教に関する本は、読んだことがないよりは、読んだことがあるほうがよいのだ。【中略】

やはり、一年間に千冊は読みなさい！」と言われたわけです。

「宗教家として宗教について知らないことがあってはいけない。一年間に千冊は本を読みなさい」、この行基菩薩の言葉は、私たち仏弟子の心を非常に強く打つものがあります。

しかしこの行基菩薩の言葉を逆から考えてみると、「宗教、もしくは全人類救済に関係しない知識や情報」などというものが、果たして本当に存在するのでしょうか？

たとえば今、日本の人々は心病むと、お寺にも神社にも、創価学会や統一教会にも足を運ぶことなく、「〇〇クリニック」に通って、薬を貰っております。こうしたことを考えれば、「精神医学」もまた宗教に関係するものと言えます。

また、主より私たち仏弟子は、「色情地獄」について詳しく教えて頂いております。

2019前に『東京貧困女子』という書籍が発売され、この書籍の中では、学費のためにカラダを売る女子大生たちのショッキングな姿がリアルに描かれていて話題となりました。しかしそれからわずか4年後の2023年、同じ作者が『同人AV女優』という、さらにセンセーショナルな書籍を書きました。つまり2022年に国会で「AV新法」が成立したことで、逆にセクシー女優の生活が成り立たなくなり、セクシー女優の一般化、同人化が進んだことによって、アダルトビデオに出演する女性の数が増えているというのです。

かつて日本でヘアヌードが解禁される際、主は日本全土が色情地獄化することを危惧されておられましたが、まさに今、主の言われた通り、日本の色情地獄化が猛スピードで進んでいるわけです。そうなるとこうした書籍もまた「宗教および全人類救済」ということに関して、完全には無関係なものとは言えません。

すなわち「情報」ということについて考えるならば、「宗教および全人類救済」ということに無関係な書籍など本当に存在するのか？という疑問さえ沸いてくるわけです。

一年間に千冊の書籍を読むとなると、1日に平均して最低2冊以上は読まなければならないために、なかなかできるものではありません。

しかしそうした気概を持って、宗教および全人類救済に関する「情報」を集めることは大切と言えるでしょう。

仏法と情報は異なる

そして「情報」ということについて、総裁先生は『I Can! 私はできる!』の「第3章 創造的人間となるためには」の中で、「仏法真理の学習と情報収集の努力を」ということを次の教えてくださっておられます。

創造的人間とは、どのような人でしょうか。それは、「素晴らしき新世界をつくるための力になる人」であり「そのために努力する人」です。古いタイプの人間は何も創り出せず、この世界にほとんど何も付け加えることはできませんが、これから先の世界においては、仏法真理に基づいて、どんなものでも創り出すことができます。言葉を換えれば、まずは「待ちの時間」が必要であり、その間に数多くの努力精進を積み重ねていくことが求められるわけです。

この努力精進とは当然、仏法真理を学ぶことでもありますが、それに加えて、「この世の新しい情報を数多く知らなければならない」ということも特に言っておきたいと思います。今は新しい時代の始まりです。また、日本や他の国に関する古い時代の世界史も当然、知っておかねばなりませんし、海外伝道を志しているのであれば、やはり、それらの国の歴史や思想、意見についても知っておかねばなりません。

以上のことから、私たち信仰者は、学ばなければならないことがたくさんあることが分かります。

そしてこの中で主は、明確に「仏法真理の学習」は当然であるけれども、しかしそれと同時に、「情報収集の努力」を怠ることなく行って創造的な人間になることの重要性も説かれておられます。

これはすなわち、主は「仏法」と「情報」を分けられながらも、その両方の学習と収集が大切であると教えてくださっているわけです。

だからこそ、次に我々仏弟子が考えなければならないことは、「仏法とは何か?」、「情報とは何か?」ということだと私は思います。

なぜなら主が明確に「仏法」と「情報」を分けられている以上、私たちが帰依している「仏法」と、世に溢れている「情報」を、きちんと定義して分ける必要があるからです。

わたくし与国秀行は、仏陀に帰依し、仏法に帰依し、僧団に帰依している仏弟子ではありますが、しかしたとえば「9 1 1テロ」などに関しては、かなり他の仏弟子と異なる認識を持ち、意見を持ち、そしてそれをネットを通じて世に発表しております。

そのために「与国は教えに反しているのではないか?」という意見もかなり多く散見されます。

しかしそれはあくまでも、「9 1 1テロ」に対する「情報」の量の違いによるものであり、「仏法」と「情報」は明確に異なるものだからです。

あくまでも私たちが帰依しているのは、「仏・法・僧」の三宝だからです。

そして仏法には帰依しつつも、しかし情報量が異なれば、意見が異なることも当然、生じるわけであり、そうした多様な意見があることもまた、「自由、民主、信仰」と言えるのではないのでしょうか。

仏法とは永遠なる存在

すなわちこれから私が述べる「新たな政治的アプローチ」は、あくまでも「情報」によるものであり、「仏法」ではないわけです。

そのために、改めてここで今一度、「仏法とは何か?」、「情報とは何か?」ということを考え、そして明確に定義する必要があるわけです。

そして「仏陀を見る者は法を見る」を教えて頂いているように、仏陀とは永遠なるご存在であり、造物主です。

ならば仏法もまた永遠なる存在です。

『太陽の法』には、次のように記されております。

「**仏法真理**」という言葉があります。仏法真理とは、仏の心、仏の掟、仏の生命の流転する姿です。そしてまた、人類の過去、現在、未来をおりなす一本の黄金の糸のことを意味します。

この「**仏法真理**」という名の黄金の糸は、人類史のなかで、さまざまの織物を織って、人々の心を寒さからまもってくれました。あるときは、その織物が、インドに生まれた釈迦の教えであったり、中国に生まれた孔子を中心とする儒教であったりもしました。また別の時には、イスラエルに生まれたイエス・キリストの愛の教えであったりしました。

仏法真理とは仏の心であり、過去、現在、未来をおりなす一本の黄金の糸です。

そして私たちが帰依している「**仏・法・僧**」こそ、人類にとって、あるいは大宇宙にとって「永遠の宝物」で

す。すなわち「仏法」とは、まさに「仏の慈悲」であり、私たち信仰者が悟りの縁をいただいている光です。

言葉を変えれば仏法真理とは、私たち仏の子を「本能の愛」から、「愛する愛」、「生かす愛」、「許す愛」、「存在の愛」へと飛翔させ、「愛の発展段階」を駆け昇らせていく、「魂の親である仏の愛そのもの」です。

もしくは「法」とは、光の存在である私たちを、「知の発展段階」を駆け昇らせていくことで、地球に仏国土ユートピアを築き上げる光です。

主は「知の発展段階」について、『幸福の科学の十大原理（下巻）』「第1章 知の原理」の中で、次のように教えてくださいました。以下は私の「知の発展段階」の要約です。

知の第1の段階として「知的格闘の時代」があり、進学、就職、出世といった「手段のための学問」ではなく、限らない叡智に向かって飛翔していく「目的としての学問」がある。

知の第2の段階として「不動の知の確立」があり、精進を徹底的に続けて、忍耐しながら自信を蓄積していくことで、「不動の知」に至る。

知の第3の段階は「奉仕の知」であり、自分の個人的な悩みを解決するとか、自らの心の平安や幸福感のための知ではなく、より高次なものに奉仕するための知であり、これは六次元光明界の知の世界から、七次元菩薩界の愛の世界へと飛翔していくものである。

そして知の第4の段階になると「根源的思想」となり、これは「如来の段階における知」であり、ソクラテスやプラトン、中国にあっては孔子のごとき知、イエスや釈尊のごとき知であり、根源的な思想を世に問うて、時代を変え、文明を変える大きな知の段階である。

このように「知の発展段階」とは、まさに仏性を宿した私たち人間が、四次元から五次元善人界、六次元光明界、七次元菩薩界、そして八次元如来界へと悟りに到る道です。

あるいは「仏法」とは、菩薩にいたるために欠かせない八正道、もしくは菩薩から如来へと至るための六波羅蜜多、こうした「反省に深く関わる仏の慈悲」です。

そして愛、知、反省からの発展があります。

しかしながら、たとえば現代の左翼教育では、「日本は侵略戦争を行い、真珠湾を奇襲攻撃した」と教わりません。これは一つの「情報」です。

しかし少し歴史を勉強してみると、「日本はA B C D包囲網を作られ、真珠湾攻撃をせざるを得ない状況まで、アメリカに追い詰められていた」という事実が分かります。これも一つの「情報」です。

そして近年、明るみになった真事実として、「アメリカの公式文書『ヴェノナファイル』が公開されたことで、実はルーズベルト政権には数多くの共産主義者がいて、彼らはソ連のコミンテルンと繋がっていて、日本を追い詰めるように指示を出していたのは、実は共産国家ソ連であった」ということが分かりました。これも一つの「情報」です。

しかも後ほど詳しくご説明いたしますが、「ロシア革命を起こしたレーニンやトロッキーといった、ソ連の政権の中核にいた者たちも、共産思想を説いたマルクスも、あるいはルーズベルトもユダヤ人を自称する者であった」という事実があります。「共産主義にはユダヤ人と自称する者たちが深く関わっている」という事実が近年、明らかになってきたわけです。これも一つの情報です。

すなわち「仏法」に比べて、はるかに取るに足らない「情報」というものは、「真珠湾攻撃」というたった一つの出来事をとっても、これだけ大きく変化、変転してきたわけです。

こうした変化変転する知識や情報は、真実から遠ければ遠いほど発展には貢献せず、真実に近ければ近いほど発展に貢献すると言えるでしょう。なぜなら左翼のように、「真実」を知らなければ知らないほど判断力が鈍り、「真実」を知れば知るほど、高い認識力と判断力を持つことができるからです。

ですから「仏法真理の学習」と共に、「情報収集の努力」も行って、高い判断力を身につけ、創造的な人間になることも大切と言えるでしょう。

しかしそれでもあくまでも「情報」は、ただの「情報」です。

ですからただの「情報」は、「愛の発展段階」にも、「知の発展段階」にも、「八正道」や「六波羅蜜多」にも貢献することはありません。

「イスラム教徒が9月11日にワールドトレードセンタービルに飛行機で突っ込んだ」、こんな変化変転して

いく「情報」を、いくらたくさん集めたところで、人は悟ることはできないわけです。

このように私たち仏弟子が帰依している「仏法」とは、永遠なる光であり、仏の愛と慈悲であり、四正道に深く関わる「宇宙の宝物」であると、そう言えるはずですよ。

知における中道

そして私は、私たち仏の子に対して、分かり易く様々な知識や教養を織り交ぜながら、法はお説きくださいますが、しかし知識や情報において、触れておられないものもごさいます。

たとえば内閣府は今、2050年に向けて、「ムーンショット計画」なんてものを発表し、国民が仮想空間で過ごしていくために、一人一人にアバターを付ける、なんて愚かなことを政府は発表しています。しかし総裁先生は御説法の中で、過剰なデジタル化については警鐘を鳴らされましたが、「ムーンショット計画」そのものについては触れられたことはありません。

また岸田総理は「グレート・リセット」ということも述べておりますが、主はお隠れになれる前、この「グレート・リセット」という言葉そのものを語られたこともごさいます。

仏法真理を知らずに、いくらこんな知識や情報ばかり集め、教養を深めたところで、たとえその見栄えは良くとも、まさにそれは「砂上の楼閣」と言えるでしょう。

つまり私が、信仰者であられる皆さまに何が言いたいのかと言うと、「主は、日本に幸福維新を起こし、地球に仏国土ユートピアを築くだけの法は、すでにお説きくださいましたが、しかし情報や知識の中には、たしかに主が触れられていないものもある」ということです。

すなわち私たち仏弟子は、「宗教家として宗教について知らないことがあってはいけない」ということを前提に、主と一体となるべく「仏法」を学び、悟りを深めつつも、しかし主にぶら下がることなく、「些末な情報」や「ガラクタの知識」は、自分たちから取りに行き、より創造的になり、より高い認識力と判断力を身につけなければならないわけです。

それこそが主が『甘い人生観の打破』の中で言われていた「インディペンデント」、すなわち「自立」と言えるのではないのでしょうか。

主は『甘い人生観の打破』の中で、こう言われました。

自分でやれることは自分でやって、自分の足場を固めて、自分が生きていける力をつけてこそ、家庭を営むこともできれば、自由な意見を発言することもできるし、社会人として一人前に認められて、その言葉が通じるようになるということです。「その世界が当たり前なのですよ」ということを知ってもらいたいです。

私たちにだって「言論の自由」がありますけれども、その「言論の自由」を行使するためには、インディペンデントでなければ無理なのです。【中略】

自立できないと、人を救えないのです。

「私たちは主を信じ、主を愛し、主と一体となる」ということを教えて頂いておりますが、しかし「人を救うためには自立しなければならない」とも教えて頂いているわけです。

「一体となって自立する」、この矛盾した意味を、私たちは説き明かさなければなりません。

信仰心は、仏の子である人間と魂の親である仏を繋ぐ、大切な一本の絆です。

ですから私たち仏弟子は、信仰では主と一体となりつつも、しかし主にぶら下がることなく自立し、主がお隠れになった今、変化変転する知識や情報は、努力して自分で探し求めて、創造的にならなければなりません。

私が言う「自立」とは、けっして「信仰を捨てろ」とか、「ミニ教祖になれ」とか、もちろんそんな下らないことではありません。

なぜなら真の仏弟子であるならば、主と一体となるべく、永遠に努力精進し続けなければならないことを知っているからです。

しかしながら、「仏法真理の学習」と共に、「情報収集の努力」も怠らないことが、「知的正直さ」という意味における中道と言えるのではないのでしょうか。

水平権力を築く鍵

そして宗教および全人類救済に係る情報となれば、その量は膨大となり、とても一人の人間で集められるものではありません。

だからこそ、私たちは協力し合って「情報収集」を行い、そして「情報交換」をしなければならないわけです。

そして人にはそれぞれ一長一短があり、魂の親である仏は、子である私たちの個性を許してくださっております。

ですから「情報収集の努力」を怠ることなく行っていく時、個性の分だけ、必ずその情報の質と量に差が生じます。そのために役職の上下を超え、部署の左右を越えて、上下左右という縦と横での情報交換、意見交換がなされていくことは、自然と言え自然かもしれません。

「あの人はこの分野の情報に長けている」、「あの人はこの面は弱い、この面では精通している」となれば、自然と世の中を改革すべく、いろいろなところで個性様々な人が集まって、「情報交換」を行わなければならないと思います。

そして自らが得た知識や情報を、仲間と交換していくことで、幸福維新が起きてきます。

なぜなら主は、『正義と繁栄』において、司馬遼太郎氏の言葉を引用されながら、「明治維新の志士たちは、現代で言うとマスコミの役割に近い仕事をしていた」と仰られておられるからです。

そして私たち仏弟子が、「情報交換」を行い、マスコミ的な仕事を成していく時、そこに生じるものこそ「水平権力」です。

主は『宗教としての包容力』の「第2章 道を拓く力 2 今、幸福の科学に必要な『水平権力』」の中で、次のようにお説きくださっております。

権力には、「垂直権力」と「水平権力」があるのです。

ところが、ともすれば、われわれは、垂直権力的に、「出世すれば人を使える。動かせる」という考え方をします。

当教団にも、やはり、ピラミッドがあって、ピラミッドの上から命令すれば、下は、そのとおりに、軍隊のように動くでしょう。しかし、水平権力の部分が弱くなっているのです。

要するに、今、「それぞれの人がお互いに横で話し合っ、『こういうふうにしようじゃないか』というかたちで力を発揮する」というところが弱いので、ここを強くしなければいけないのではないかと述べているわけです。

【中略】

今、当会に必要なものは、この「水平権力」だと思います。すでに人はたくさんいるのです。しかし、カニが穴を掘るように、個人として自分の穴だけを掘っていたら、力が出ないでしょう。やはり、個人はバラバラの力しかないわけです。

すでに述べましたように、主は『信仰者としての成長』の中で、「幸福の科学の組織としての問題点のほとんどは、基本的にヒエラルキー(階層制)から発生している。教団をできるだけ自由な気風に変えたい」と仰られました。しかし今、ご紹介した『道を拓く』では、「当会もピラミッドがあって軍隊のように動き、水平権力が弱くなっている。今、当会に必要なのは水平権力が必要である」と仰られております。

ならば私たち信仰者は、主のお言葉に基づいて、自由な気風に変えるべく、「水平権力」を築かねばなりません。

そして軍隊型とも言える「垂直権力」の中に、自由闊達な「水平権力」が築かれ、それと共に「異質な知識の統合」が行われていく時こそ、僧団にイノベーションが起きてくることでしょう。

主より、「私が『幸福の科学』の組織文化をつくっているつもりでいたが、現実にはそうじゃなくて、転職で入った人がいろいろなところの“企業の文化”を持ち寄っている」と言われた組織文化にイノベーションを起こすためには、やはり「水平権力」を築きながら、「異質な知の統合」を行っていくことは必要不可欠と言えるでしょう。

「垂直権力」と「水平権力」、この2つの力が発揮され、一致団結してこそ、主の願われている「あるべき僧団の姿」と言えるのではないのでしょうか。

『エル・カンターレへの祈り』の中で、「我ら一致団結し、大願船となり、一切の衆生を救うことを誓います」

とありますように、私たち信仰者が主と一体となると共に、信仰者同士も一致団結しなければ、この光と闇の戦いに勝てるわけもなく、一致団結の鍵とは「水平権力」ではないでしょうか。

そして私たち信仰者が、「水平権力」を立ち上げるその鍵は、「主と一体とならん」という気概で「絶対的信仰」を堅持しつつも、「千冊の書を読まん」という気概でもって、「情報的自立」が必要不可欠と言えるでしょう。

啐啄同機と野性の野鴨

しかしもしも仮に、仏弟子が「仏法」と「情報」を同じものと捉えて、主の言葉の中からは「情報」を得ようとしなければ、「主はこう言われた」、「先生はああ言われた」と語るようになり、それではただの訓誥学に陥ってしまうことでしょう。

そしてもしも仏弟子が訓誥学に陥ってしまったのなら、それは仏弟子が、「情報収集の努力」を怠ることに繋がり、仏弟子が「シンカブルマン」ではなくなることを意味し、それでは結果的に、僧団全体の創造性も落ちていくことでしょう。

それに何よりも、「仏・法・僧」の三宝のみならず、変化変転していく「情報」にまで帰依してしまうのなら、それは主にぶら下がることを意味し、間違った信仰とも言えるでしょう。

それにももしも仮に、「仏法」と「情報」を同じものと捉えたのなら、部署を超えて、役職を超えて、上下左右で自由闊達な情報交換、意見交換がなされることはないでしょう。

なぜなら仏弟子は皆、「仏法真理の学習」は行っているのですから、悟りには違いはあっても、情報の量と質には差がなくなってくるからです。

ですから、もしも仮に「仏法」と「情報」を同じものと捉えてしまったら、「情報交換」が行われなければ、マスコミ的な動きも行われず、「水平権力」も築かれず、「垂直権力」だけが、僧団の中に存在することになります。

そしてもしも「垂直権力」しか存在しなければ、僧団は軍隊型の組織となり、上意下達の指示だけが上から下に降りてきて、下の立場にある者は自然と自由が奪われ、たとえ自由に動きたくても上の許可がなければ自由に動けず、「指示待ち族」を演じざるを得なくなります。もしもそうなれば、生産性が落ちていきます。

そしてもしも「仏法」と「情報」を同じものと捉えて、「水平権力」が築かれなければ、「異質な知識の統合」も行われることもなく、僧団にイノベーションが起こることもないでしょう。

それに何よりも、「垂直権力」のみがあって「水平権力」がないならば、僧団が一致団結しているとも言えないでしょう。

ですから私たち仏弟子は、「仏法」と「情報」をきちんと分けて、「仏法真理の学習」は当然としながらも、しかし訓誥学に陥ることなく「情報収集の努力」も行い、シンカブルマンになり、創造的になり、マスコミ的に情報交換を行い、そうやって水平権力を築き上げ、異質な知識の統合も行って、僧団にイノベーションを起こし、一致団結していかねばなりません。

そしてそれはまさに、禅で言うところの「啐啄同機（そったくどうき）」と言えるでしょう。

すなわち雛が卵から孵る際、雛は卵の内側から殻を口ばしで突きますが、親鳥は優しくその時を待って、殻を取り除いてくれるわけです。これが同時でなければならず、また雛鳥は自助努力するからこそ、親鳥の他力が臨むことによって、殻を破って新生することができます。

これと同様に、魂の親である主は、優しく子である私たちに法は説かれ、様々なヒントは与え、奇跡を起こす方法まで教えてくださいました。ならば私たちは、その主より与えられた法やヒントをもとに、自分たちの力でもって、幸福維新と大伝道を繰り広げていかねばなりません。

それが餌をもらい続けたために肥え太って死んでいく野鴨ではなく、渡り鳥としての本質を、いつまでも忘れることのない、野生の野鴨と言えるのではないのでしょうか。

それが主エル・カンターレの願われる、僧団のあるべき姿と言えるのではないのでしょうか。

第一章 ユダヤの謎

強大で数は少ないユダヤ人

さて、序章では、「仏法と情報は異なり、仏法は人類の宝だが、情報はガラクタである、しかし情報収集の努力も大切である」という話を、仏法真理に基づいてご説明させていただきました。

この一章から三章では、宗教および全人類救済に関する多くの「情報」をお届けします。

では、主がお隠れになっている今、私たち直弟子は、僧団にイノベーションを起こして法輪を転じるために、何の情報を得て、異質な知識を統合すべきなのでしょう。

まず、コロナウイルスが世界を襲い、ワクチン接種が始まり、多くの死者を出している中で、ロシアがウクライナに軍事侵攻し、日本をおよび世界は大不況に包まれている、果たして日本および世界で何が起きているのか、それを正しく理解し、認識しなければなりません。

そしてここで例え話として思い出して頂きたいのは、「オウム」です。

「オウム」という邪教の信者たちは、本当に麻原彰晃を救世主として信じておりました。そして彼らは、「オウム」に敵対する者を「ポア（殺害）」することは、相手の人間を悪業によって地獄に墮ちるのを救うだけではなく、より高い世界へと転生させることにもなると信じ、サリンをばらまいて大勢の人をポアして、世紀末を演出するためにも、国家転覆を本気で目論んだのです。

まさに狂い果てておりますが、しかし人間という生き物は、そこまで「狂った思想」を信じられるわけです。

どこかのご説法で私は、総裁先生から「天使にはお人好しの面がある」と教わったことがあります。『幸福の科学』の会員も、主より正しい教えを学んで、悟りを得て、真面目に生きている人が多いために、「悪が分からない」ということがどうやらあるようです。

しかし世界には、「どうしてそんなことをするの？なぜ！？」と思うようなことを、間違った思想と信念から行ってしまう人たちが、確かに存在するのです。

たとえば仏教には様々な宗派があり、「浄土宗や浄土真宗は他力信仰は仏教のストレートの教えではない」とも教えて頂いておりますし、一方で曹洞宗は唯物的な面が強く、また「密教が行っている護摩焚きは、仏教以前のバラモン教の拝火教である」とも教えて頂いております。

あるいは総裁先生から私たちは、「法華経にある『久遠実成の仏陀』という考え方があったから仏教は、キリスト教やイスラム教に負けることなく世界宗教になれた」と教えて頂きましたが、しかし「法華経」を重んじている『日蓮宗』は釈尊を本仏としている一方で、しかし日蓮亡き後に作られた『日蓮正宗』は、恐るべきことに日蓮聖人も末法の世に現れた本仏としています。

何が言いたいのかと言うと、紙も、本も、DVDも無い時代、「仏法」を正しく後世に伝えていくことは困難を極めて、仏教でさえもそれぞれ曲がってきた、ということです。

そして人類が知らなければならない問題点として、それは「ユダヤ教も同じである」ということです。

実はこの「ユダヤ問題」は、人類にとって、かなり重要であるにもかかわらず、この宗教問題に関する「情報」に疎い人があまりにも多過ぎる、というのが現状なのです。

と言っても、私はけっして「ユダヤ差別」をしたいわけでも、「ユダヤ問題」を前面に押し出したいわけでもありません。

しかしながら「新たな政治的アプローチ」ということを考える時、この「ユダヤ問題」をある程度は理解しないと、日本および世界で何が起きているのか理解できません。

これから詳しくご説明いたしますが、内閣府が言い始めた「ムーンショット計画」も、岸田総理が言い始めた「グレート・リセット」も、実は結局は、この「ユダヤ問題」が大きく関わっているのです。なぜ無駄に税金が上がり続けるのか、なぜ水道代や電気代が上がり続けているのか、なぜアメリカが必要にウクライナを支援するのか、「ユダヤ問題」を理解しないと、本当はさっぱり理解できないというのが真実です。

ですから、「新たな政治的アプローチ」を説明するにあたり、かなり遠回りではありますが、「ユダヤ問題」に触れなければならないと思います。

つまりこの「ユダヤ問題の根本に異質な知識の統合がある」というのが、私の本音です。

小説『十字架の女』が黙示録的な小説であり、そして『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」とは、終末の時代にメシアが降臨することを予言した書物です。その「ヨハネの黙示録」の3章9節には、こう記されてあります。

「見よ、サタン（悪魔）の会堂（教会）に属する者、すなわち、ユダヤ人と自称してはいるが、その実ユダヤ人でなくて、偽る者たちに、こうしよう。

見よ、彼らがあなたの足もとにきて平伏するようにし、そして、わたしがあなたを愛していることを、彼らに知らせよう。」

これは一般的には、「造物主の言葉が、黙示録のヨハネに臨んで語らせた言葉」と言われております。

つまり黙示録のヨハネは、メシアが現れ、至福の千年王国が始まっていく終末の時代において、ユダヤ人と自称する悪魔教徒が誕生する、しかし造物主は、その悪魔教徒たちをも愛しておられる、という謎めいたことを述べているわけです。

では、「ユダヤ問題」とは、果たしていかなるものなのでしょうか？

総裁先生は『救世の法』の「第4章 宗教国家の条件」において、ユダヤ人について、こうお説きくださっております。

日本人には、アメリカがイスラエルを支持する意味がよく分からないでしょうが、実は、アメリカにはユダヤ資本がかなり入っていて、アメリカのほとんどの大資本やマスコミはユダヤ系が握っています。そのため、アメリカには、ユダヤ系の意向に抵抗できず、イスラエルを応援せざるをえないところがあるのです。

このあたりの事情を知らないと、理解できないでしょう。

総裁先生のように、ニューヨークのウォール街で働かれた経験がある方ならば、よくご存じのことですが、実はウォール街で最も強い力を持ち、アメリカをはじめ世界の金融を動かしているのはユダヤ人です。

トランプ大統領の娘婿クシュナーもユダヤ人であり、トランプの娘のイヴァンカも、すでにユダヤ教に改宗しているために彼女もユダヤ人であり、トランプはイスラエル最親で知られています。

すなわちユダヤ人こそ、すでに地球規模で行われている「金融戦争」において、最も強い民とも言えるわけです。

そして総裁先生は、初期の頃の『未来への聖戦』の中で、「金融戦争」について、こうも教えてくださっております。

これからは、隣の国を奪うぐらい平気でやるようになってきます。

それは、国家レベルであるからなかなか信じがたいけれども、一步、国家から離れて、企業の世界を見てごらんください。今のアメリカなどで起きている企業の買収、M&A、これは国家を乗っ取るのと結局一緒なのです。これなどは手っ取り早い経済なのです。乗っ取ってしまう。会社ごともらって、自分の会社に入れてしまうわけですから、これは国を併合していくのとまったく同じ論理なのです。変わりません。かつてのその会社の歴史や文化や、そんなものは関係ないのです。トータルで利益が出れば、会社を買収して併合してしまうわけですから、これは国の併合とまったく同じ論理なのです。

「M&A」というカタチで金融規模の戦争が行われている、それがウォール街で戦ってこられた総裁先生の感想ですが、その最大の勝利者は、国家ではなく、民族であり、ユダヤ人なのです。

「ユダヤ人」の人数は少なく、全世界にはたったの1500万人ほどしかおりません。これは80億人に迫る全人類から考えれば、わずか0.2%未満であり、1%にも満たない僅かな数字は、統計学的に考えれば数字としては扱われません。

しかしたったわずか0.2%しかいないユダヤ人たちが、ノーベル賞の受賞率では約20%、数学のフィールズ賞では約30%、チェスの世界チャンピオンでは約50%と、脅威的な数字を見せます。

総裁先生も『フロイトの霊言』の「あとがき」でも、「(フロイト)、ダーウィンやマルクスの唯物論の帝国に間接的に寄与した罪は重い。この三人に「神は死んだ」のニーチェを加えると、二十世紀を破壊したユダヤ人四人組ともいえるかもしれない。医学は今、霊界への眼を開かねばなるまい。」と仰られておられます。

ユダヤ人は、日本を戦争に引きずり込んだアメリカルーズベルト元大統領をはじめ、ハリウッドでは「邪神」

の関わりもウワサされるスピルバーグ、物理学では核兵器の理論を発見したアインシュタイン、「原爆の父」と呼ばれるオッペンハイマー、ネットの世界では『Google』のラリー・ページやセルゲイ・ブリン、あるいは『META (Facebook)』のマーク・ザッカーバーグなど、実に様々な分野において活躍しております。

世界には、大統領と共に首相がいる国がありますが、世界の国々の中で、大統領と首相が共にユダヤ人である国は、イスラエルとウクライナであり、ウクライナのゼレンスキー大統領とシュミハリ首相はユダヤ人です。

実はロシア・ウクライナ問題の根底には、「宗教問題」が根深く潜んでいるわけです。

逆を返せば、ユダヤを理解しないと、ウクライナ問題なんて理解できないのです。

東京の人口が約1400万人に対して、イスラエルの人口は約950万人ですが、そんな小さな国であるはずのベネット首相は、2022年3月、ロシアのプーチン大統領とモスクワで会談しました。ロシアがウクライナに軍事行動を開始して以来、外国の首脳と会うのは初めてのことでした。これが何を意味するか、それはユダヤ国家イスラエルは、小国でありながら強国だということです。

『タイムズ紙』が、まだ今のような「フェイクニュース」を行っていない頃、編集長を務めていた人物に、ヘンリー・ウィッカム・スティードという方がいましたが、その彼がジャーナリストとして、こう述べていたそうです。「学者も、政治家も、エコノミストも、ユダヤ問題を通過せぬ限り、ひとかどのものとはいえない」と。

つまり「ユダヤ」を見ないと『国際政治を見る眼』が持てないと述べているわけです。

実際に金融の世界では、『シティ・バンク』、『J・Pモルガン・チェース銀行』、『クレディ・スイス銀行』、『ロスチャイルド銀行』、証券会社の『ゴールドマン・サックス』、『モルガン・スタンレー』、『メリルリンチ』、保険業界の『プルデンシャル生命保険』、『GMキャピタル』、『ロイズ保険』、マスコミ業界では、『ニューヨークタイムズ』、『ワシントンポスト』、『CBSテレビ』、『NBCテレビ』、『ロイター』、『ウォール・ストリート・ジャーナル』、その他にも石油の『エクソンモービル』、『ロイヤル・ダッチ・シェル』、食品の『ネスレ』、電機の『フィリップス』、情報通信の『IBM』、航空機メーカーの『ボーイング』とこれらの世界的企業はどれもユダヤ系です。

もちろんユダヤ教の祖であるモーセも、キリスト教を興されたイエスも、あるいはキリスト教の初期の頃に集まってきたイエスの弟子たちも皆、ユダヤ人でした。

これを考えても、「全人類と比較すると、わずか0.2%しかいないユダヤ人であっても、けっして無視することができない」という意味がご理解いただけるはずです。

あえてもう一度、言っておきます。私は「ユダヤ問題」を前面に押し出したわけではありません。しかし「新たな政治的アプローチ」を考えていく時、「ユダヤ問題」を見なければ、政治の真相は絶対に理解できません。

邪神とレプタリンの陰

なぜ選民思想は生まれたのか？

主エル・カンターレは、「エローヒム」として中東で信仰されております。

ユダヤ教の祖モーセは、燃える柴の木から「我は在りて在るもの」という言葉を聞いて、ここから預言者としての活動が始まります。

そして経典『「ヤハウエ」「エホバ」「アッラー」の正体を突き止める』によれば、「我は在りて在るもの」というお言葉を語られたのは、まさに主エル・カンターレでした。ですからモーセを一部、霊指導していたのは、愛の神であられる主エル・カンターレでもありました。そして「エホバ」はゼウスであることが分かりました。

そしてこのヘブライ語の「エヘイエ・アシェル・エヘイエ（我は在りて在るもの）」という言葉から由来して、神の名の中には「ヤハウエ」という名前もあります。

しかし『「ヤハウエ」「エホバ」「アッラー」の正体を突き止める』の中で、不思議なことに、なぜか最後まで「ヤハウエ」を名乗る神は、自身の正体を明らかにされませんでした。

しかも初期の霊言の『大川隆法霊言全集 第6巻』の中で、モーセは「**悪魔の声を神の声と聞き間違えて、神**

に牛の生贄をするように聞いてしまった、しかし神は生贄など望まない」ということを告白しています。

単純に言って、『聖書』およびユダヤ教には、多くの謎があります。

実はユダヤ教には「バビロン捕囚」の時より、『バビロニア・タルムード』という教えが誕生し、一部のユダヤ教徒たちは、「モーセ五書」と言われる『聖書』を忘れてしまった、と言われております。

そしてこのバビロン捕囚の時の預言者の一人が「エゼキエル」と言います。この預言者エゼキエルは、かねてより「宇宙人とコンタクトしたのではないか？」と言われております。

預言者エゼキエルは、「メルカバー」という「神の乗り船」を目撃したと言われており、その「神の乗り船」は、4人の天使が動かす車輪によって進む、「空飛ぶ馬車」だったと明言しています。

神は霊的な存在でありますから、「乗り船」とか、「馬車」という表現には、何とも違和感があります。

わたしが見ていると、見よ、激しい風と大いなる雲が北から来て、その周囲に輝きがあり、たえず火を吹き出していた。その火の中に青銅のように輝くものがあつた。またその中から四つの生きものの形が出てきた。その様子はこうである。彼らは人の姿をもっていた。

おのおの四つの顔をもち、またそのおのおのに四つの翼があつた。

その足はまっすぐで、足のうらは子牛の足のうらのようであり、みがいた青銅のように光っていた。その四方に、そのおのおのの翼の下に人の手があつた。

この四つの者はみな顔と翼をもち、翼は互に連なり、行く時は回らずに、おのおの顔の向かうところにまっすぐに進んだ。顔の形は、おのおのその前方に人の顔をもっていた。四つの者は右の方に、ししの顔をもち、四つの者は左の方に牛の顔をもち、また四つの者は後ろの方に、わしの顔をもっていた。

エゼキエル書1章4節～10節

UFO研究家のアダムスキーは、『エゼキエル書』はどう考えても、スペース・シップとのコンタクト体験記である」と主張しております。また『NASA』の科学者ジョーゼフ・ブラムリッチも、「エゼキエルが見た物はまぎれもなく、別な惑星から飛来した宇宙船であつた」という説を主張して、『エゼキエルの宇宙船』という書籍まで書いております。

科学が未発達な時代であれば、UFOから異星人がやってくれば、誰もが「神」と誤解してしまうこともあるでしょう。ちなみに映画『太陽の法』には、今から8000年前の南米ペルーの人々が、レプタリアンのことを「神」だと信じており、次のようなシーンがあります。

まず、宇宙船の中で、神を名乗るレプタリアンが「生贄はどうした」と語り、人間のリーダーである人物に生贄を求めております。

すると宇宙存在のナレーションが次のように入ります。

その神を名乗る者の正体は、爬虫類型宇宙人レプタリアンであつた。

彼らは神を名乗って地球人を洗脳し、その者たちを使いながら、地球侵略の準備を進めていた。

洗脳した人間たちを使い、社会を混乱に陥れる。

つまり文明に介入する口実を作る。

あとは宇宙警察が来るよりも早く制圧し、星の仲間を入植させる。

実にズル賢いやり方だ。

そしてこの次のシーンでは、レプタリアンのことを「神」だと信じた人々が踊り狂い、「我々は神に選ばれた民なのだ」と叫んで、人々は熱狂しております。つまり映画『太陽の法』を見直してみると、「レプタリアンが神を名乗って人々を洗脳し、選ばれた民だと信じ込ませている」というシーンが描かれているわけです。

ここで興味深いのは、「選ばれた民」と考えていることであり、そして『旧約聖書』をバイブルとするユダヤの民にも、やはり「選民思想」があることです。

人類を家畜と見なすエンリル

また総裁先生が『「宇宙の法」入門』を説かれる際、総裁先生は次のように仰られました。

特定の方を順に呼ぶつもりではありません。幸福の科学指導霊団のなかで、この『「宇宙の法」入門』について、何かご意見のある方、あるいは、指導霊ではないかもしれないが、関心を持って見ておられ、「今まで自分は意見を述べていなかったが、このことに関しては何か意見を述べておきたい」というような霊存在がございましたら、今回、お話をいただければ幸いです。

それでは、降霊に入ります。

こうした約九十秒の沈黙の後、最初に現れたのはエンリルでした。そしてこの霊言の中で、エンリルは地球人に対して、こう言い放ちました。

—— 地球人にとって、宇宙人と交流することは、よいことなのでしょう。それとも、恐ろしいことなのでしょうか。

エンリル 何を言っているのですか。われわれが地球の神なんです。われわれが、遺伝子操作によって、あなたがたをつくってきたんです。対等の立場で交流ができるなどと思ってはなりません。

あなたがたは、遺伝子操作で生まれた家畜と同じなんです。

当会の信者ならご存じのように、エンリルはマゼラン星雲ゼータ星から来たレプタリアンであり、古代シュメールの嵐の神であり、荒神、祟り神の系統です。そのエンリルが地球人のことを「遺伝子操作で作った家畜」と呼んでいるわけです。

そして実際にシュメール文明では、神々のことを「アヌナキ」と呼んでおり、アヌナキの像が出土しているのですが、まさにその姿は爬虫類そのものです。さらにシュメール人たちも、自分たちのことを「ルル」と呼んでおり、この言葉の意味は「混ぜ合わせたもの」であり、これは「遺伝子操作」を連想させます。

ちなみに『旧約聖書』には、「ネフィリム」という謎の巨人も登場します。ネフィリムは「天から落ちてきた者たち」という意味です。当会の映画にもありましたように、レプタリアンの姿は非常に大きいために、かつてのシュメール人たちがレプタリアンのことを「神」と考え、そして「天から落ちてきた者」と呼んでいた可能性も十分に考えられます。



『「宇宙の法」入門』で四番目に登場したのが、ゼカリア・シッチンです。そしてゼカリア・シッチンは「アヌナキ＝ネフィリム」という考え方をとり、「古代宇宙飛行士説」を主張しておりました。「古代宇宙飛行士説」とは、古代に宇宙人が地球に飛来して、人間を創造して、超古代文明を授けたという仮説です。

ゼカリア・シッチンの「古代宇宙飛行士説」は、以下の通りです。

太陽系に存在する惑星ニビルは大気汚染、環境破壊が進んでしまい、ニビルの科学者たちは金（ゴールド）を使用すれば、ニビルの惑星環境は保存できると考えた。

そこで遙かなる太古の昔、エンキとエンリルが、太陽系内で金を採掘できる場所はないかと惑星ニビルから、地球にやって来た。

最初に降り立った地は、「直立した人々の地」という意味を持つ「エディン」と命名された。

彼らは遺伝子操作で人類を創造し、人々は彼らのことを、神々を意味する「アヌナキ」と呼んだ。

これはあくまでもゼカリア・シッチンの仮説に過ぎませんが、しかしエンリルが述べた話に共通性があります。主がお説きなされた『神々が語るレムリアの真実』によれば、エンキとエンリルは兄弟、ライバルであり、この二人の父が天空神アヌであり、アヌは主エル・カンターレであることが分かっております。

そして『旧約聖書』の「創世記」には、「ネフィリム」についてこうあります。

人が地のおもてにふえ始めて、娘たちが彼らに生れた時、神の子たちは人の娘たちの美しいのを見て、自分の

好む者を妻にめとった。

そこで主は言われた、「わたしの霊はながく人の中にとどまらない。彼は肉にすぎないのだ。しかし、彼の年は百二十年であろう」。

そのころ、またその後にも、地にネピリムがいた。これは神の子たちが人の娘たちのところにはいって、娘たちに産ませたものである。彼らは昔の勇士であり、有名な人々であった。

創世記 6 章 1 節～4 節

この『聖書』の言葉は、「レプタリンが人間の娘に恋をして妻にし、やがて彼らは人間に生まれ変わり、彼らはかつて勇敢に戦った勇士であった」と表現することもできます。それはまさに映画『宇宙の法～エローヒム編』に描かれている光景と言えるのではないのでしょうか。すなわちザムザのようなレプタリアンが、地球人に生まれ変わったということを、この『聖書』の記述は伝えているのかもしれませんが。

見逃せない邪神の存在

映画『宇宙の法』を見ると、黎明編でも、エローヒム編でも、エル・カンターレの御本体下生の時には、邪神や悪質宇宙人たちが地球に侵略を仕掛けていました。ならば現代もまた、そうした同じレベルの侵略の危機の時代であることは、十分に予想できます。

そして実際に、『ネバダ州米軍基地「エリア 51」の遠隔透視』、『中国「秘密軍事基地」の遠隔透視』といった主の霊査によれば、アメリカにも、中国にも、悪質宇宙人が入り込んでいることが分かっております。

そしてイギリス人ジャーナリストのデイヴィッド・アイクという方は、世界中を調べてまわるうちに、国際的権力の背後には、爬虫類型宇宙人レプティリアンがいると主張して、『大いなる秘密～爬虫類人～』という書籍を出版されています。そして彼は次のように述べています。

「レプタリアンが世界各国に入り込み、9 1 1 テロも彼らが起こした」

「ユダヤ人は加害者ではなく被害者です。」

ユダヤ人は実は己の利益ばかり主張する連中によって、何度も酷い仕打ちに遭ってきたのです。」

デイヴィッド・アイクが述べたように、この「ユダヤ問題」を奥深く見ていくと、ユダヤ人たちは加害者ではなく、むしろ被害者であることがよく分かります。

しかしなんと厄介なことに、一部のユダヤ人を自称している者たちが、「自分たちはユダヤ人だ」と主張することによって、問題の本質を反らして、「反ユダヤ主義」、「民族差別問題」にすり替えようとしていることも見えてきます。

また、わたくしと国は、元『フォーブス』のジャーナリストのベンジャミン・フルフォード氏と、2016年には「ユートピア活動推進館」で、2017年には「東京正心館」で対談イベントをさせていただきました。その対談の中でベンジャミンも、「国際金融資本の背後には地球外知的生命体がいる、彼らは悪魔ルシファーこそ神と考えており、宇宙人のことも神とか、天使と呼んでいる」と語っておりました。

また、『エデンの神々』という書籍を書かれたウィリアム・ブラムリーは、「UFO」とか、「宇宙人」には、さほどの興味も関心も抱いていなかったそうです。彼の考えとして、「これだけ宇宙が広大なのだから、きっとUFOや宇宙人という存在もあるのだろう」と考えつつも、しかし彼の頭の中に常にあったことは、「どうしたらこの地球という星から戦争が無くなり、世界が平和になり、軍事費に使われているお金が、貧しい国の人々にまで届くか」ということでした。

しかし戦争では、戦わない第三者が利益を得ていることがあります。たとえばナポレオン率いるフランスとイギリス連合軍との「ワーテルローの戦い」、その裏側で莫大な富を得ていたのは国際銀行家であり、ユダヤ人でもある世界一の超大富豪ロスチャイルドでした。こうしたことについて考えると、ウィリアム・ブラムリーは、「戦争の裏側で、第三者が利益を得るようなことは、果たして歴史の中にどれくらいあるのだ

ろう」と好奇心がわいて、それを調べてみたそうです。

すると驚くべきことに、1618年に行われた「三十年戦争」以来、近現代における国際戦争のほぼすべてが、戦争をしている当事国ではなく、別の第三者が利益を得ている、という驚愕の事実が明らかになったそうです。そして彼の調べによれば、なぜか不思議なことに、必ず最後はシュメール文明にたどり着き、同時にそれほど興味も関心も無かった宇宙人に行き着いた、と主張しています。

カナダのポール・ヘリヤー元国防大臣は、G8先進国の大臣を務めた方の中で、世界で最初に「宇宙人の存在」を公言した人物として知られております。その彼がワシントンで2013年に、政府の役人や軍の関係者40人と共にUFO情報を暴露するための公聴会を開きました。そのテーマは「国会が情報公開をしないのであれば、国民が実行する」というものでした。

彼は言います。「少なくとも4種類のエイリアンが何千年もの間、地球に来ている」、「少なくとも2人の宇宙人がアメリカ政府機関で働いている」、「情報開示を阻む、既得権を持つ『陰の政府』がアメリカには存在し、一方的に世界を支配しようとしている」、「宗教の違い等から生じる様々な不和を引き起こしている」と。

ここで興味深いのは、「世界を支配しようとしている」、「宗教の違いから生じる不和を引き起こしている」という点です。そして「宇宙の法パート0」と副題がつく『UFO学園の秘密』でも、こうしたやりとりがありました。

生徒A あいつだったんだ！学園に潜入してたレプタリアンは！

生徒B お前たちがアメリカや中国やロシアの軍に入り込んでいることも分かっているんだぞ。

レプタリアン アメリカに入ってるヤツらは仲間ではない！

競争相手だ！知恵比べ、力比べ、誰がこの星を手に入れることができるか、競い合っているのさ。

生徒B 宇宙協定違反だろ！

山羊型宇宙人 軍部が地球人の意志としてコンタクトを要求し、秘密保持を約束している。

一方的な介入とは言えず、我々としても手を出すことができない。

レプタリアン 勝負に勝てば地球は手に入る。

これがフィクションではなく事実ならば、レプタリアンたちは「宇宙協定」を見事にすり抜けながら、アメリカと中国の双方に入り込み、ライバルとして競い合いながらも着実に地球侵略を進め、さらなる地球介入のチャンスをうかがっていることになります。

8000年前の南米ペルーの人々が、レプタリアンのことを「神」だと信じていた時も、レプタリアンたちは見事に「宇宙協定」をすり抜けて、地球侵略を進めていました。

映画『ノストラダムス戦慄の啓示』でも、マゼラン星人たちは「**レプタリン星人の地球侵略は着実に進んでいる。結局、地球人に隙があり過ぎる。彼らは何度でも入り込んでいる**」と述べておりました。

映画『神秘の法』も背後にいたのは結局、レプタリアンでした。

そして『小説 十字架の女③〈宇宙編〉』を紐解き、モーセと関わりの深いヤイドロンと「裏宇宙の邪神」と呼ばれているアーリマンのやり取りを読み返すと、かなり邪神が古来より地球に介入していたのではないかと感じさせます。『小説 十字架の女③〈宇宙編〉』によれば、近年にもアーリマンはルーズベルトに入り、湾岸戦争でパパ・ブッシュに入り、イラク戦争でブッシュ・ジュニアに入ったのはエンリル系の邪神であり、「ゼーター星」の侵略者と述べています。

以上のことから、やはり主エル・カンターレの御本体の下生というこの奇跡の時代において、やはり邪神をはじめとする悪質宇宙人による地球侵略は、十分に考えられるわけですが、それが中国のみならず、ユダヤ人を自称する者たちにもおよんでいる可能性があるわけです。

日本人は非常に疎い問題

小さい強国イスラエル

そして『メシアの法』の「メシアの教え」において総裁先生は、こう説かれました。

（湾岸戦争やイラクの戦争の時）少女に「現地はひどい状態になっているんだ」というようなことを議会で話をさせたりして激昂させるというようなことをしましたが、それをやっていたのが駐米クウェート大使の娘だったというようなことも、あとで分かっています。

そうした計画があってイラク戦争等は始まったのだということが、あとから分かってきています。

ですから、日本人は今非常に疎いですが、それでも、「世界はいろいろな陰謀を仕掛けて、自分の国が有利になるようにどんどんやっているのだ」ということは忘れてはならないのではないかとこのように思います。

多国籍軍とイラクが戦った湾岸線戦争は、広告会社の『ヒル・アンド・ノウルトン』が画策して、クウェート大使の嘘泣きという陰謀によって始まりました。

そして映画『ノストラダムスの戦慄の啓示』では、高天原において神々が集まり、「このままでは米国との戦争は避けられまい」、「もっと多くの軍神を地上に送り込まねば」と神評定を行い、激しい議論を重ねております。

そこに酒に酔って現れた火之迦具土神ほのかぐつちのかみは言います。「まあ見ておれ、砂漠の地で米国相手にひと暴れ、まっ酒でも飲んで見物しているが良いさ、ハッハッハッハ！」と。そしてイラクのフセイン大統領として生まれ、アメリカと激しい争いを繰り広げます。

総裁先生の霊査によれば、イラクのフセイン大統領は、「足利尊氏」や「火之迦具土神」として生まれたことが明らかになっております。

日本が米国との戦で敗戦した後に、すでに日本の同盟国となっている米国相手にひと暴れとは、まだ米国内部には、何か日本を滅ぼすような邪悪なもの存在していることを指し示しているとも考えられます。

それがトランプ元大統領が述べている「ディープ・ステート」であり、ポール・ヘリヤーが述べた「陰の政府」、と言えるのではないのでしょうか。

以上のことから、主が語られた「日本人は非常に疎い」と言われた「陰謀」に対して、私たち日本の仏弟子たちは、日本を守り、世界を救っていくためにも、もう一段深く、真剣に考えてみるべきなのです。

「なあんだ陰謀論の話か」と思われるかもしれませんが、しかし悪魔や悪質宇宙人が「関ヶ原の合戦」のように、あるいは織田家と武田家が戦った「長篠の合戦」のように、正面から直接対決してくるとは到底考えられず、やはり悪魔や悪質宇宙人たちは、私たち地球人に対して、何らかの陰謀を仕掛けてきていることは歴然です。

今もレプタリアンたちは、見事に、そして狡猾に「宇宙協定」をくぐり抜けながら、大救世主が降りられた日本を侵略せんとし、地球侵略を進めていることでしょう。日本が取り返しのつかない状態になれば、地球は守られないでしょう。

それはすなわち、「政治には表もあれば裏もあり、陰からのはかりごと謀もある、確かに陰謀はあるから『国際政治を見る眼』を持たねばならない」と言えるわけです。

ヒントを与えて下さった

そしてこれから私は、法友の皆さまに、「膨大な情報」を基に、大いなる陰謀をお伝えしていきますが、実のところ主は、その「大いなる陰謀」について、私たちにヒントは与えてくれたのです。

主は『国際政治を見る眼』という御法話の中で、次のように仰られています。

だいぶ前から、大統領の生霊のようなものが、私のところに来始めているのを見ると、何となく、「当会が発信することが、『New World Order (新世界秩序)』の基準になっていくのかな。それを、政治が後追いしてくるのかな」というようには見えてきたので、当会の発信は非常に重要なのではないかとこのように感じています。

今、世界には「グレート・リセット」という世界共産化を行っている者たちがいるわけですが、その後訪れる世界こそ、実はこの「NEW ORDER ORDER (新世界秩序)」なのです。

この言葉は1990年9月11、つまり「911テロ」のちょうど11年前、当時のアメリカ大統領がパパ・ブッシュが湾岸戦争前に、連邦議会で行った『TOWARD A NEW WORLD ORDER (新世界秩序へ向けて)』という演説から世界で広く知られるようになりました。

その他にもバイデン大統領をはじめ、ヘンリー・キッシンジャー、クリントン、トニー・ブレア、ジョージ・ソロス、デイビッド・ロックフェラーなどもこの言葉を公の場で使用してきました。

実は基軸通貨の1ドル紙幣にも、ラテン語で「計画に同意せよ」、「新世界秩序」と書かれており、アメリカの事実上の国章の裏にも記されています。

そしてこの^{新世界秩序}NWOと真正面から戦ってきたのが、実はロシアのプーチンであり、あるいはリビアのカダフィであったり、イラクのフセインなどです。ネットにも映像がありますが、プーチン大統領は公の場でロシア国民に向けて、こう言いました。



私たちはソ連崩壊後の数十年間、この世界秩序の確立と、それを固定させる企てを観察してきた。単独権力によるこの世界秩序は、どのような犠牲を払ってでも、その地位を維持するつもりなのだ。この権力は、彼らは全てを許され、その他の者はこの権力が許可することのみ、利益の為のみに許されると思っている。

このような世界秩序にロシアは決して満たされないだろう。

もし、このような世界秩序を望むなら、半占領下で暮らしたいのだ。

しかし私たちは、それを望まない。

しかし私たちは戦争も望んでおらず、皆と協力しあいたい。

このようにこの「NEW ORDER ORDER」という言葉は、実は陰謀用語なのです。

すなわち主は、共産党宣言に向こうを張って幸福実現党宣言を行われたように、「国際政治の世界には、NEW ORDER ORDERを築こうとしている者たちがいるが、しかし『幸福の科学』こそがNEW ORDER ORDERを作る」と、主は述べられたと考えて良いでしょう。

主は、歴代大統領が何人も暗殺、暗殺未遂に遭うアメリカのニューヨークに住まわれ、時にはもちろん1ドル紙幣も使われ、本を読む際には表紙から表紙まで読まれる方であり、しかも主はユダヤ人が強い力を持つウォール街で戦われ、「日本人は疎いけど世界には陰謀を行っている者もいる」とまで述べられました。その主が、単なる偶然で、「NEW ORDER ORDERをクリエイトしていかなければいけない」と言われるとは到底、考えられません。やはり私たち直弟子に、「啐啄同機(さいたくどうき)」のごとく、ヒントを与えてくれたと考えるべきでしょう。

神がイスラエルの民に与えた土地の広さ

でも、「本当に大いなる陰謀なんてあるの?」と、そのように疑問に思われるかもしれません。

陰謀が現実であるその一つに証拠として、アメリカの歴史学者ランス・デヘイヴンスミスが2013年に記した『アメリカの陰謀論 (Conspiracy Theory in America)』という書物がありますが、この書物にはこう記されております。

「米国人の多くは、陰謀論というレッテルが1967年に始められた中央情報局(CIA)のプロパガンダ計画によって侮蔑的な言葉として広められたと知ったら、ショックを受けるだろう。」

つまりこの書物によれば、「陰謀論」という言葉が、アメリカの日常会話で自然に使われ、そして政治の舞台裏を語る人々が、「おかしな人」、「変な人」というレッテルを貼られ、不思議な目で見られるようになったのは、1960年代以降のことであり、しかもそれはCIAの暗躍によるものであった、というわけです。

たとえばアメリカがクウェート大使の娘の嘘泣きから始まった湾岸戦争、あるいは9.11テロの後に行われ

たイラク戦争によって、たしかにアメリカの石油会社や軍需産業は莫大な利益を得ました。

中でも『ハリバートン』という多国籍企業は、ブッシュ政権で副大統領を務めたチェイニーが元最高経営責任者を勤めており、この会社は石油事業や軍事産業を手掛けているために、イラク戦争では軍隊の食事供給、兵士の洗濯代行などを行って莫大な利益をあげました。

『ハリバートン』はイラク戦争の後も、イラク復興支援にも関わり、入札無しで様々な莫大な契約を取り付けました。そのためにこの会社は、イラク侵攻があったおかげで、最高額の利益を更新し、戦争前と比べると284%の利益増となりました。

しかし国として考えた時、イラクという強固なライバルが一つ消えてくれたおかげで、国益を得たのはやはりユダヤ国家イスラエルと言えるでしょう。

かつてイエスが十字架にかかり、その後、ユダヤ人は国を失い、そして約二千年ぶりの1948年にイスラエルは再建国されました。しかし実はイスラエルという国は、再建国して、それで終わりではないのです。

なぜなら『旧約聖書』を紐解くと、ユダヤの神が彼らに与えたとされる「約束の地」は、もっとももっともとても広大だからです。創世記には次のようにあります。

時に主はアブラムに現れて言われた、「わたしはあなたの子孫にこの地を与えます」。

創世記12章7節

その日、主はアブラムと契約を結んで言われた、「わたしはこの地をあなたの子孫に与える。エジプトの川から、かの大川ユフラテまで。すなわちケニびと、ケニジびと、カドモニびと、ヘテびと、ペリジびと、レパイムびと、アモリびと、カナンびと、ギルガシびと、エブスびとの地を与える

創世記15章18節から21節

もしも、この言葉通りにイスラエルが領土を拡大したら、シリアはほぼすべて領土を失い、イラクも半分ほど領土を奪われ、サウジアラビアやエジプトもかなりの部分の領土を失うことになります。

こうしたイスラエルが建国後も、領土拡大を考える計画のことを「グレーター・イスラエル計画」と言います。この計画を実行するイデオロギーのことを「大イスラエル主義」と言います。

ネタニヤフ首相などが所属する『リクード』という政党も、この計画とイデオロギーを掲げており、1995年に暗殺されたラビン首相は、実は、この大イスラエル主義の過激派青年によって殺されました。

1948年5月14日、イスラエルは独立宣言を行いました。これをアラブ諸国は「大災害」と呼び、そのわずか数時間後には、レバノン、シリア、トランスヨルダン、イラク、エジプトのアラブ連盟5ヶ国がイスラエルに対して宣戦布告しました。後にサウジアラビア、イエメン、モロッコも部隊を出しています。こうしてアラブ連合軍は、翌15日にイスラエルに侵攻を開始して、第一次中東戦争が勃発しました。

ナチスに迫害を受けたユダヤ人がパレスチナに移り住んで、国を建てたばかりなのですから、普通に考えればイスラエルは負けるはずですが、しかし事実上、イスラエルはこの戦争に勝利するばかりか、その後も戦争を繰り返して、爆撃を繰り返す度に、領土を拡大していったのです。

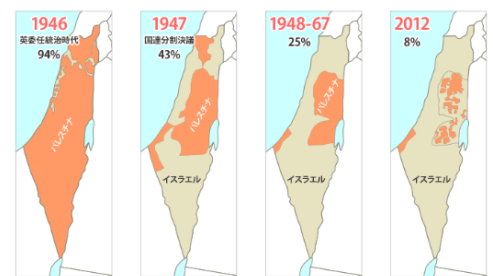
土地を奪われ、難民となってパレスチナ人は言います。

「第二の出エジプトだ」と。

しかしながら、まだまだ「グレーター・イスラエル計画」に比べれば、現在のイスラエルの領土は、ごくごく小さなものであることが分かります。そしてイスラエルは中東で唯一核兵器を持っていますから、近隣諸国は常に脅威にさらされ、なおかつアメリカがバックについているために、気が休まらないわけです。

世界には「シオニスト」と呼ばれる人がいます。

「シオニスト」とは「シオニズム運動」に加担する人のことです。



「シオニズム運動」とは、イスラム教徒が「パレスチナ」と呼んでいる土地、すなわちかつて古代イスラエル国家があった土地に、イスラエルを再建国して、その存続を願う人のことです。

そしてこのシオニズムの究極に、イスラエルの領土を広げて国家を拡大していく「グレーター・大イスラエル計画」があるわけです。

しかし実は、ユダヤ教徒の中には、イスラエルの再建国を認めていないユダヤ人も大勢おります。そうしたユダヤ教徒は、次のように語る人もいます。

「正統ユダヤ教徒はイスラエル建国を認めない。

イスラエルを建国できるのはメシアだけだから」

こうした超正統派と呼ばれるユダヤ教徒は、イスラエルの建国記念日である5月14日にデモを行い、イスラエルの国旗に火を着けて焼くのです。

「ユダヤ教徒＝シオニスト」ではなく、後ほどご説明いたしますが、むしろ「ユダヤ教徒≠シオニスト」のほうが近いと言えるでしょう。

こうした「ユダヤ」、「イスラエル」、そして「シオニスト」という視点から、一触即発のイスラエル・イランの中東問題、あるいはロシア・ウクライナ問題、そしてウォール街を含むアメリカと中国の問題を見ていくと、かなり違った視点が見えてくるわけです。

資本主義の未来

「世界の基軸通貨」とも言われ、アメリカの紙幣として有名な「ドル」ですが、実はこのドルは『FRB』という100%民間の中央銀行が発行しております。アメリカの12の主要都市に『連邦準備銀行（FRB）』が存在し、この銀行群が発行しているのが「ドル」なわけですが、これらの中央銀行は100%民間の銀行です。

たとえばすでに述べましたように、ユダヤ人が『シティ・バンク』、『J・Pモルガン・チェース銀行』、『クレディ・スイス銀行』、『ロスチャイルド銀行』といった銀行を経営していることは述べましたが、こうした銀行経営者たちが、ドルの発行権を持つ『FRB』も経営しているわけです。

これを日本人に分かりやすく説明するならば、『みずほ銀行』や『三菱UFJ』を経営している人たちが、中央銀行も経営して、円を発行しているようなものです。

『FRB』は、自分たちが政府から独立している民間銀行である理由について、「経済の安定を目指すため」と述べています。しかし『FRB』を経営する銀行家たちが、果たしていかなる思想、精神を持っているか分からなければ、これは単なる建前上の言い訳にしか過ぎません。

そもそも先の大戦中、世界中の金（ゴールド）がアメリカに集まり、戦後、為替相場を安定させることを目的に、ドルは世界で唯一、金（ゴールド）と兌換できる紙幣となる「ブレトン・ウッズ体制」が敷かれました。こうしてドルは、「世界の基軸通貨」と呼ばれるようになりました。

もしゼカリヤ・シッチンが主張するように、本当に惑星ニビルから地球に金を採掘に来た者たちがいて、彼らを神と信じる者たちが『FRB』を経営しているのなら、これは彼らにとって、とても都合の良いことでしょう。

しかし1971年、当時のニクソン大統領は、ドルが金（ゴールド）と唯一、兌換が認められていた「金本位制」を突如、やめてしまいました。これを「ニクソン・ショック」と呼びますが、これ以来、『FRB』は金（ゴールド）の裏打ちが無くても、ドルが発行できる状態になりました。

この「ニクソン・ショック」によって、世界中の人々は「ドルは暴落するのではないか？」と思いましたが、しかしすでに世界中の国々、特に西側諸国は、石油を購入するためには「ドル決済」でなければなりません。そして第四次中東戦争が起きることによって、石油価格は高騰しました。「オイルショック」です。これによって、石油価格は上がり続け、結局、ドルは暴落しなかったわけです。

同志社大学の元教授に山口薫さんという方がおられます。彼は「世界のトップ10に入る」と言われているカリフォルニア大学バークレー校で、ノーベル経済学者のジェラルド・ドブルー、ジョージ・アーサー・アカロフ

といった世界に名だたる経済学者たちから、経済学を学んでこられました。まさに彼は最先端の経済学を学んでこられた人物なわけです。

しかし山口薫元教授が、自身の著書『公共貨幣』の中で、次のように述べています。「現在の経済学では中央銀行については何も教わることはなく、また現在の貨幣制度というものは、我々が教えて頂いた経済学とはまったく異なり、中央銀行が無からお金を創り出していた。」と。

世界一流の経済学を学ばれた同志社大学の元教授が、「自分が学んできた経済学と実際の経済はまったく異なっている」と述べている、これは驚愕の事実です。そして「空気からでも、水からでも、無からお金を作り出している」と述べているわけです。

オックスフォード大学や東京大学にて経済学を専攻し、現在はイギリスのサウサンプトン大学にて教授を務められている経済学者に、リチャード・ヴェルナーという方がいるのですが、彼は著書『虚構の終焉』の冒頭で、次のように驚くべきことを述べています。

「経済学はフィクションであり、人々から宗教のように信じられているが、まさに邪神崇拝であった。」

本書では詳しく述べられませんが、「経済学は邪神崇拝」この言葉が何を意味するのか、それを考えるとここに、『資本主義の未来』があると言えるでしょう。

ケネディ暗殺の謎

さて、こうしたことを踏まえて、「ヨハネの黙示録」の2章9節を紹介いたします。

わたしは、あなたの苦難や、貧しさを知っている（しかし実際は、あなたは富んでいるのだ）。

また、ユダヤ人と自称してはいるが、その実ユダヤ人でなくてサタンの会堂に属する者たちにそしられていることも、わたしは知っている。

何とも謎めいた言葉ですが、しかし世界にたった1500万人しかいないユダヤ人が、アメリカの金融から政治まで動かすほどの絶大な力を持っているその理由は分かります。なぜならユダヤ人と称している彼らは、その絶大な力を駆使して、自分たちが絶大な力を持っていることを見事に隠しているからです。そのためにユダヤの力は、表のメディアにも、学校教育でも語られることはありません。

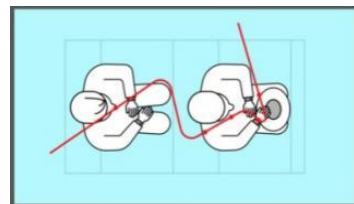
ここにアメリカの秘密とも、資本主義の闇とも言えるものが横たわっているとと言えるでしょう。だから山口薫元教授のような方でも、なかなか「中央銀行の真相」にたどり着けなかったわけです。

さきほどアメリカの歴史学者ランス・デヘイヴンスミスが、『アメリカの陰謀論 (Conspiracy Theory in America)』という書物の中で、「陰謀論というレッテルは1967年に始められたCIAのプロパガンダ計画であった」ということを述べましたが、では、なぜCIAは「陰謀論」という言葉を流行らせたのでしょうか。

1963年6月4日、ケネディ大統領は、アメリカの金融システムを再建しようと考え、「大統領令11110」を発令して、『FRB』とは関係のない5ドルの「政府紙幣」を発行しました。するとその約5ヶ月後、彼はダラスにて暗殺に遭い、彼が発行した5ドルの「政府紙幣」も回収されました。

そしてこの「ケネディ大統領暗殺事件」について、アメリカ国民の大半が、政府が発表している公式見解に強い疑いの思いを持ちました。なぜならケネディ大統領を撃つとされる弾丸は、「マジック・ブレット（魔法の銃弾）」と呼ばれ、政府の発表通りに弾道を描いてみると、弾道が曲がってしまうからです。

また、アメリカ政府は、「大統領暗殺犯はオズワルドという人物で彼の単独犯行だった」と発表しましたが、しかし彼を単独犯とするには、不自然な点があまりに多く、この情報を信用しないアメリカ人も数多くいました。



しかもこのオズワルドは、逮捕から2日後に、警察署の中でジャック・ルビーという男に撃たれて殺されます。そのジャック・ルビーも、その後、すぐに獄死して、事件は迷宮入りします。実は「ケネディ大統領暗殺事件」から、わずか数年のうちに、事件の証人、事件と何らかの関わりがあった人たちが、次々と自殺、事故、他殺によって16人も死んでいく、という前代未聞の現象が生じたのです。

こうして人々が「ケネディ事件」に疑問を抱いて、真相を探ろうとすると、いつの間にかラジオ、雑誌、テレビで「陰謀論」という言葉が流行り、多くの人が「陰謀論者」というレッテルを貼られるようになったわけです。

またケネディ大統領は「ノースウッズ作戦」に大反対して、アメリカ陸軍参謀総長のライマン・レムニツァーを更迭しています。この作戦は、1960年代の頃に行われる予定であった作戦であり、1997年に「ケネディ大統領の暗殺」の機密文書が一部開示されることによって、公式に明らかになりました。この作戦では、まずアメリカ国内で「自作自演のテロ事件」を起こして、このテロ事件をキューバの工作員のせいにして逮捕します。さらに地上から旅客機を遠隔操作して、キューバ工作員にその旅客機をハイジャックされたことにして、その旅客機を米軍が撃墜します。そしてアメリカがカストロ政権を転覆させるわけです。

「テロ」と「旅客機ハイジャック」と「撃墜」、まるで911テロのようですが、本気でアメリカ政府の一部の人たちは、こんな恐ろしい作戦を考えていたのです。

ちなみに911テロの後、ブッシュ・ジュニアによって、「イラクはアルカイダを支援している、イラクには大量破壊兵器がある」という理由でイラク戦争が起こり、フセイン政権は転覆しました。しかしイラクとアルカイダは関係がなく、イラクには大量破壊兵器もありませんでした。

謎多きユダヤ人

アシュケナージとスファラディ

すでに述べましたように、『聖書』およびユダヤ教には、多くの謎があるわけですが、では、「ユダヤ人」とは、果たしていかなる存在なのでしょう。

世界には、ユダヤ人を父や母に持つことから、自身のことを「ユダヤ人」と認識している人もいれば、「ユダヤ教」に改宗することで、「自分はユダヤ人」と考えている人もいます。そのために黒人のユダヤ人、いわゆる「ブラック・ジュー」も存在しております。

そして人類の一つのタブーとして、ユダヤ人というのは本来、有色人種です。

しかし全世界にいる90%のユダヤ人が白人です。現在、イスラエルで暮らしている950万人のユダヤ人のその半が白人であり、残りの半が有色人種です。その他にもユダヤ人は、アメリカやイギリスや日本など、イスラエル以外の世界中の国々で暮らしており、イスラエル以外で暮らすユダヤ人は、ほぼすべて白人種です。

ではなぜ、イエスをはじめユダヤ人は本来、有色人種であったというのに、世界的に活躍したアインシュタイン、あるいはナチスから迫害を受けたアンネ・フランクなど、多くのユダヤ人は皆、白人なのでしょう。

7世紀から10世紀にかけて、ロシアのウクライナあたりで栄えた遊牧国家に「ハザール」とか、「カザール」と呼ばれた国がありました。現在は「カザフスタン」という国が、その名前に名残を遺しております。8世紀半、この「ハザール」にイスラム軍が侵攻してきて、イスラム教への改宗を迫りました。



しかし「ハザール」の隣はキリスト教の大国、東ローマ帝国がありました。

イスラム教に改宗すればキリスト教国家と対立することとなり、キリスト教に改宗すればイスラム教国家と対立することとなり、悩んだ末に「ハザール」は、キリスト教とイスラム教の元になっていたユダヤ教を国教としました。

こうしてそれ以降、国民全員がユダヤ教徒になりました。すなわち「ユダヤ教を信じる」ということで、白人種系ユダヤ人「アシュケナージ」が誕生したわけです。

このことについては、アシュケナージ・ユダヤ人のアーサー・ケストラーやシュロモー・サンドが書かれた書籍『ユダヤ人とは誰か』や『ユダヤ人の起源』などに詳しく記されております。

「信じられない！」と思うかもしれませんが、ユダヤ人の白い肌こそ、改宗ユダヤ人が存在している歴然たる証拠と言えるでしょう。

モーセと共にエジプトを果たし、イスラエルを建国した褐色がかった有色人種のユダヤの民のことを「スファラディ」と言います。彼らは、ほぼ100%、イスラエルで暮らしております。イスラエルという国において、支配的な高い地位についているほとんどの人が、白人種系のアシケナージ・ユダヤ人とされており、

ちなみに『Googleマップ』で検索すれば、簡単に見れますが、かつてハザールがあったカザフスタンの「Lisakovsk Pentagram (リサコフスク・ペンタグラム)」という土地には、不思議なことに「逆五芒星」の地上絵があります。本物なのか偽物なのかは分かりませんが、地上絵とはもちろん悪質宇宙人と深い関わりがあり、「逆五芒星」は悪魔崇拝の象徴でもあります。

苛酷過ぎるユダヤ人

さて、『幸福の科学』の会員さんにとっては、聞きなれない話が続いているために、「あれ！？自分は何の原稿を読んでいるんだっけ？」とお忘れかもしれないので、あえてここで一度、整理させてください。

本原稿はあくまでも、法輪を転じて大伝道を行っていくためのものです。

しかし日本国民は、邪悪なる者たちの戦略なのか、心の中に「トラウマ」とも、「スコトーマ」とも言えるものを抱えております。

そのために「宗教的アプローチ」によるストレートな伝道では、なかなか伝道が進まないことも多々あります。

だからこそ、かつて行基菩薩が行われたように、「政治的アプローチ」から入って、常識を逆転させて、「宗教的アプローチ」に繋げていくべきである、私はそう述べているわけです。

もちろんストレートな伝道でいける人は、「宗教的アプローチ」を行うべきです。

そして私が述べる「政治的アプローチ」も、「従来のもの」ではなく、「新たなもの」です。

そしてここに、「異質な知の統合」という意味での僧団のイノベーションがあると私は考えております。

しかし「新たな政治的アプローチ」について説明するためには、やはり「ユダヤ問題」は避けては通れません。なぜなら彼らは、数は少ないけれども世界で大きな力を持ち、また彼らの国は小さいけれども強国だからです。ですから「ユダヤ問題」をくぐり抜けなければ、政治の真相が見えてこないわけです。

そしてユダヤ人の苦難の歴史を紐解かない限り、ユダヤ人のことを深く理解し、愛することはできないでしょう。

主はすべての人を愛しておられるのだから、私たち信仰者も「愛の器」を広げて、人々を理解し、愛さない限り、救世の事業を行っていくことはできないでしょう。

『旧約聖書』によれば、イスラエル人たちは現在の「イスラエル」とも、「パレスチナ」とも呼ばれている土地において暮らしおりました。やがて彼らは、飢饉に遭遇して豊かなエジプトに移動して、農耕生活を営むようになりました。

しかしエジプトの王（ファラオ）が、イスラエル人たちの豊かな生活を妬んで、彼らを奴隷にします。そうした時に、奴隷の中からモーセが生まれて、幸いにも彼は豊かな王宮で王子として暮らし、やがてイスラエル人たちを解放し、「出エジプト」を成し遂げます。

その後も、モーセの導きのもとでイスラエル人たちは、約四十年もの放浪の旅を続け、その中でユダヤ教の教え、「モーセ五書」が誕生します。これは一般的に『トーラー』と呼ばれています。

やがてイスラエル人たちは現在のパレスチナにたどり着き、その土地に住んでいた「ラハブ」という一人の娼婦をのぞいて、すべての民を皆殺しにして、古代イスラエル王国を建国します。

その古代イスラエル王国も、現在の朝鮮半島のように北と南に分裂し、「北イスラエル王国」はアッシリアの攻撃を受けて滅び、この時にイスラエルの十部族が行方不明となります。

そのために南の「ユダ王国」だけが残るのですが、彼らイスラエル人たちは、「ユダ王国の人」という意味から、「ユダヤ人」と呼ばれるようになります。

預言者エレミヤが危機を訴えるも、同胞から完全に無視されてしまい、やがて南ユダ王国もバビロニアから攻撃を受けます。

そして「バビロン捕囚」として、また彼らは奴隷にされてしまいます。

ここで預言者エゼキエルが現れて、UFOとコンタクトした可能性が噂されているわけです。

やがて彼らは、奴隷から解放されて現在のイスラエルに帰るのですが、今度はローマ帝国に植民地にされてしまいます。この時、ユダヤ人の中からイエスが生まれるわけですが、しかし十字架にかけられて殺されてしまいます。その後、ローマ帝国によってイスラエルは完全に国として滅びました。

そのためにユダヤ人は、ローマ帝国から追い出され、「ディアスポラ（離散）」したとされています。

しかし近年、明らかになった真実の歴史は、実はこのイスラエルに住んでいた、有色人種のスファラディ・ユダヤ人たちは、「ディアスポラ（離散）」することなく、そのままその土地に定住して暮らし、一部はイスラム教徒に改宗して住み続けます。

そしてすでに述べたように、9世紀にハザールという国が、国家まるごとユダヤ教に改宗して、白人種系のアシュケナージ・ユダヤ人が誕生します。しかしこのハザールも11世紀に、モンゴル帝国の侵略を受けて滅び、このアシュケナージ・ユダヤ人たちこそが「ディアスポラ」して、ヨーロッパへと離散します。

そして国を失ったアシュケナージ・ユダヤ人は、「イエスを十字架にかけた呪われた民」として、キリスト教徒から迫害を受けるわけです。

中世のヨーロッパにおいて、ユダヤ人たちはキリスト教への回収を迫られたり、次々と追放されています。その追放を行った国とは、イギリス（1290年）、フランス（1306年）、ザクセン（1348年）、ハンガリー（1360年）、ベルギー（1370年）、スロヴァキア（1380年）、オーストリア（1420年）、オランダ（1444年）、スペイン（1492年）などです。

ユダヤ人追放を行った年代を見れば分かりますように、ハザールがモンゴル帝国に滅ぼされた後の出来事です。

しかし世界広しと言えども、これだけ追放される民はユダヤ人だけでしょう。ロシアなどでも、「ポグロム」といって、酷い民族差別を頻繁に行われてきました。

キリスト教徒も日本では「隠れキリシタン」として有名ですが、中世のヨーロッパ、特にスペインなどでは、やはり「隠れユダヤ教徒」が大勢おりました。彼らはクリスチャンたちから「豚」を意味する「マラーノ」と呼ばれ、蔑まれてきました。

そして第二次世界大戦中に、ユダヤ人たちはナチスから迫害を受けて、戦後の1948年にパレスチナの地にイスラエルを再建国して、領土を拡大していくわけです。

しかしすでに述べましたように、イエス磔刑後、ローマ帝国によってかつてのイスラエルが滅ぼされた時、ユダヤ人たちは「ディアスポラ」することなく、その場にとどまったのです。

そしてその土地は、イスラム教徒によって制圧されて、パレスチナと名前を変え、多くのスファラディ・ユダヤ人がイスラム教徒に改宗してパレスチナ人として暮らしてきたわけです。

つまりナチスの迫害後、アシュケナージ・ユダヤ人たちによってイスラエル再建国され、70万人のパレスチナ人が難民となるわけですが、このパレスチナ難民はもしかしたら、血縁的にはモーセと共に出エジプトを果たしたイスラエルの民の子孫かもしれないわけです。

イスラエルが領土を拡大したこともあって、すでに600万人近いパレスチナ難民がおり、世界の難民の5人に1人はパレスチナ難民と言われております。

「因果の理法」によって、歴史が繰り返されているのかもしれない。

このように「ユダヤ人迫害」と聞くと、ナチスの「ホロコースト」が有名ですが、彼らは迫害に継ぐ迫害の歴史を歩んできたわけです。

恵まれ過ぎた日本人

迫害を受け続けてきたユダヤ人のことを深く理解し、そして愛するためには、恵まれた真逆の環境を生きてきた日本人を理解する必要があると私は思います。

日本はヨーロッパに比べて肥沃な大地があり、なおかつ四季もあるために、種を蒔いて努力すれば豊かな実りを得られます。また神道も、あるいは仏教も「動物にも魂や霊がある」と考えていることから、日本では牛など

の家畜も、まるで家族のように大切に扱ってきました。かつての日本人は牛を食べず、その牛を食す行為を残酷と考えたのです。

しかしヨーロッパは乾燥地帯が多いために、種を蒔いても土地あたりの収穫量が少なく、特に機械の無い時代、パンを作って食べていくことがとても大変でした。

またキリスト教では「動物には魂はない」と考えることから、欧米人は古くから牛や山羊を食べる「狩猟社会」を築き上げました。しかもその狩猟社会は海賊、いわゆる「バイキング」を生み出したのです。

そして航海技術が発達し、「大航海時代」を迎えると、白人たちの「動物には魂が無い」という考え方は、私たち有色人種に対しても向けられました。つまりかつての白人たちの発想は、「自分たちだけが人間であり、あとは家畜である」というものに近かったわけです。

犬や猫に裸を見られても恥ずかしくないように、有色人種ならば裸を見られても恥ずかしくない白人女性もいたそうです。

イエスはスファラディ・ユダヤ人ですから、明らかに褐色がかった有色人種であったにもかかわらず、キリスト教徒の白人たちは、奇妙なことに有色人種に対して激しい人種差別を繰り広げる、という大いなる矛盾を行ってきたわけです。

そのためにキリスト教徒の白人たちから、「家畜」と見なされた有色人種は酷い扱いを受けて、アジアやオセアニアは侵略し尽くされ、アフリカの黒人たちは長きに渡って奴隷にされました。

しかし私たち日本人は、広大な海が壁となってくれたおかげで、他国から侵略を受けることはそれほどありませんでした。

たしかに日本にも、皇室、大和王朝に恭順しない「土蜘蛛」と呼ばれた者たちが日本各地に存在しており、戦をして日本統一を行ってきたことは事実です。

また日本各地で土地の支配権を持つ豪族や大名がいて、戦国乱世が繰り広げられてきたこともありました。しかしユダヤ人のように奴隷にされたり、追放されることはなく、たとえ強国から攻められても、侍精神を持った武士たち、それを支える大和撫子たちが日本を守ってきました。

また、天皇陛下も日本国民のことを「大御宝」と考えて、大切に扱ってきました。たとえば仁徳天皇は、ある時、高い山に登って民の暮らしを見渡したところ、民家の釜戸から煙が立ち上がっていない風景を見て、人々が食べ物さえ十分に得られないことを知りました。そこで仁徳天皇は、ご自身の困窮した暮らしは後回しにして、税を免除し、民の負担を軽減して、生活が豊かになるまで税を徴収しませんでした。

以上のことから、「日本人はイスラエルの民に比べて、かなり恵まれ過ぎている」と言えるわけです。

異邦人は愛すべき隣人なのか

「苛酷過ぎるユダヤ人に比べると、恵まれ過ぎている日本人」、まずこの構図を理解しない限り、ユダヤを理解することはできず、それでは彼らの思想と精神も理解できないことでしょう。

『旧約聖書』のレビ記 19 章 18 節にはこうあります。

「あなた自身のようにあなたの隣人を愛さなければならない。わたしは主である。」

「自分のように隣人を愛せ」、ユダヤ教にもそうした隣人愛の教えがあるのですが、しかし日本人からは想像もおよばない苛酷な歴史を歩んできたユダヤ人の隣人愛は、やはり私たちが考える隣人愛とは、かなり違っております。

なぜならユダヤ教は、同胞に対してまで、かなり厳しい一面があるからです。たとえばユダヤ教には「偶像崇拜」を禁じる教えがあります。そしてモーセは、イスラエルの民がこの戒律を破った際、かなり厳しい処置を行っています。『旧約聖書』には、こう記されております。

モーセが宿営に近づくと、子牛と踊りを見たので、彼は怒りに燃え、手からかの板を投げうち、これを山のふもとで砕いた。また彼らが造った子牛を取って火に焼き、こなごなに砕き、これを水の上にまいて、イスラエ

ルの人々に飲ませた。

モーセは彼らに言った、「イスラエルの神、主はこう言われる、『あなたがたは、おのおの腰につるぎを帯び、宿営の中を門から門へ行き巡って、おのおのその兄弟、その友、その隣人を殺せ』」。

レビの子たちはモーセの言葉どおりにしたので、その日、民のうち、おおよそ三千人が倒れた。

出エジプト記 32章 19～20、27～28

モーセは、シナイ山に登って、神から十の戒めが刻まれた石板を頂いて、山から降りてきました。しかし同胞のイスラエル人たちがその間に、偶像崇拜を行って墮落していたために、彼はこれに怒り、神から授かった石板を叩き割り、金の像を破壊すばかりか、溶かしたその金を同胞たちに飲ませ、さらに兄弟や友人同士で殺し合わせましたのです。その数、三千人です。

しかもユダヤ教徒たちは、同じ信仰を持たない他民族に対しては、さらに厳しい一面があります。たとえばイスラエルの民が、数十年の放浪の旅を続けて、ようやく古代イスラエル王国を建国する際、こんな激しい言葉が『旧約聖書』にはあります。

あなたの神、主が、あなたの行って取る地にあなたを導き入れ、多くの国々の民、【中略】すなわちあなたよりも数多く、また力のある七つの民を、あなたの前から追いはられる時、すなわちあなたの神、主が彼らをあなたに渡して、これを撃たせられる時は、あなたは彼らを全く滅ぼさなければならない。

彼らとなんの契約をもしてはならない。彼らに何のあわれみをも示してはならない。【中略】

あなたの神、主があなたに渡される国民を滅ぼしつくし、彼らを見てあわれんではならない。また彼らの神々に仕えてはならない。それがあなたのわなとなるからである。

申命記 7章 1～2節、16節

すでに述べましたように、奴隷にされていたイスラエル人は、モーセによって「出エジプト」を果たし、現在のイスラエルの地にたどり着いて、ようやく古代イスラエル王国を興すわけですが、この時、「ラハブ」というたった一人の娼婦をのぞいて、そこに暮らしていた人々を皆殺しにしました。しかしこの皆殺しを行う時、「哀れんではいけない。哀れみは畏である」という厳しい言葉が『旧約聖書』にはあるわけです。

たとえばその他にも、モーセの命令に従って、イスラエル人たちがミデアン人たちに戦を仕掛けた際のことです。イスラエル人は、王を含めてミデアンの成人男性を皆殺しにし、家畜と財産をすべて奪い取って町を焼き払いました。そして残ったミデアンの女性とその子どもを捕虜にして連れて帰ると、モーセはこのことに怒って、次のように言いました。

この子供たちのうちの男の子をみな殺し、また男と寝て、男を知った女をみな殺しなさい。

ただし、まだ男と寝ず、男を知らない娘はすべてあなたがたのために生かしておきなさい。

民数記 31章 17～18節

「子どもでも男の子は殺し、男と寝た経験がある女性は殺し、処女だけは自分たちのために生かしておく」、こんなことは、自らを「六天大魔王」と名乗った織田信長でさえやらなかったことです。「日本で言えば戦国時代のような様相であった」ということを割り引いて考えたとしても、やはりユダヤ教には、かなり厳しい一面があることが分かります。

ですからユダヤ教にも「自分のように隣人を愛せ」という愛の教えはあるものの、しかし彼らが考える「隣人」とは、どうやらイスラエル人のことだけだったようです。

もちろん誤解のないように言っておきたいことですが、これは古代の戦国時代のことであって、けっして現在のことではありません。ユダヤ教徒のヤコブ・M・ラブキンという方は言います。「ユダヤ教の伝統は、ユダヤ人たるもの、自己が他者に与える印象に常に気を配らねばならず、それは過去において自分たちを迫害した人々に対しても変わらない」と。

イエスの言葉「蝮の子よ」

ユダヤ教やキリスト教などでは、自分たちとは異なる宗教を信じる民のことを「異邦人」と呼びます。そしてヘブライ語の『聖書』では、この異邦人のこと「ゴイ (גוי)」と呼び、複数形では「ゴイム (גוים)」と呼んでいます。『出エジプト記』34章24節では、「我は汝の前にゴイムを追放するであろう」という表現が使用されています。どうやらユダヤ教では、「ゴイム」と呼ばれる異邦人たちは、愛すべき隣人には値していなかったようなわけです。

そうした中で、愛の神であられる主エル・カンターレから霊指導を受けたイエスという方が現れて、この「隣人」の定義を大きく広げて、異邦人のことも「隣人」と呼んで、神への信仰と愛を説いたわけです。イエスは当時、蔑まされている人々のことも「隣人」と呼びました。

そして『聖書』の「マタイの福音書」を紐解くと、愛の信仰者であるイエスが、なぜかユダヤ教の律法学者に対して、とても厳しいことを述べていることが分かります。

へびよ、まむしの子らよ、どうして地獄の刑罰をのがれることができようか。

それだから、わたしは、預言者、知者、律法学者たちをあなたがたにつかわすが、そのうちのある者を殺し、また十字架につけ、そのある者を会堂でむち打ち、また町から町へと迫害して行くであろう。

マタイの福音書23章33-34節

『旧約聖書』において、悪魔が蛇に姿を変えて、エデンの園にいたイブが誘惑を受けて禁断の果実を食べたために、ユダヤ教やでは、蛇という生き物は悪魔のように忌み嫌われている生き物です。しかしイエスはユダヤ教の律法学者のことを、堂々と「蛇」や「蝮」とのしるわけです。またイエスは「ヨハネの福音書」の中では、ユダヤ人たちに対して、さらに厳しい言葉を述べています。

あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている。彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。

彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音をはいているのである。彼は偽り者であり、偽りの父であるからだ。

ヨハネの福音書8章44節

では、何ゆえにイエスは、律法学者たちを「まむしの子」と呼び、同じユダヤ人たちに「貴方がたは悪魔から出た者であり、貴方がたの父は悪魔」とまで言ったのでしょうか。

「宗教家なのだから、『宗教について知らないことがある』ということは恥ずかしいことだ」ということを前提に述べさせていただきますが、実はヘブライ語のこの「ゴイ」という言葉には、「異邦人」という意味の他に、「家畜」とか、「獣」という恐ろしい意味まであるのです。

つまりかつて白人のキリスト教徒たちが、「自分たちが人間だ」と考えて、有色人種の中でも特に黒人を家畜同然に扱い、奴隷にしたが如く、ユダヤ教徒の中には「ユダヤ人以外は家畜」と考えている者たちがいるわけです。

バビロン捕囚の謎

すでに述べましたように、今から二千六百年の昔、新バビロニア王国のネブカドネザル2世によって、ユダヤ人たちは捕えられ、バビロニアの首都バビロンへと連れ去られてしまいました。いわゆる「バビロン捕囚」であり、預言者エゼキエルがUFOとコンタクトしたのではないかと、言われている頃です。

このバビロンとシュメール文明があった土地は、現代のイラク地方であり、まったく同じ地域です。では、「バビロン」という土地は、どんな土地なのでしょう？

バビロンには「ジググラト」というレンガが造られた巨大な塔の遺跡がありますが、この塔の遺跡は「バベルの塔」の遺跡であったと云われております。

「バベルの塔」について、『旧約聖書』の「創世記」にはこんな話があります。

ノアの子ハム、ハムの子孫はクシ、クシの子はニムロデであって、このニムロデは世の権力者となった最初の人である。

全地は同じ発音、同じ言葉であった。

彼らは互に言った、「さあ、れんがを造って、よく焼こう」。こうして彼らは石の代りに、れんがを得、しっくい代りに、アスファルトを得た。

創世記『旧約聖書』創世記10章、11章

バベルの塔の建設者は、ノアの子孫にあたる人物で「ニムロデ」と言い、彼は「神に反逆する者」とも言われております。そしてこのシュメール文明があった地域付近は、「バアル信仰」と縁が深いことが伝えられています。「バアル信仰」とは、『旧約聖書』に登場する預言者エリヤが戦ったとされる、悪魔ベリアルを崇拝するものです。簡単に言って「バアル信仰」とは悪魔崇拝です。

そしてすでに述べましたように、モーセは神の声と悪魔の声を聞き間違えて、生贄を行ってしまいました。

しかし悪魔が人間に生け贄を求めるとは、まるでレプタリアンのようで不思議ではありますが、こうした事実があるわけです。

エンリルやレプタリアンとも関係の可能性があり、なおかつ「バアル信仰」とも関係がある「バビロン」という土地に、ユダヤ人たちは連れ去られ、そして建築事業に従事させられたわけです。

そして実はこの「バビロン捕囚」の時より、一部のユダヤ人たちは、正統なユダヤ教の教えを捨てて、代わりにバビロニアの宗教、思想、商法を獲得したと伝えられております。実はこのバビロニアこそ、今ある銀行業のルーツがある土地でもあり、今も世界中の銀行にユダヤ人たちが深く関わっております。

仮面を剥がされたタルムード

そしてこの「バビロン捕囚」の時より、ユダヤ人たちは、そのバビロニアの思想を口伝で受け継ぎ、約千年後の5世紀末に、その口伝の教えを、18冊の書物として完成させました。

それが『バビロニア・タルムード』です。

そして彼らのこの独自の教えが、実は何とも悪魔的なのです。

なぜならこの『タルムード』は、恐ろしい思想で貫き通されており、I・B・プラナイティス神父が書かれた『仮面を剥がされたタルムード』を紐解くと、「キリスト教徒を殺す者達は天国で高い位を獲得する、ユダヤ人はゴイム絶滅を止めてはならない、彼らを平和にしておいてはならない」という恐ろしい言葉まであるからです。

『仮面を剥がされたタルムード』という小冊子から、『タルムード』の一部をご紹介します。

神言い給う、我は我が予（※預）言者を畜獣に過ぎざる偶像崇拜の徒の為に遣わしたるにあらず。

人間なるイスラエル人の爲に遣わしたるなり（ミトラシュ・コヘレート）。

ゴイがゴイ若しくはユダヤ人を殺した場合は責めを負わねばならぬが、ユダヤ人がゴイを殺すも責めは負わず」（トセフタ、アブタ・ザラ、8の5）。

ユダヤ人が異邦人を殺しても死刑にはならない。ユダヤ人が異邦人のものを盗んでも返さなくても良い」（サンヒドリン57a）。

ユダヤ人はゴイから奪ってよい。ユダヤ人はゴイから金を騙しとってよい。ゴイは金を持つべきではなく、持てば神の名において不名誉となるだろう（シュルハン・アルーフ、コーゼン・ハミズバット、348）。

つまり「ユダヤ人には選民思想がある」ということは、宗教を学ぶ者なら誰でも知っていることですが、この『タルムード』は、その選民思想をさらに越えて「家畜思想」、もしくは「悪魔的とも表現できる選民思想」で貫き通されているわけです。

「そんなバカな話は到底、信じられない」と思うかもしれませんが、この事実を証明する人物こそ、マルチン・ルターです。16世紀になるとキリスト教の宗教改革のために、ルターという方が現れて、彼はキリスト教カト

リック教会と対決して、「プロテスタント」という宗派を作りました。

ルターはそのカトリックとの戦いの中で、『新約聖書』をドイツ語に翻訳しようと、ヘブライ語を勉強し直しました。その際、彼はこの『タルムード』を紐解いてみました。するとルターは絶句したのです。なぜなら正統なユダヤの教えでは、「偽ってはならない、盗んではならない、殺してはならない」と教えられているというのに、この『タルムード』には、次のように記されていたからです。

我々は『タルムード』が、モーゼの律法書に対して絶対的優越性を有することを認むるものなり。

『タルムード』の決定は、生ける神の言葉である。

『汝殺すなかれ』との掟は、『イスラエル人を殺すなかれ』、との意なり。

ゴイ（非ユダヤ人）、ノアの子等、異教徒はイスラエル人にあらず。

つまりユダヤ教という宗教は、モーセから始まったというのに、そのモーセの教えの上に、『タルムード』というまったく別の、しかも悪意が込められたバビロニアの教えを置いてしまった者たちがいたわけです。それは『日蓮正宗』が日蓮のことを「末法の本仏」と考えているのにも、どこか少し似ているかもしれません。

たとえるならば、「愛し合い、睦み合い、信じ合えという教えがあるが、それは信仰者だけのことであり、信仰無き者は愛さず憎め」と言っているようなものです。

これについてルターは、『ユダヤ人と彼らの嘘』の中で次のように述べています。

彼等はモーセを裏切る事さえする

即ち二種類のユダヤ人又はイスラエル人が存在する。一つは神がモーゼに命じたごとく、モーセに導かれてエジプトを出てカナンの地に入った者達。彼等に封じてモーゼは神の戒律を与え、彼等は外国に出ることなく彼等の国土でひたすらメシアの到来までその戒律を守り続けていた…もう一つはモーセのユダヤ人ではなく（ローマ）皇帝のユダヤ人である。

ルターの時代では、まだアシュケナージとスファラディーという異なる人種のユダヤ人について明らかにされておりませんでした。ですからルターは「二種類のユダヤ人」と表現することで、『聖書』に忠実なユダヤ人と『聖書』にまったく従わないユダヤ人ということの説明しているわけです。

また、『タルムード』では、イエスに対して、「あの男」とか、「吊るされた者」などと罵倒し、処女でイエスを産んだと言われている聖母マリアに対しては、「ただの売春婦」と罵り続けております。

つまり『タルムード』を奉じるユダヤ教徒は、自分たち以外の人々を「家畜」と蔑み、逆に「隠れユダヤ教徒」は、クリスチャンたちから「マラーノ（豚）」と蔑んだわけです。

しかもこの『タルムード』では、「ユダヤ人のみが人間であり、ユダヤ人以外はゴイであり、家畜には偽るべきであり、盗むべきであり、殺すべきである」と、「積極的に、徹底的に悪を成せ」という驚くべきことが書かれあった、とルターは書物の中で証言するわけです。

仏法真理と正反対の思想

300冊以上の小冊子を書いたドイツの英雄マルチン・ルターですが、彼は人生最後の小冊子、『ユダヤ人と彼らの嘘』を書くことで、この『タルムード』を暴いて、こう述べております。

私はもうこれ以上、ユダヤ人のことも、ユダヤ人に反対することも書かないと決心していました。

しかしこの哀れで邪悪な連中が、いつまでも我々キリスト教徒に打ち勝とうとすることを止めないので、ユダヤ人の企てによってもたらされる被害に備えて、私もユダヤ人に抗議する人々の隊列に加わることを決意しました。ゆえに私はこの小冊子の出版を認め、そしてキリスト教徒たちにユダヤ人に対する防備を固めるよう警告いたします。【中略】

『少々、私は言いすぎではないか』と思う人がいるかもしれません。しかし言いすぎどころか、私はあまりにもわずかしか言っていないのです。というのは、彼らがいかに我々ゴイム（家畜たち）を、彼らの著作のなかで

蔑み呪い、そして自分たちの学校や礼拝の場で、我々に災いが降りかかることをどれほど望んでいるか、私はよく理解しているからです。彼らは、高利貸しによって我々の金をかすめ盗り、可能な場所ではどこでも、我々をあらゆる種類の策略にかけるのです。

「他の人々を家畜と考えるなんて信じられない」、それが恵まれた環境の中で歴史を歩んできた日本人の一般的な感想です。

また主エル・カンターレの教えは、「一切衆生悉有仏性」、つまりすべての存在に仏性があり、悟りの可能性があり、皆が仏の子としての兄弟なであり、本当は皆、生命の大樹として一つに繋がっている、だから愛し合いなさい」というものです。

民族の違いを超え、人種の違いを超え、宗教の違いを超えて仏性相等しきを喜ぶ、それが主エル・カンターレの教えであり、『真理の言葉・正心法語』には、「自他はこれ別個にあらざり一体なり、しからばともに愛し合い、しからばともに生かし合い、しからばともに許し合え」とあります。

しかし『タルムード』は、主エル・カンターレからも一部、霊指導を受けたモーゼの教えに対して絶対的優越性を持ちながら、まったく正反対の思想を持っているわけです。

では、『タルムード』の思想は、裏側とか、妖怪、天狗の思想なのでしょうか。

総裁先生は『大悟の法』の大悟の瞬間の中で、次のように教えてくださっておられます。

宗教の世界、あるいは超能力の世界において、霊的な感覚を持っている人は数多くいますが、愛他、利他の思いにまで届かずに、霊的なもののみに関心を示しているうちは、まだ、魂的には、仙人界や天狗界と呼ばれる裏側の世界に属していると言わざるをえないのです。

菩薩や如来といわれる人たちのいる、本来の表側の魂系団に入るためには、「真実の自己を知る」ということと共に、「その真実の自己を知る行為が、利他、愛他へとつながっていく」ということが必要です。そういう悟りが必要なのです。

このように主は、霊界の表と裏を分ける考え方として、「利他の精神」と教えてくださっておられます。

愛の神エル・カンターレに対する信仰、その信仰の証明が愛であるとも教えて頂いております。

しかし妖怪や天狗というのは、霊的なことは認め、信仰はありつつも、愛の心が乏しいわけです。

つまり愛の心があるかないか、これが表と裏を分けるわけですが、しかし『タルムード』は、「愛の心」が欠落しているというレベルを遥かに超えて、明らかに「積極的に悪を成さん、人を殺めん」という「憎しみの心」を見てとることができるのです。

ユダヤ教とはモーゼから始まった宗教であり、この信仰を持つ人のことを「ユダヤ人」と言うわけですが、では、モーゼの教えに優越性を持つこの『タルムード』の教えを奉じる人たちは、本当に「ユダヤ人」と呼ぶに相応しいのでしょうか？それをモーゼに聞いてみたいところです。

『日蓮宗』でも、『日蓮正宗』から別れた『創価学会』でも、信じている人からすれば、「お題目を唱えれば救われる、救われないならば唱える回数が少ないのだ」と信じ切っております。

これと同様に、『タルムード』を信じている人は、本当に「自分だけが人間だ、あとは獣だ」と信じ切っているのです。そしてまた彼らは、シオニストでもありますから、これがまた厄介なわけです。

もちろんすべてのユダヤ人と自称している人々が、この『タルムード』を奉じているわけではありません。モーゼ五書のこと『トーラー』と言いますが、『聖書』に忠実で、自らのことを「トーラー主義」と呼び、『タルムード』を偽典とするユダヤ教徒も大勢いるからです。

「自分たち以外は家畜」という思想は、愛の神の教えを学ぶ私たちにとって、なかなか信じられない話であるために、「ルターが嘘を言っているのではないか？」と思うかもしれません。しかしすでに述べましたように、『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」には、造物主の言葉としてこうあります。

「見よ、サタン（悪魔）の会堂（教会）に属する者、すなわち、ユダヤ人と自称してはいるが、その実ユダヤ人でなくて、偽る者たちに、こうしよう。見よ、彼らがあなたの足もとにきて平伏するようにし、そして、わたし

があなたを愛していることを、彼らに知らせよう。」

そしてこの「ユダヤ人を自称する悪魔の会堂に属する物」という「ヨハネの黙示録」の言葉に、まるで呼応するかのように、ルターが書いた『ユダヤ人と彼らの嘘』には、こう記されております。

彼らの宗派は、悪魔の巣窟である

それゆえあなた方はユダヤ人達に封して警護を固め、次の事を知るべきである。即ち、彼らが集いを持つ場所は悪魔の巣窟以外の何者でもなく、そこでは自分達を自ら讃美し、虚栄、うそ、冒涇、神と人間に恥辱をもたらすといったことが、悪魔がなすのと同様に、最も強烈にして、最も有害なやり方で実行されているのだと言う事をである。

つまりユダヤ人は本来、有色人種であったのですが、改宗ユダヤ人が誕生することで白人種系のアシュケナージ・ユダヤ人が誕生し、そしてもともとユダヤ教の教えは、モーセ五書をはじめとする『旧約聖書』であったのですが、しかし「自分たち以外は家畜」と考える、『タルムード』の教えも存在しているわけです。

「蛇のように賢く、鳩のように素直であれ（マタイ10章16節）」、これはイエスの言葉です。訳す方によって「鳩のように純粋で、蛇のように狡猾であれ」と訳されることもあります。

なぜイエスが「蛇のように狡猾であれ」と言ったのか、それはユダヤの律法学者を「蝮の子」と呼んだほどのイエスですから、もしかしたらルターのように同じ想いがあったのかもしれない。

すなわち「神仏に対しては純粋に、しかし狡猾な悪魔を見破れ」という意味が、もしかしたらこのイエスの言葉には込められていたのかもしれない。

第二章 迫るデストピア

防ぐべきデストピア

グレート・リセットという共産化

では、『タルムード』を奉じるユダヤ教徒がいて、そして彼らが悪魔的とも言える思想を持っていて、それが「ヨハネの黙示録」に記されている悪魔教徒であったと仮定して、果たしてそれが現代を生きる私たちの暮らしに、どう関係しているのでしょうか。表現を変えれば、間違っただけの思想を持ちながら、絶大な富や権力を持つ者がいて、それが人類にどのような影響をおよぼしているのでしょうか。

それは今、世界で起こりつつある「グレート・リセット」とか、「SDGs」とか、「ニュー・ワールド・オーダー」という名で起こっている共産革命です。

「グレート・リセット」とは、『世界経済フォーラム』が牽引している世界的な共産革命のことで、地球温暖化問題やデジタル化の取り組みなどであり、彼らは2030年を目途に私有財産を持たない共産主義世界を築く、などと堂々と公言しております。

アメリカや中国、日本はじめ世界中の国々が、この「グレート・リセット」の流れに乗っており、岸田首相も2022年1月18日、「我々はグレート・リセットの先にある世界を見据えないといけない」と述べて、自分が掲げていた『新しい資本主義』の正体が、『世界経済フォーラム』が掲げている「グレート・リセット」であることを明らかにしました。

2021年1月26日には、中国の習近平主席も「ダボス会議」に参加して、アメリカのバイデン政権に対して協調呼びかけています。

実は世界は今、「グローバリズム」という耳障りの良い言葉で、社会主義を目指し、さらには共産主義に向かう流れにあります。

そして総裁先生も『繁栄への決断』の「第3章 ポスト・グローバリズムへの経済革命」の中で、「グローバリズム」の危険性を教えてくださっておられました。

グローバリズムそのものは、主としてアメリカ発信のものではあったものの、結局、ある意味においては、「万国の労働者よ、団結せよ」という共産党のスローガンと似たようなところがあったのかもしれない。それ自体はもともと資本主義的なものだったはずであり、「アメリカンスタンダードを広めれば、世界が豊かになって、幸福になれる」という考えだったのでしょけれども、どこにでも同じルールを適用していくと、結果として共産主義に似てくるところがあるわけです。

また、ジョン・レノンも霊言の中でこう述べています。

ジョン・レノン 今、EUに対しても言いたいことはあるけどさ、そういうところはやはりあるんじゃないかなあ。EUも、共産主義が崩壊したのに、もう一回、同じような共産主義の国家群をつくらうとしているように見えるところはあるよ。【中略】

まあ、「グローバリズム」っていうのがさ、今、終わりを迎えようとしてんのさ。「救世主なきグローバリズムは、やっぱり破滅だよ」と、今、言っているんで。

さらにイスラエルのネタニヤフ自身も、霊言の中で共産主義とグローバリズムについて、こう述べております。

ネタニヤフ守護霊 “ユダヤ産”ですよ、共産主義は。【中略】

とにかく、西洋化・近代化は「契約思想」ですよ。「契約思想」のものはユダヤ思想なんで。だから、今の「グローバリズム」はユダヤから来ているんですよ。“震源地”なんで。ギリシャじゃないんです。契約思想はユダヤから来ているんだ。「神との契約」が、次は「人間間の契約」になっていってるんで。

後ほど詳しく説明いたしますが、このようにグローバリズムとは、ユダヤを震源地とする共産化の流れであり、これを「グレート・リセット」という名で牽引しているのが『世界経済フォーラム』という組織なわ

けです。

「コロナ騒ぎ」が始まった2020年1月23日、日本政府は「ムーンショット計画」などという訳の分からない計画を発表しました。内閣府は2020年の初めに次のようにホームページ上で述べております。「第48回総合科学技術・イノベーション会議（2020年1月23日開催）において、ムーンショット目標が決定されましたので、お知らせいたします」と。つまり『ムーンショット計画』は都市伝説でも、陰謀論でも何でもなく、実際に政府が現在ただ今、打ち出している目標計画なわけです。

この計画によると、2050年までに、遠隔操作できる多数のアバターとロボットを組み合わせて、現在とはまったく異なる科学的未来社会を構築するそうです。「アバター」とは、インドの神話の「化身」が語源ですが、現在では、ゲームやネットの中で使用する自分の「分身」のことを意味しています。

つまりネットなどの仮想空間の中で、自分が設定したキャラクターのことを、「アバター」と言うわけです。そして内閣府は「コロナ騒ぎ」が始まった2020年1月に、この『ムーンショット計画』を発表し、「ロボットとアバターを組み合わせた科学的未来社会を構築する」などという、訳の分からないことを言い始めたわけです。

頭の悪い日本の政治家が、こんなことを思いつくはずもなく、おそらくこの「ムーンショット計画」の出所は、世界の異常なデジタル化を推進している、この『世界経済フォーラム』で間違いないでしょう。

『世界経済フォーラム』の会長は、クラウド・シュワブという人物であり、ユダヤ人のレーニン像を家に飾っていることから、レーニンを敬愛する共産主義者と言われております。彼はユダヤ人ではないようですが、アメリカの政治家にして、政治学者のヘンリー・キッシンジャーの教え子であることは分かっております。そしてヘンリー・キッシンジャーは、田中角栄に「ロッキード事件」を仕掛けたことでも有名ですが、生っ粋のユダヤ系ドイツ人です。

ですからクラウド・シュワブも、トランプの娘のようにユダヤ教に改宗することによって、すでに今ではユダヤ人を自称する者なのかもしれません。

また、ユダヤ人だと自称する歴史学者ユヴァル・ノア・ハラリは、『サピエンス全史』という書籍を書いて、この本は60以上の言語に翻訳され、1600万部以上を売り上げて世界的ベストセラーとなりました。彼は『世界経済フォーラム』の御用達学者でもあります。すなわち『世界経済フォーラム』はユダヤ人を自称する者たちが、深く関わっているわけです。そしてユヴァル・ノア・ハラリは堂々と主張しています。「これまでの監視は、皮膚の上であった。しかしコロナによって、人々は皮膚の下の監視も受け入れるようになった」と。

このように『世界経済フォーラム』が牽引しているグレート・リセットとはつまり、皮膚の下まで監視する共産主義革命なわけです。

パンデミック条項とIHRの問題点

しかも『WHO』は、2024年5月に「パンデミック条項」と「IHR」の可決を目指し、世界の国々を自分たちの支配下に置こうとしております。まずパンデミック条項の問題点か見てまいります。

【パンデミック条約の問題点】

- ・製薬会社に対して可能な限りインセンティブ（奨励金）を提供する
- ・プライベートセクター（例：製薬会社）およびNGO（各種財団など）との協力関係を結ぶ
- ・ワクチン被害者への補償は一定期間のみに限定
- ・WHO事務局長が政府の同意を得ることなく、自らの権限で緊急事態を宣言できる
- ・ソーシャルメディアや情報伝達チャンネルを通して管理し、虚偽の情報に対抗する
- ・機能獲得実験に関しては安全規制が緩められ、安全装置は各研究主体の良心に任される
- ・健康と自由に関する人権が狭められる

まず、何よりも問題なのは、国民が選んだその国の政治家ではなく、『WHO』の事務局長が「緊急事態宣言」を発令できると言い切っているところです。そして『WHO』は、ネットなどでも医療に関する情報は管理する

と言うのです。そして製薬会社は利益を得て、ワクチン被害者への補償は減る、というのです。

しかし、これに2005年から始まった『IHR（国際保健規則）』が、もしも2024年に改悪されるとなると、さらに問題は複雑です。

【IHR改訂の問題点】

1. 「勧告」から「義務」への変更。「諮問機関」から「統治機関」への変更
2. WHOの事務局長が独断で決められる。潜在的な緊急事態も対象とする
3. 尊厳、人権、自由の無視：条文中から「人々の尊厳、人権、基本的自由の尊重」を削除
4. 保健製品の割当を行う：生産手段の管理に介入、パンデミック対応製品を指示通りに供給するよう求める
5. 強制医療：WHOに健康診断、予防薬やワクチンの証明、治療を義務づける権限を与える
6. グローバルヘルス証明書
7. 主権の喪失：健康対策に関して主権国家が下した決定を覆す権限
8. 不特定の潜在的に莫大な財政的コスト
9. 検閲
10. 協力義務

「主権の喪失」とありますように、もしも仮に『WHO』がこの「IHR」や「パンデミック条約」を可決して、そして日本が『WHO』から脱退しなければ、日本は今以上に主権国家ではなくなることを意味しております。その結果、国民は強制的にワクチン接種を行わされ、ワクチンパスポートを持たなければ、移動することもできず、最愛の場合、物を買うことも売ることができない時代となってしまいうでしょう。

『WHO』の事務局長は、人々から選挙に選ばれた人物ではなく、拠出金の多い国や財団の意向が強く繁栄されて選ばれていると言われております。しかも現在のテドロス・アダノムにいたっては、医師免許も持っていない、言ってみれば医学の素人です。こうしたその人物に多大な権限を与えようとしているのですから、「パンデミック条約」と「IHR」は本当の危険極まりないことです。

そして至福の千年王国が到来する前に、そんな狂った時代が到来することを、『聖書』の「ヨハネの黙示録 第13章」は予言しているようにも思えるのです。

獣の像を拝もうとしない者があれば、皆殺しにさせた。

また、小さな者にも大きな者にも、富める者にも貧しい者にも、自由な身分の者にも奴隷にも、すべて者にその右手か額に刻印を押させた。

そこで、この刻印がある者でなければ、物を買うことも、売ることができないようになった。

この刻印とはあの獣の名、あるいはその名の数字である。

ここに知恵が必要である。

賢い人は、獣の数字にどのような意味があるかを考えるがよい。数字は人間を指している。

そして、数字は666である。

「666」とは「終末の時代に出現するアンチ・キリストを示す悪魔の数字」と云われております。そして「ヨハネの黙示録 第17章」を読むと、この「獣」について、次のように記されております。

天使はヨハネに言う。

あなたの見た獣は、昔はいたが、今はおらず、そして、やがて底知れぬ所から上ってきて、ついには滅びに至るものである。

地に住む者のうち、世の初めから、いのちの書に名をしるされていない者たちは、この獣が、昔はいたが今はおらず、やがて来るのを見て、驚きあやしむであろう。【中略】

昔はいたが今はいないという獣は、すなわち第八のものであるが、またそれは、かの七人の中のひとりであって、ついには滅びに至るものである。

「昔はいたが今はいない獣、かの七人の一人であって滅びにいたる者」、それはまさに、かつて七大天使の一人であった「ルシファー」のことを言っているのでしょう。つまり「獣」とはルシファーを意味し、「獣の刻印」とは「悪魔の刻印」を意味していると推測できるわけです。

初期のミカエルの霊言を紐解くと、ルシファーは地上に生まれた際に「サタン」と名乗り、そして石油を武器に使っていた、ということが書かれてあります。そして今、ユダヤ人を自称する者たち、あるいは彼らと関わり深い者たちが、この地球上の多くの油田を確保しております。

石油は人や物をガソリンだけではなく、石油化学製品のプラスチック、合成ゴム、アスファルト、あるいは化粧品の大半、ガスも正式には「液化石油ガス」であり、たとえ原発が再活動しようとも、はっきり言って現代人の今の状況は、「石油」無しには生きてはいけません。

中部大学教授の武田邦彦工学博士によれば、「石油は今のまま使い続けても、あと八千年は大丈夫」だそうですが、しかし常にメディアからは「石油が枯渇する、石油を使用すると温暖化につながる」と報道され、私たちの暮らしはますます苦しめられております。もしかしたらこれもミカエルの霊言が述べていたことと、何か関係があるのかも知れません。

ちなみに原発の燃料はウランであり、世界のウラン鉱山の大半を握るのは、イギリスに本社を持つ『リオ・テイント』という巨大な会社であり、ユダヤ人を自称しているロスチャイルド一族が経営しています。

予言されたロシア・ウクライナ戦争

「UFOコンタクティー」と噂され、「バビロン捕囚」の頃の預言者エゼキエル、彼が書き残した「エゼキエル書」には、とても不思議な予言があります。

主の言葉がわたしに臨んだ、「人の子よ、メセクとトバルの大君であるマゴグの地のゴグに、あなたの顔を向け、これに対して預言して、言え。主なる神はこう言われる、メセクとトバルの大君であるゴグよ、見よ、わたしはあなたの敵となる。

わたしはあなたを引きもどし、あなたのおごにかぎをかけて、あなたと、あなたのすべての軍勢と、馬と、騎兵とを引き出す。彼らはみな武器をつけ、大盾、小盾を持ち、すべてつるぎをとる者で大軍である。ペルシャ、エチオピア、プテは彼らと共におり、みな盾とかぶとを持つ。ゴメルとそのすべての軍隊、北の果のベテ・トガルマと、そのすべての軍隊など、多くの民もあなたと共にいる。

エゼキエル書 38 章

「ペルシャ」は現在のイランを指しており、「クシュ」はエチオピア、「プテ」はリビア、「ゴメル」はドイツ、「ベテ・トガルマ」はトルコを指していると考えられています。そして「マゴグ」はロシア、「ゴグ」は「大君」、つまり大統領などを意味する言葉です。ですから「マゴグのゴグ」とは、「ロシアのプーチン大統領を意味しているのではないか？」と、密かにささやかれております。

実際にロシアのプーチン大統領は、今回のウクライナ侵攻の目的を、最初は「非ナチ化」と述べていましたが、今では「悪魔祓い」と述べております。

つまりこの「エゼキエル書」は、ロシアの周辺地域を巻き込んだ大戦争を予言していると言われてわけです。

世界各国が行っている「地球温暖化問題」を、陰から支援して煽っているのは、超大富豪にして投資家のユダヤ人のジョージ・ソロスという人物です。ソロスは、この『世界経済フォーラム』とも関係が深く、その莫大な富を背景に、『オープン・ソサエティー財団』を設立しました。この財団は、世界120の国々で地球温暖化問題、LGBT問題といった左翼活動を展開し、世界の共産革命のことを「慈善活動」と呼んで支援しております。

ソロスは、世界中の『オープン・ソサエティー財団』の活動資金のために、320億ドル以上の個人財産を寄付し、この財団は年間で15億ドル（1500億円）の活動費用を使用していると推定されています。

また、実は今回のロシアとウクライナの争いも、このジョージ・ソロスの支援がなければ存在していなかったと言っても実は過言ではありません。なぜならウクライナ人たちが、「四半世紀前からのソロスの支援があったからこそ、今のウクライナの独立はある」と口々に述べているからです。

映画監督のオリバー・ストーンが制作総指揮をされた『ウクライナ・オン・ファイヤー』によれば、アメリカが2014年のウクライナのクーデターに深く関与して、資金援助を行っていたことが明らかになっております。

そしてアメリカの国務長官アントニー・ブリンケンも、国務次官ビクトリア・ヌーランドもウクライナ系ユダ

ヤ人です。つまりすでに述べましたように、ウクライナのゼレンスキー大統領も、シュミハリ首相もユダヤ人ですが、今回のロシア・ウクライナ問題の本質は、「ユダヤ人問題」なわけです。

しかも「エゼキエル書」は、こう続きます。

主なる神は言われる、その日、すなわちゴグがイスラエルの地に攻め入る日に、わが怒りは現れる。
わたしは、わがねたみと、燃えたつ怒りとをもって言う。その日には必ずイスラエルの地に、大いなる震動があり、海の魚、空の鳥、野の獣、すべての地に這うもの、地のおもてにあるすべての人は、わが前に打ち震える。また山々はくずれ、がけは落ち、すべての石がきは地に倒れる。

エゼキエル書38章

まず、「主なる神」とありますが、しかし「我が妬みと燃え立つ怒りをもって言う」という言葉からも、明らかにこの神は、エンリル系の裁きの神、妬みの神であることが分かります。そしてこの予言ともとれる言葉が、もしも今回のロシア・ウクライナ問題を指しているのであるならば、「ロシアのプーチン大統領が、イスラエルに攻め入る」というわけです。

実際にロシアとイランの関係は深く、イランはイスラエルと一触即発の関係にあります。そして今、多くのユダヤ人がイスラエルに入植しております。

もしもこの「エゼキエル書」が、現代に対する予言であるならば、やはり思い出されるのは「ハルマゲドン」です。「ハルマゲドン」というこの言葉は有名ですが、しかし聖書の中にたった1回だけ、「ヨハネの黙示録」の16章16節にだけ登場します。

三つの霊は、ヘブル語でハルマゲドンという所に、王たちを召集した。
第七の者が、その鉢を空中に傾けた。すると、大きな声が聖所の中から、御座から出て、「事はすでに成った」と言った。
すると、いなずまと、もろもろの声と、雷鳴とが起り、また激しい地震があった。それは人間が地上にあらわれて以来、かつてなかったようなもので、それほどに激しい地震であった。
大いなる都は三つに裂かれ、諸国民の町々は倒れた。神は大いなるバビロンを思い起し、これに神の激しい怒りのぶどう酒の杯を与えられた。

ヨハネの黙示録16章16節～19節

「三つの霊がハルマゲドンに王たちを集めて、神がバビロンを思い出して怒る」というのです。ハルマゲドンという言葉は、「メギドの山」という意味があり、メギドとは古代イスラエルにあった町の名前です。しかし一般的に「ハルマゲドン」とは、世界中の国々を巻き込んだ大戦争を指しております。

つまりハルマゲドンの戦いは、「メギドの山」という小さな1つの地域で行われるのではなく、地球全体から霊界にもおよぶようですが、しかしこのハルマゲドンの戦いによって、ようやく人間による支配は終わりを告げて、いよいよ神による統治、至福の千年王国が始まるというのです。

ロシア・ウクライナ問題がこじれて、第三次世界大戦が起こって、この第七文明は滅んでしまうのか、もしくはこの混乱に乗じて、レプタリアンが地球に侵略してくるのか、あるいは地球意識がそれらを拒んで、反作用として浄化され、この第七文明も滅んでいくのか、これらの可能性も十分に考えられます。

実際に2022年5月24日、ソ罗斯は『世界経済フォーラム』が開催する『ダボス会議の』の中で、ロシアとウクライナの争い、第三次世界大戦の始まりとなる可能性を指摘した上で、現文明の存続のためにプーチン大統領をいち早く倒さなければならない、と語りました。

彼らのマスコミ思想

「ユダヤ人は加害者ではなく被害者」ということを前提に話を進めてまいりますが、彼らの「計画」を見破っていくためにも、彼らのマスコミにおける思想にも、目を向けておく必要があります。

たとえばかつてアメリカに、ウォルター・リップマンというユダヤ人がいました。彼はジャーナリズムで最も権威があると言われている『ピュリッツァー賞』を2回も受賞していて、「ジャーナリズムの鑑」とまで称されま

した。しかし彼は、自身の著書『世論』の中で、大衆のことを「大きな獣」とも、「困惑した群れ」とも評した上で、次のように述べています。

「大衆（マス）に対して、自分たちが民主的な権力を行使していると幻想を抱かせなければならない。

この幻想はエリート層によって支配されている大衆の同意（意見・世論）を、作り出すことによって形成されなければならない」

つまりアメリカで、「ジャーナリストの鑑」とまで称された人物が、「民主的な権力は幻想であり、大衆には幻想を抱かせておかなければならない」と述べているわけです。

また「プロパガンダ(政治宣伝)の専門家」に、エドワード・バーネイズというユダヤ系アメリカ人がおりました。彼も「広報の父」とまで呼ばれ、プロパガンダ(政治的宣伝)の専門家であり、『ライフ』という雑誌では、「20世紀最も影響力のあるアメリカ人100人」にも選ばれております。

その彼も、自身の書籍『プロパガンダ』の中で、大衆について、「不合理な本能に従って動く群れ」と表現した上で、ウォルター・リップマンと同じく、こう述べております。

「世の中の一般大衆（マス）が、どのような習慣を持ち、どのような意見を持つべきかといった事柄を、相手にそれと意識されずに知性的にコントロール（誘導）することは、民主主義を前提とする社会にとって非常に重要である。この仕組みを大衆の目に見えないカタチでコントロール（誘導）することのできる人々こそが、『目に見えない統治機構』を構成し、真の支配者として君臨している」

ウォルター・リップマンにしても、エドワード・バーネイズにしても、彼らの言葉から読み解ける「マスコミ思想」は、どちらもねじ曲がっていることが分かります。そのねじ曲がった「マスコミ思想」を一言で言えば、「いかに国民に民主主義が存在しているという幻想を抱かせ、国民を誘導できるか」ということです。

そしてアメリカでは、こうしたマスコミ思想を持った者たちが、「ジャーナリズムの鑑」とか、「広報の父」として高い評価を受けているのです。そしてその国に日本は戦争で敗れたわけです。

『幸福の科学』の会員ならば、トランプとバイデン、プーチンとゼレンスキーの報道を見て、「世界中のマスコミがいかに狂っているか」ということが、すでにお分かりなるはずです。しかしこうしたフェイクニュースの根底には、こうした彼らの「マスコミ思想」が横たわっているわけです。

アメリカのジャーナリストであるカール・バーンスタインによれば、かつてCIAは「モッキングバード作戦」というものを行ったと言われております。この作戦は、CIAが世界の約400人の記者と25のメディア組織を買収して、「フェイクニュース」を流し続けるというものです。

「嘘も百回言えば、実になる」、これはナチスの宣伝戦で言われたものですが、大衆に「嘘を真実だ」と思わせてしまう秘密の情報操作作戦、それが「モッキングバード作戦」だと言うのです。「モッキンバード」とは「キツツキ」を指しており、「根気よく嘴（くちばし）で木の幹を突っつくように、大衆に対して、メイン・ストリーム・メディアを使って、毎日毎日、毎週毎週、毎月毎月、フェイクニュースを大量に反復的に根気よく流し続ければ、「大衆は簡単に洗脳できる」という思想が、どうやら彼ら思想の中にはあるわけです。

動物農場の思想

キリスト教徒とユダヤ教徒は、互いに「豚」とか、「家畜」と呼んで蔑み合ってきたわけですが、ここで考えなければならない重要な物語があります。それはジョージ・オーウェルという方が書かれた『動物農場』という物語です。

ある農場に生まれた豚、馬、鶏などの家畜たちは、搾取し、ただ消費するだけの人間に対して憤りを感じていました。「人間はミルクも出せなければ卵も産めない。力も弱く畑も耕せず、我々動物に対して劣っているのに、しかし我々の上に君臨している」と。

そこで豚たちをリーダーにして立ち上がり、家畜たちは人間たちを追い出しました。

この動物たちによる革命で犠牲になったのは、一匹の母犬だけでした。しかしこのおかげで数匹の子犬たちが孤児になってしまいました。

そしてリーダーとなった豚は「動物農場七戒」を定めました。

1. 二本足で歩くものは我々の敵である。
2. 四本足で歩くものは我々の味方である。
3. 動物たるもの衣服を身に着けてはならない。
4. 動物たるものベッドで寝てはならない。
5. 動物たるもの酒を飲んでではない。
6. 動物たるもの他の動物を殺害してはならない。
7. すべての動物は平等である。

まるでモーセの十戒のようですが、動物たちは自由に生きるために、こうした「七戒」を決めて、そして彼らはお腹一杯に食べることができて幸せでした。しかし人間がいなくなったことで、やはりすぐに動物農場は困窮し始めました。

そこでリーダーの豚は、収穫量を増やすことを画策しました。しかし動物たちの意見は分かれて、やがて仲間割れを始めます。

すると豚は、母親を失って孤児となった子犬たちを見事に洗脳して、忠実な部下に育てあげて、狂暴な兵隊へと変えていきました。そして豚は、その狂暴化した犬たちを使って、自分と対立関係にある家畜を、次々とその農場から追い出していきました。

豚による独裁政治の始まりです。

馬や鶏といった他の動物たちは、人間がいたとき以上に朝から晩まで働かされる一方、豚たちだけは自らの労働を「頭脳労働」と称して、豪華な食事を食べ尽くしていました。

いつしか『動物農場』は、まるで豚を肥え太らせるためだけに、他の家畜たちが存在しているような、そんな悲惨な状況になってしまいました。

しかし豚たちの独裁政治は留まることを知らず、さらにエスカレートしていきます。彼らは自分たちがお気に入りの食材を手に入れるために、密かに人間と取り引きを交わして、鶏たちが必死に産んだ卵をこっそり売っていたのです。

これは『七戒』の中の「二本足で歩くものは敵である」を破っています。

過酷な重労働を強いられているために、ついに働き者であった馬が倒れてしまいます。しかしそんなことはお構いなしに、豚たちは人間が暮らしていた住居に住み始め、服を着て、二足歩行で歩き、酒を飲み、ベッドで寝るようになっていました。

家畜たちは、自分を搾取する人間を追い出したというのに、新たなリーダーとなった豚が、人間のごとく暮らして家畜たちを搾取していたわけです。

そして豚たちは、働き者だった倒れた馬を「医者に見せる」と嘘を言って、出荷してしまいます。

こうしていつしか『七戒』も書き換えられていました。

4. 動物たるもの「シーツの敷いた」ベッドで寝てはならない。
5. 動物たるもの「過度に」酒を飲んでではない。
6. 動物たるもの他の動物を「理由なく」殺害してはならない。
7. すべての動物は平等である。「ある動物は他の動物よりももっと平等である」

まるでモーセの『十戒』と『タルムード』のようです。

豚たちは人間のように二足歩行をし、服を着て、貴族のようにパーティーに興じて、そして彼らは言います。「豚以外の動物は下等である」と。

ジョージ・オーウェルという作家は、この『動物農場』の他にも、『1948』というデストピア社会を描いた小説が有名です。この『1984』では、現代の中国よりも激しく恐ろしい監視社会を築き、徹底した洗脳教育が行われていました。

ユダヤ人のジャン・ジャック・ルソーは、国民が搾取されることのない君主制を理想としました。君主制とは、王様など一人の支配者が国家を統治する形態のことです。しかしこれはあくまでも理想であって、現実的には『動物農場』の豚のように、やはり君主制になると国民を搾取するような、悲惨な独裁政治になってしまいます。だ

からこそルソーは、「搾取無き君主制が理想であるが、そんなこと実在できるはずもないから、自分は民主主義を選ぶ」と考えたわけです。そして彼の思想が、君主制を打ち砕く「フランス革命」に大きな影響を与えました。

ジョージ・オーウェルの小説やルソーの思想を眺めながら、西洋の歴史や思想を紐解いていくと、どうやらこの地球という星には、『動物農場』のような価値観が、深く根付いている者たちがいることが見て取れます。

それが結果的に、一部の人々の間に、自己防衛も含めて、『タルムード』のよう思想を信望させているのかもしれない。

彼らの欲望、それはおそらく物欲や名誉欲というものを超えた、支配欲と言えるかもしれません。

つまりもしかしたら彼らは、『不動物農場』的な発想を持っていて、「大衆に自由を与えることは危険」と考えて、人間を信じていない可能性があるわけです。

なぜなら彼らは、モーセ、イエス、ムハンマドは知っていても、仏陀を知らず、「すべての人間が仏性を持っており、仏に近づいていける」という大切な仏法真理を知らず、また人間が自己変革を成し遂げ、素晴らしく成長していく姿を見たことがないからです。ですから「愛し合い、睦み合い、信じ合うユートピア世界など幻想」と考えているのかもしれない。

ウススの手紙は本物か？

ルター警告

本書はあくまでも、「陰謀を暴くもの」ではなく、「僧団にイノベーションを起こし、世の中の常識を逆転させ、法輪を転じるためのもの」です。

遠回りの話をしているために、どうかこれをお忘れなくお願いいたします。

世界は今、コロナによって激変しておりますが、主の霊査からも明らかなように、これは中国の武漢で作られた生物兵器です。しかしオバマ政権が、約五年間に渡って、中国の武漢に資金援助していたことが公になっておりますから、厳密に見るとこの生物兵器は米中の合作です。

そして今、「パンでミック条約」や「IHR」によって世界各国は主権を失い、さらには「グレート・リセット」によって共産化することで、地球は終わりを迎える危機に直面しております。

だからこそ「コロナ問題」を深く考えねばならず、そしてコロナについて人類が考える時、見逃すことができないのがやはり「医療」です。

そして「医療」について、とても興味深い手紙があります。1489年、フランスの国王がキリスト教を「国教」にするために、ユダヤ人たちに対して、キリスト教への改宗を迫りました。もしもユダヤ人がこの要求を拒めば、フランスから追放され、家や土地などの不動産は捨てなければならなくなりました。すると東ローマ帝国の首都コンスタンチノーブルにあるユダヤコミュニティ（共同体）から、フランスのマルセイユにあるユダヤコミュニティへ、一通の手紙が届いたと伝えられております。その手紙を書いたのは、ユダヤ教の総主教ウススという人物でした。

ウススはユダヤの同胞に向けた手紙の中で、こんな恐ろしいことを述べていたと言われています。

「モーセに従う親しい同胞たちよ。

汝らの報告によるとフランス国王が、汝らにキリスト教に改宗せよと強制しているそうだが、やむを得ぬ、改宗せよ。

ただしモーセの律法は決して忘れては成らぬ。

彼らは汝らの財産を奪うとの事だが、されば汝らの子を商人に育て、将来はきっとキリスト教徒たちの財産を身ぐるみ巻き上げるがよい。また、汝らは生命も危険にさらされているというが、それなら汝らの子どもらを医者や薬剤師に育てて、いずれ彼らの生命を奪うがよい。

ユダヤ教の神殿の破壊に対しては、子どもらをキリスト教の神父にし、やがてキリスト教会を破滅に導く事だ。

この手紙では、まずユダヤ人たちに、「改宗した素振りをしろ」と言っております。そして驚くべきことに、この手紙では、「汝らの子を商人に育て、キリスト教徒たちの財産を身ぐるみ巻き上げよ」と言っております。そし

てこのウススの手紙を裏付けるように、『タルムード』にも次のような言葉があります。

非ユダヤ人はイスラエル人の財産に対し所有権を有せず」（シュルハン・アルフ、第3巻正義の楯）。
非ユダヤ人の所有する財産は、本来ユダヤ人に属するものなれど、一時彼らに預けてあるだけである。
汝に何らの代償もなくして、これら財産をユダヤ人の手に収めるも可なり（シュルハン・アルクーショツツェ
ハミツバッド第348条）。

この『タルムード』の言葉は、まさに「ウススの手紙」と合致するものです。

そしてさらに「ウススの手紙」では、「医者や薬剤師になって人を殺せ」と明確に述べています。

世界で人数は少なくても、強大な力を持つユダヤ人を自称している者たち、そしてコロナによって世界人類は今、「医療」に対して関心が高まっております。そして『タルムード』と「ウススの手紙」には整合性がみられる中で、「医師や薬剤師になって人の命を奪え」という言葉があります。

以上のことから、人類は今、この「ウススの手紙」が本物なのか、それとも偽物なのか、それを検証する必要があると言えるでしょう。

そしてマルチン・ルターも、『ユダヤ人と彼らの嘘』という小冊子の中で、「彼らはキリスト教徒の死を熱望している」とした上で、こう小冊子をしめくりました。

ルター最後の説教 ユダヤ人たちへの警告

もし彼ら（ユダヤ人）が我々全員を殺戮する事ができるなら、彼らは喜んでそうするでしょう。

事実、彼らの多く、特に外科医と医者であるとか称している者達は、キリスト教徒を殺害しているのです。

彼らは一時間、あるいは1ヵ月で死をもたらし毒を人々に与え、どのように薬を扱ったらよいのか熟達しているのです。

このようにルターは、たしかにユダヤ人と自称する者たちが、医師として称する者たちは治療を行い、人を救っているように見せかけながら、その実、実際には人々を殺害していると述べているわけです。

ですから「ウススの手紙」、あるいは「ルターの言葉」が真実のものなのか、それを検証する必要がありますし、もしもこれらの言葉の数々が真実であるならば、私たちは大救世主に仕える者として、人々の魂のみならず肉体的にも救うべく、それ相応の知識を身につけておかなければならない、と言えるでしょう。

ロックフェラーの謎

では、現代の医学はどのように成立したのでしょうか。

かつて日本はドイツから医学を輸入していました。そのために昔の日本の医師たちがカルテを書く場合、ドイツ語でなければならず、そのために日本の医師たちは、医学の勉強と共にドイツ語も勉強しなければなりませんでした。

しかしアメリカとの戦争、そして敗戦によって、現代の日本では、カルテを日本語で書いており、日本の医師たちは、アメリカ式の西洋医学を学んでおります。すなわち今の日本では、「医学」はアメリカから直輸入しているわけです。

では、アメリカの「医学」を確立させるにあたり、大きな貢献を遂げた人物とは、果たして誰でしょうか？
それはロックフェラーです。

「ロックフェラーはユダヤ人ではない」とされていますが、ロックフェラーは親イスラエル、親ユダヤ派で有名です。なぜならユダヤ人のジェイコブ・シフという人物が経営する『クーン・ローブ商会』が、実は石油王ロックフェラーの後援者となり、陰で彼を支えて育ててきたからです。

ジョン・ロックフェラーは霊言の中でも、少し仏陀を軽んじるかのような、裏側系の発言をしておりましたが、何とも厄介なことに、ジョン・ロックフェラーの息子デイヴィッド・ロックフェラーの思想も、やはり『タルムード』の思想にかなり共通するものがあります。なぜなら『大紀元エポックタイムズ』の調べによれば、1973年8月10日、デイヴィッド・ロックフェラーは『ニューヨークタイムズ紙』に、中国共産党を設立した毛沢東の「文化大革命」を大絶賛する記事を次のように書いているからです。

文化大革命の代価はどうであれ、彼ら（中共）は明らかに成功である。彼らは毛沢東率いる高効率な政府を作った。中国で行われた歴史的にも重要な社会主義の実験は成功した。

あるいはデイヴィッド・ロックフェラーは、自身の著『ロックフェラーの回顧録 下巻』の中で、明確にこう述べています。

なかには、わたしたちがアメリカの国益に反する秘密結社に属していると信じる者さえいる。そういう手合いの説明によると、一族とわたしは「国際主義者」であり、世界中の仲間たちとともに、より統合的でグローバルな政治経済構造を、言うなれば、ひとつの世界を構築しようとたくらんでいるという。もし、それが罪であるならば、わたしは有罪であり、それを誇りに思う。

このようにロックフェラーは、自身がグローバリストであること、さらには世界に一つの政治構造を築くことも明言しているわけです。

一般的にロックフェラーは、キリスト教プロテスタントと言われております。しかしもしかしたら彼も、ユダヤ人たちと親しくしていく中で、改宗した「隠れユダヤ教徒」なのかもしれません。なぜならデイヴィッド・ロックフェラーの手足のごとく動き、アメリカの政界の中で重鎮として活躍していた共和党のヘンリー・キシンジャーも、民主党のズビグネフ・ブレジンスキーも共にユダヤ人だからです。

このズビグネフ・ブレジンスキーという人物の思想は、まさに『タルムード』の家畜思想そのものです。なぜなら彼は、次のような驚くべきことを述べて、その映像はネットでも話題になっているからです。

大衆は今、政治に目覚め始めており、これは今までなかったことであり、これまでの時代は、大衆を誘導することは簡単だったが、大衆が政治に目覚め始めた今は、大衆を誘導するよりも虐殺するほうが簡単である。

このブレジンスキーの発言は、『CFR』というシンクタンクで語られたものであり、この『CFR』というシンクタンクを設立したのもデイヴィッド・ロックフェラーです。

以上のことから、ロックフェラーは一般的にはユダヤ人ではありませんが、しかしすでにユダヤ教に改宗して、『タルムード』の思想を持ち、物欲や名誉欲を超えた支配欲を持っている、その可能性は十分にあります。

実際に興味深い事実として、2010年5月に『ロックフェラー財団』が公表した「未来シナリオ」という報告書には、2020年から始まるコロナパンデミックの未来が描かれていました。

それはネットで検索すれば、誰も確認することができます。『Scenarios for the Future of Technology and International Development (テクノロジーの未来のシナリオと国際開発)』

このシナリオによれば、新型ウイルス発生によって世界的なパンデミックが起こり、世界中の人々が建物や店舗の入口で体温を測り、アルコール消毒を行うようになるろいうのです。人々は自分からワクチン接種を求めて、ロックダウンなどが行われることによって、次第に経済は崩壊していく、そうした流れの中で厳格な監視社会へと移行していく、こうした予言めいたことを、2010年に『ロックフェラー財団』は発表していたわけです。

アメリカ医療業界の闇

これたのことを前提において、ロックフェラーが築き上げてきたアメリカ医療界の歴史を見ていきたいと思えます。

まずジョン・ロックフェラーは、1901年に『ロックフェラー医学研究センター』を設立しました。この研究所には野口英世も在籍しておりました。その後、この研究所は『ロックフェラー大学』となり、ジョン・ロックフェラーは、その他にも『シカゴ大学』なども設立しています。そしてこれらの大学は、大勢のノーベル生理学・医学賞の受賞者を輩出してきました。

そして西洋医学の中でも、アメリカの医学界の命運を分けたのが、20世紀初頭に書かれた「フレクスナー・レポート」です。このレポートは「アメリカ医師会（AMA）」が、医療の教育や環境を把握するために書かれた調査書です。正式名称は「アメリカとカナダの医療教育」なのですが、しかしこのレポートを作成したのが、エイブラハム・フレクスナーというユダヤ人であったために、一般的には「フレクスナー・レポート」と呼ばれています。

もちろん「フレクスナー・レポートによって医療教育の水準が上がった」という意見もありますが、しかしその一方で、「フレクスナー・レポートには別の目的があったのではないか」という主張も根強くあります。

なぜなら「フレクスナー・レポート」以前は、患者の希望に合わせて、医師と相談の上、患者自身が最適な治療を選択していたのですが、しかしこの「フレクスナー・レポート」以降は、「アロパシー医学が中心になった」と言われているからです。

アロパシー医学とは、いわゆる「西洋医学（対症医学）」と呼ばれている医学で、たとえば風邪をひいた時には抗炎症剤を、発熱には解熱剤を、といったようにあらゆる病の症状を薬で治める医学のことです。

しかもこの「フレクスナー・レポート」以降、患者に投与される多くの薬品が、石油から作られた有機化学物質となりました。実は石油という黒い液体を、最も高額で人々に売りつける方法とは、薬に精製することであったのです。

日本人は世界で最も薬を飲んでいる民ですから、それはつまり、日本人は製薬会社と石油会社を最も儲けさせている民である、ということです。

そしてこの「フレクスナーレポート」以降、「医師は高度な大学院教育によってのみ養成されるべきであり、その医学大学では、アロパシー医学を教える学校のみ認定する」という取り決めになりました。そのために、この基準を満たさない医学校は、次々に廃校に追いやられました。

その結果、1910年にアメリカに155校あった医学校は、十年後の1920年には約半分の70校が廃校となり、85校にまで減りました。廃校に追いやられた学校のほとんどが、薬の投与によって病気を治すのではなく、カウンセリングなどによって治す別の治療を行う学校でした。

こうして「アロパシー医学」が、アメリカから世界中に広められ、定着し、この医学が「西洋医学」とまで称されるようになりました。そのためにナチュロパシー（自然療法）やホメオパシー（同種療法）などは、「代替療法」と呼ばれるようになりました。そして敗戦以降は日本人も、「医師というのは症状に合わせて薬を処方するもの」と当然のように考え、日本でも「アロパシー医学」が主流になりました。

しかし医師の崎谷博征氏が書かれた『医療ビジネスの闇』という書籍を紐解くと、ロスチャイルド財閥やロックフェラー財閥が、巨大製薬企業（ビッグファーマ）の株主となって投資していることが分かります。そしてそれらの巨大製薬会社が、アメリカの医科大学に対して多額の寄付を行うことで、それらの医大で使用されている教科書の内容は、どれも彼らにとって都合のよいものとなっているわけです。

すなわち現在の地球の医療の状況と言えることは、世界中の多くの国々で西洋医学が行われており、医師を志す者たちは、「アロパシー医学」というロックフェラーの洗礼を受けなければ、医師に成ることは出来ないわけです。そして医師を志す者たちは、当たり前のようにアロパシー医学を学び、そして医師免許を取得すると、石油を多用する薬の投与が行うおとで、製薬会社と石油会社を儲けさせているわけです。

この「西洋医学」について、白隠禅師は霊言の中で、このように教えてくださっております。

白隠 現代人は、西洋医学一辺倒であって、どうやら、「ほかのものがある」ということを忘れてきたようです。西洋医学は、確かに、「目に見えて効果がある」という面があるでしょう。しかし、みなさん、騙されてはいけません。西洋医学は、モルモットに対しては、さまざまな実験をして効果をあげているかもしれないけれども、人間に対して効くかどうかは分かりません。【中略】私が思うに、西洋医学の基礎は、どうやら唯物信仰にあるようです。西洋医学では、人間を物質の集合体だと思っておるようです。【中略】みなさん、カプセルとか、錠剤とか、粉薬とか、いろいろなものをのまされておりますが、それがほんとうに効果があるかどうか、どうして分かるのですか。また、効かなかった場合には、その責任を追及できますか。何かの薬をのんで、それが、ほかのものに悪い影響を与えていることが、いっぱいあるのです。神仏は人間に、そういう薬が必要であるような肉体は与えてはいないのです。薬が必要なら、生まれてきたときに、腰に袋をぶら下げて持ってくるはずですよ。

その一方で、エドガー・ケイシーは、現代医学について、次のように教えてくださっております。

もちろん、現代医学の基礎には、唯物論的な思考がありますが、その奥には霊的な考え方や天使たちの指導が必ずあります。

だから、「現代医学で治るものは現代医学で早く治す」という合理主義精神を持つことを勧めたいと思います。

医学には、様々な欲望や悪意が入り混じっている可能性があるために、医学における中道の考え方は困難を極めます。

なぜなら西洋医学の成り立ち、そして「アロパシー医学」を見ていくと、闇を感じざるを得ないからです。

そしてこれから紹介する、癌治療と精神医学について少しの知識を持てば、もはや医学に闇があることなど歴然と言えるでしょう。

S T A P細胞で一躍有名になった小保方晴子さんの霊言の「あとがき」の中で、総裁先生が「本書の出版により、いつもの如く、私はある種のリスクを背負ってしまったが、「地獄のCIA」に負けてばかりもいられないのだ」と述べられていたことを、どうか思い出して頂きたいのです。

癌の専門医も拒む癌治療

いよ、いよ、私が主張している「新たな政治的アプローチ」に近づいてまいりましたので、どうか根気強くお付き合いください。

日々、科学は進歩し、医療技術も発達しているというのに、図にもありますように、なぜか日本では今、癌で亡くなる人が増え続けております。

アメリカをはじめ他の先進国では、癌の死亡者数は減っているというのに、日本では2人に1人が癌になり、3人に1人が癌で死んでいます。

『幸福の科学』を支えてくださっている使命ある信者さんの中にも、癌で亡くなられた方は非常に大勢おられるために、この癌の問題を考えることは非常に大切と言えるでしょう。

先の大戦における原爆投下によって、広島市では約14万人、長崎では約7万4千人が亡くなりましたが、日本で癌で亡くなる人の数は年間で約40万人、一日に約千人です。つまり実は原爆で亡くなった人の数より、癌で亡くなる人の数のほうが遥かに多いわけです。

しかしウスの手紙に「医者になって人を殺せ」とありましたように、実は癌治療には、不思議なことがたくさんあります。

たとえば癌の専門医261人に対して、「今、日本の医療で行われている、切る（摘出手術）、盛る（抗癌剤）、焼く（放射線治療）といった癌の三大治療について、自分が癌と診断されたら受けるか？」とアンケートを行ったところ、たった一人を除いて260人が「拒否する」と答えました。つまり癌の専門医が、「自分が患者に提供している今の三大癌治療を自分は受けない」と述べたわけです。

それは癌の専門医自身が、「三大癌治療は治らない」と言っているようなものです。

しかしドイツのレオナード・コールドウェルという医師は、次のように豪語しています。「90%以上の癌は数週間のうちに完治し、手術も放射線治療も化学療法も必要ない」と。

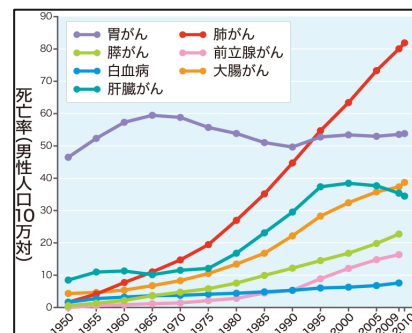
この医師の言葉がもしも事実ならば、恐ろしいことです。なぜなら毎日千人もの日本人が、本当は助かるはずなのに、亡くなっていることになるからです。表現を変えれば、助かる癌治療を行わないために、癌治療によって殺されていることとなります。

また、もしもこのドイツ医師の言葉が真実のものであるならば、「人を殺めるために医師になれ」というウスの手紙、あるいは「彼らは薬を熟知して人を殺している」というルターという言葉が現実のものとなります。

矛盾だらけの癌治療

では、日本において、どのような「癌治療」が行われているのでしょうか。

たとえば「癌細胞はブドウ糖をエネルギー源とする」、これはノーベル生理学・医学賞を受賞したオットー・ワールブルグ博士が1923年に論文で発表し、すでに証明されている科学的事実です。癌は細胞の病気ですが、つまりその癌細胞のエサはブドウ糖なわけです。



しかし日本の癌治療では、なぜか癌細胞のエサであるブドウ糖を、わざわざ癌患者に点滴しております。

抗癌剤は0.1ミリで数万円もするばかりか、一番高い抗癌剤「ペグイントロン」は1グラムで3億3170万円で、これをミリ単位で売って製薬会社は儲けているわけです。

世界で最初に開発された抗癌剤「ナイトロジェンマスタード」は、第一次世界大戦中にドイツが開発した毒ガスの「マスタードガス」を改良して完成しました。「マスタードガスという毒ガスを使うことで細胞分裂を抑える」という殺戮にも似た治療法が発見されたわけです。

そしてその後の抗癌剤も、やはり基本的には「細胞分裂を抑える」という非常に強い劇薬を人体に投じるものです。ですから「抗癌剤」は、かなり強い劇薬であるために、取り扱う際は基本的に手袋やマスク、ガウン、ゴーグル、キャップなどの防護具を使用しなければなりません。なぜなら医師たちは、抗癌剤という劇薬に触れたら大変なことになることを知っているからです。

抗癌剤治療を受けると、1～2週間頃には、だるさや吐き気、食欲低下、口内炎、下痢などが現れることがあり、2週間以降は、手足のしびれ、皮膚の乾燥、色素沈着などが現れることがあります。そしてこの頃から髪の毛が抜け始め、4～5週間が経過するとほとんどの髪の毛が抜けてしまいます。

しかも1985年、『アメリカ国立癌研究所(NCI)』のヴィンセント・デヴィータ所長は、米議会において、「分子生物学的に見ても抗癌剤で癌は治せない」と証言しています。デヴィータ所長は、数千ページの報告書を提出し、米議会で次のような驚くべき証言を行いました。「反抗癌剤遺伝子(ADG)の働きによって、抗癌剤の効き目を打ち消してしまうことがわかった。むしろ抗癌剤は他の臓器などに、新たな癌を発生させてしまう増癌剤でしかない」と。

船瀬俊介という作家にしてジャーナリストは、厚生労働省に電話をかけて、「抗癌剤って効くんですか？」と取材しました。すると「抗癌剤で癌を治せないのは常識でございます。それは周知の事実です。大変な猛毒です」と答えました。

実は「抗癌剤では癌は治せない、むしろ抗癌剤によって人は死ぬ」という主張は、すでに日本の医師を含めて、世界中の多くの医師たちが述べていることです。しかしそうした医師たちの主張は、きちんと検討されることはなく、それでも製薬会社は、抗癌剤によって大儲けし続けています。

ただし、自分は受けたくなくても、癌三大治療を患者に勧めている医師は大勢いることでしょう。

内海聡医師は、「現代医学の9割は不要」と主張されて、『医学不要論』という書籍を書かれています。その本の中で、日本の医師についてこう述べています。

「日本の医師ほど洗脳されやすいバカはいない。

まあ自己を全否定することになるので、認めたくないのも当然だろう。読者の方だって、自分の存在や覚えてきたものを全否定するのは難しいだろうから」

癌治療でも、地球温暖化問題でも、コロナやワクチンの問題でも、必ず専門家たちの意見は分かれるものです。しかし大手メディアが採用し、そして政府が取り入れている専門家の意見は、必ず製薬会社の利益になっているわけです。

中国の日本に対する侵略の危険性を増しているというのに、日本の国防費は年間わずか約5兆円です。そのために日本人は、米軍に「思いやり予算」というお金を出して、在日米軍に駐留してもらい、中国から守ってもらっております。だから日本はアメリカに内政干渉され続けております。しかしその一方、日本の医療費は約44兆円です。これは赤ん坊から老人まで含めて、日本人一人当たりだと約34万円にもなります。

全人類の2%に満たない1億3千万人の日本人が、実は世界の薬の40%も消費しており、まさに日本人は薬漬けの状態なわけです。

しかもその中でも、癌利権だけで年間約15兆円、国防費の3倍です。しかしこの15兆円は、本当はほとんど不必要なかもしれないわけです。つまり日本人は世界で最も癌治療にお金をかけながらも、しかし一日千人もの命が助かっていない、だからそのお金は無駄かもしれない、ということです。

癌の代替治療

日本人は世界で最も癌死亡しているわけですが、その一方で、別の癌治療によって癌を治している人は大勢おられます。

「実はビタミンCが癌細胞を殺す」、これはノーベル賞を2度も受賞されたライナス・ポーリング博士によって、1970年に発見された驚くべき癌治療の一つです。美容や健康のために数グラムのビタミンCを点滴することがありますが、その数十倍の60グラムの高濃度ビタミンCを点滴することで、実は癌は数カ月のうちに消えていくことが分かっているのです。

しかしアメリカで最も権威ある総合病院『メイヨークリニック』の研究者が、一流の科学雑誌に「ビタミンC癌治療は効果がない」と発表しました。そのために、この「ビタミンCによる癌治療」は、これまで医学界で否定されてきました。

そして「高濃度ビタミンC点滴治療」の代わりに、抗癌剤ばかりが売れて製薬会社を儲けさせてきたのです。

その他にも、ムラキテルミさんという女性は、医師から「余命3カ月」と宣告されながら、医癌を克服されて本も出版されています。

では、彼女はいかにして、医師たちに従わずに癌を克服されたのでしょうか？

それは「オートファジー」です。

2016年、生物学者で理学博士の大隅良典東大教授は、『オートファジーの仕組みの解明』により、ノーベル生理学・医学賞を受賞されました。私たちの肉体の細胞の中では、「オートファジー」という活動が行われることがあり、大隅教授はその活動の仕組みを解明することによって、ノーベル賞を受賞されたわけです。

私たちの体内の細胞は、食べものから取り出した栄養と、呼吸によって得た酸素を使って、エネルギーを作り出しています。そして古くなった細胞（ミトコンドリア）は、大量の活性酸素を発生させるために、この活性酸素が人体にとっては大きなダメージなわけです。しかし私たちの体内で、この「オートファジー」という活動が行われることによって、古い細胞が新しく生まれ変わります。すると体内で発生する活性酸素の量が減るために、人体へのダメージを軽減できるばかりか、癌など様々な病に対する予防効果まで明らかになったのです。

健康な人から生まれたばかりの赤ん坊でも、癌細胞は1日に数千個はできているそうです。それは人間が生活するとゴミが出るように、細胞というものは癌化するからだそうです。

しかし部屋の中のゴミの場合、ゴミ収集車が週に2、3回は回収に来てくれるために、部屋の中がゴミだらけにならずに済みます。

しかし癌という病にかかってしまうと、ゴミ収集車が回収に来る回数が極端に減ってしまうために、部屋の中がゴミだらけになってしまった状態だと言うのです。

しかしその際に、この「オートファジー効果」が働くことによって、癌化した細胞が新しく生まれ変わることによって、私たちが健康の状態に再び戻してくれるというわけです。

では、どうすれば私たち人間は、自身の細胞を新しく生まれ変わらせる、「オートファジー」を行えるのでしょうか。食べものによって得られた栄養が十分にある状態では、この「オートファジー」があまり働きません。そもそも「オートファジー」は、体が強いストレスを受けた際にも生き残れるよう組み込まれたシステムだからです。

そのために細胞が飢餓状態になった時こそ、「オートファジー」の働きは活発化します。

具体的には、最後に食事をしてから16時間ほど経過しなければ、「オートファジー」は活発化しません。つまり「16時間の空腹の時間」を作らないかぎり、「オートファジー」によって、古い細胞を新しく生まれ変わらせることはできないわけです。

2016年に大隅教授が、「オートファジーの仕組みの解明」によって、ノーベル賞を受賞されたということは、「プチ断食の医療効果が科学的に証明された」ということです。空腹が健康にも美容にも良いために、「空腹感幸福感」という価値観が、間違っていなかったことが科学的に証明されたわけです。

熱々のステーキを思い浮かべてみてください。あの肉を体内で消化するという行為は、実は体内で大きなエネルギーを必要とします。むしろ空腹状態の時、体の中ではメンテナンスが行われて、癌化した細胞が新たに生ま



れ変わり、修復していたのです。

そのために「1日1食のプチ断食によって、細胞が修復していく、癌も治る」ということは、すでに世界的にとっても有名なことです。だからこそムラキテルミさんも、「余命3カ月」と宣告されながらも、プチ断食によって癌を克服されて、そしてたくさんのレシピ本を出版されているわけです。

かつてキリスト教のイエスも言っています。「断食する時は、偽善者たちのようにやつれた顔つきをしてはいけません（『マタイの福音書6章16節』）」と。実は「断食が健康に良い」ということは、洋の東西を問わず、昔から言われてきたことなのです。

また総裁先生は、『メシアの法』の「第4章 地球の心 2 メシアになるためのイニシエーション」の中で、次のようにも述べておられます。

断食行などは、危険性を伴いますが、完成された方法があれば、よき指導者の下に、この世でもすることは可能ではありません。そして断食行等をやっている、必ず肉体と霊体が遊離する時期が来ます。そうしたときに、霊的な自覚が出てくるのです。

実際に、癌治療のために「オートファジー効果」を目的にプチ断食を行った方が、スピリチュアルな体験をされていたりもします。

『琉球温熱療法院』の屋比久勝子院長は、「琉球温熱療法」という新たな癌治療を考案され、多くの人々の命を救っておられます。平均体温が36.5以上あると簡単には病気にはならず、体温を温めることで癌細胞は消えていくというのです。だから無理のない範囲で、温泉に入ってゆっくり休むことは、本当に体に良いわけです。

しかしこの「プチ断食による癌治療」も、「高濃度ビタミンC点滴治療」も、「琉球温熱療法」も、一向に報道されず、日本の癌治療では、癌のエサとなる糖分が点滴されて、狂ったほどに高い抗癌治療が売れて、日本人が一日千人も亡くなっているわけです。

なぜなら製薬会社が広告主になっていることもあって、大手マスコミがそれらの代替治療を取り上げないからです。

だからこそ、2012年に『癌は5年以内に日本から消える！』という書籍を書かれた医師の宗像久男医師は、日本国民にこう呼びかけるのです。「去年、37万人が癌で亡くなったけど、医師として一人も死ぬ必要はなかったと断言する。【中略】皆さん起きてくださいよ！日本人は殺されているよ！」と。

医師こそ洗脳されている！？

宗像久雄医師は講演の中で、こうも教えてくれました。

「医師は6年も医大に行って『現代医学』の勉強するから、あらゆる知識を持っている。

しかし大勢の日本人が癌で亡くなっているから、医師たちは癌で人が亡くなることを当然と思っている。

彼らは癌になったら助からないと思っ込んでいます。

だから自分の命を守るためには、皆さんが知識武装して彼らに勝たなければならない」

この言葉は驚きかもしれません。受験戦争を勝ち抜いて一流大学を出られ、必死に勉強に継ぐ勉強を続けられて、医師免許を取得されたお医者さまたちが、時に間違っただけを習っていて、間違っただけの治療をしていることもある、と言っているのですから、もはや驚きを通り越して悲しみとも言えます。

しかし考えてもみてください。総裁先生は『学歴信仰の落とし穴』の中で、次のように述べられておられます。

私が教わったマルクス経済学の先生は、マルクスの『資本論』の目次を暗記しており、それを覚えているところを見せたかったのですが、十分もかかって、黒板いっぱい『資本論』の目次をビシッと書いていました。私は、おかしくておかしくて笑っていたのですが、その先生は、途中で忘れてしまったらしく、二回ぐらい本をチラリと見て書いていたのです。

それは、現在だと、何の意味もなく、ほとんど紙くず同然のものでしょう。それを、いかにも“聖典”という感じで、宗教のように崇拜していた時代があったわけです。

「まったく無価値になるもので名をあげた人たちは、いったい何だったのだろう」と思うところもありますが、経済学部においても、そういう勉強をした人が卒業生としてたくさん出て失敗しているので、やはり、「駄目だった」ということなのでしょう。

この総裁先生のお言葉からも、たとえ必死に、必死に勉強して学んだことであっても、時には間違っただけを学んでいることもありえる、ということは十分に言えるのではないのでしょうか。ユダヤ人を自称するマルクスが作った経済学が無価値であるように、そうした同じ間違いは、医学の中にも潜んでいる可能性があるのではないのでしょうか。

あるいは福岡県にある『一番街総合診療所』の細川博司医師は、「医者こそ最も洗脳されている。世の人々はその医者の権威に騙されている」とも豪語しております。細川医師によれば、「人間ドッグに半年に一回行くバカもいるけれども、CTなどの検査で放射線を浴びるから癌になる」というのです。

実際にCT検査は、レントゲン検査の1000倍放線も放射線を浴びることが分かっております。もちろんたった1回のCT検査では、癌にはならないでしょうが、しかし頻繁にCTを受けていたらどうでしょうか。

また細川医師は、「病理学的検査」にも継承を鳴らされております。

すでに述べましたように、人が家に住めば必ずゴミが出るように、赤ん坊でも細胞は癌化しています。

しかしゴミ回収車が来て、ゴミ袋を引き取ってくれるように、その癌細胞は悪性にはならず済むことで、人は生きていけるわけです。

しかしこの「病理検査」というのは、まさに臓器や皮膚などの病気が発生したと思われる組織の一部を採取し、それを標本にして、顕微鏡などで観察することです。つまり「病理検査」というのは、癌細胞をゴミ袋にたとえるならば、その袋を特殊な棒でかじって、わざわざ開ける行為だと細川医師は言うわけです。

しかし細川医師曰く、「人間には自然治癒力（オートファジー）があるにもかかわらず、ゴミ袋を開けると悪臭を放つように、「病理検査」で癌細胞を悪性かどうかを診るためにかじるから、癌が広がり散らばるのだ」と言うわけです。癌細胞もゴミ袋と一緒に、開けずに自然治癒力で片付けたほうが良いというのです。

だから彼は豪語します。「浴びるから癌になり、かじるから散らばり広がり、切る、盛る、焼くから殺される、早期発見、早期殺人」と。

また、『TokyoDDクリニック』の院長を務め、『NPO法人薬害研究センター』の理事長をも務める内海聡医師も次のように話します。「医者でも看護師でも、僕より性格良い人、可愛い子、たくさんいるんですけど皆、ダメなんです。なぜなら彼らが習っていること（現代医学）がすでに間違いだからです。彼らは一生懸命、殺人をやっていることを知らない。知っているのにジレンマに陥ってウツになっている」と。

あるいは内海聡医師は書籍『医学不要論』の最後に次のように述べておられます。

○あなたが健康を欲するのなら

あなたが病気をよくしたいと願うのなら、健康を維持したいと願うのなら、まず徹底的に知ることであり、徹底的に勉強することである。徹底的に理解することである。そこに「専門家でないからわからない」などという、愚かな言い訳が介在する余地はない。

あなたが自己の意見にとらわれ、受動的にだれかの情報を求めている限り、あなたに幸福も健康も訪れることはない。

素人であればあるほど、健康になれる可能性は高いのである、中途半端に知識を持っている人間ほど、ありもしない病気に振り回されるだけである。

これらの医師たちの言葉は正直、驚きです。しかし私自身、1日3食食べる時よりも、プチ断食している時のほうが遥かに元気ですし、また「プチ断食」を人に教えてあげたことで、癌と診断され、余命宣告までされた法友が、元気にピンピンしているのを幾度か見てきました。

しかし医師ほど、こうした「情報」を毛嫌いして、抗癌剤を進めてくることも、かなり多くあります。なぜなら間は、なかなか自分が必死に学んできたことが、実はかなりの大部分が間違っていた、とは認めたくないからです。それは自分の存在意義にも関わることだからです。

しかし「アロパシー医学」を軸にした「西洋医学」の成り立ちを考えれば、現在の医学に問題があることは、もはや歴然です。

なぜなら製薬会社と石油会社の利益が、西洋医学の根本にあるからです。

そしてその背景には、小説『動物農場』にもあるような支配欲が見て取れて、その支配欲の基には、「自分たちだけが人間だ、その他は家畜だ」という思想と精神が横たわっているわけです。

ドイツのレオナード・コールドウェル、宗像久男先生、細川博司先生、内海聡先生などの話から、「本当は癌は治る病だけれども、しかし癌治療によって多くの人が殺されている可能性がある」ということが次第に分かってきます。

するとマルチン・ルターが述べた「ユダヤ人の医師たちは、1時間、あるいは1ヵ月で死をもたらす毒を人々に与え、どのように薬を扱ったらよいのか熟達している」という言葉の真実性が増してきます。

さらにウスの手紙にある、「汝らの子どもらを医者や薬剤師に育てて、いずれ彼らの生命を奪うがよい」という言葉も、やはり信ぴょう性が増してきます。

彼らがユダヤ人を自称している以上、これは宗教者として、これは知っておくべき情報の一つと言えるでしょう。

そして「実は癌治療が人の命を救うどころか、もしかしたら奪っている可能性がある」という話は、実は政治に深く関係してくるのです。なぜなら癌の専門医たちは、「薬事法」という法律に縛られて、癌の三大治療以外の治療法を日本の人々に提供できない状態にあるからです。

つまり摘出術、放射線治療、抗癌剤といった癌三大治療を行い、これらの治療に保険を適用することはできても、「プチ断食による癌治療」も、「高濃度ビタミンC点滴治療」も、「琉球温熱療法」も、薬事法にひっかかる恐れがあり、また保険適用できないわけです。

「薬事法改正」によって日本人の命を救う、ここに『幸福実現党』の出番があるわけです。

ただし、「世の常識を逆転させる」という意味では、次の精神医学が重要な鍵となることでしょう。

減量、健康、長寿のために

肉食より納豆

精神医学の話に進む前に、少しだけ余談ですが、ダイエットや健康の話をしていただきます。

私は若い頃、スポーツジムで働いていて、少し「栄養学」を学びましたし、また、食事についてもかなり勉強してきたので、ご参考になれば幸いです。

救世の使命を持つ信仰者のみならず、人類が今、どうしても知っておくべきこと、それは「人類を今、最も殺している病は『アテローム血栓症』である」、ということです。

この「アテローム血栓症」が、脳梗塞、心筋梗塞を引き起こして、多くの人の命を奪っているのです。

では、人はどうしたらこの「アテローム血栓症」になるのかと言えば、それは肉食です。

日々、レプタリアンのように肉食ばかり続けることによって、いつしか血液がドロドロに詰まり、「アテローム血栓症」となり、脳梗塞と心筋梗塞を引き起こして死ぬことが多いわけです。なぜなら人の体温よりも、牛や豚や鳥などの体温が約40度と高いために、なかなかこれらの脂が溶けないからです。

逆に「アテローム血栓症」の防止に、とても良い食品は納豆です。

「遺伝子組み換え大豆の納豆」は、なるべく避けるべきですが、納豆に含まれている「ナットウキナーゼ」という菌が、血液をサラサラにして、「アテローム血栓症」を防ぐわけです。

しかも納豆をかき混ぜる回数も、多目のほうがこの「ナットウキナーゼ」が多く出て、血液をサラサラにすると言われています。

栄養学の観点から考えれば、人間は日々、炭水化物、脂質、そしてタンパク質といった三大栄養素をバランスよく接種しなければなりません。簡単に言ってしまえば、人はお米の他に、肉や豆などのタンパク質、あるいは油も必要不可欠なわけです。

ちなみに「あぶら」という漢字には2通りあり、一つが肉などに含まれている「脂」であり、もう一つオリーブオイルなどの植物性の「油」です。つまり「あぶら」にも良質なものと、そうでないものがあるわけです。

三大栄養素の一つである脂質も、人間にとって必要不可欠なわけですが、しかし「脂」を避けて「油」を摂ることが、ダイエットにも、そして健康にも、さらには長寿にもなるわけです。

なぜなら現代人の多くが、タンパク質の接種を、まるでレプタリアンのように肉食にばかり頼っているために、無駄な脂質までたくさん接種してしまっているからです。そのために多くの現代人が太り、不健康になり、「アテ

ローム血栓症」によって、早く命を落としております。

単純に言って、「現代人はタンパク質の接種の仕方が下手」と言っても良いでしょう。

それは知識の不足から来るものです。知識があれば家は建ちますが、知識が無ければ、人でと材料はあっても家が建たないのと同じです。ボディビルダーが体に執着しているかいないか、という問題は別としても、彼らは知識豊富だから、美しい肉体を築けるわけです。

そして人間が必ず行わなければならないタンパク質接種を、「肉を食べる」という方法から、「納豆を食べる」という方法に変えるだけで、無駄な脂の接種が避けられて、ダイエットに効果的どころか、「アテローム血栓症」も避けられるわけです。

つまり納豆を食べることは、減量と健康と長寿に結びつくわけです。

低燃費の体質に誰でもなれる

しかし「納豆よりも肉が食べたい」、そう考えるのが現代人は普通でしょう。

では、その考えは本当でしょうか？

たとえばへトへトに疲れて、急激にお腹が空いた時、「ステーキとライスとコーンスープ」というメニューと、「納豆とご飯とみそ汁」というメニューがあったら、誰もがステーキを選ぶでしょうし、おそらく私もそうするかもしれません。

しかし急激にお腹を空かせなければ良いのです。そこまで急激に空かない時点で、納豆や小さな豆腐のパックを先に食べてしまえば、実はそんなにお腹は空かないのです。

すると「ステーキとライス」というメニューより、「納豆ご飯」で十分であり、むしろステーキが気持ち悪く見えます。

お腹が空いてたまらない空腹の人には、たった1個のシュークリームが宝物に見えますが、しかし大食い競争の大会に出て、100個ケーキを食べた人にとっては、たった1個のケーキが拷問のように見えます。

つまり私たち人間という生き物は、自分の体の状態によって、同じ食べ物でも見え方が大きく異なり、その見え方が時に正反対のことさえあるわけです。

「肉食」を避けて「豆」などを食べていくコツとして、お腹が急激に減るまで、とにかく我慢して納豆を食べるより、むしろそれほど我慢することなく、積極的に納豆や豆腐を食べていくことです。食べることを我慢するのではなく、ある程度は空腹に耐えつつも、ほんのちょっとだけ我慢して先に納豆を食べてしまうわけです。

我慢して食べないのではなく、むしろ我慢して先に食べてることで、ステーキなどの脂物を食べたくならない状態を維持すれば良いのです。

しかしこれも結構、大変です。なぜなら納豆と豆腐を必ず持ち歩かなければならないからです。

「納豆は1日1パックが良い、2パックは食べ過ぎだ」という意見もありますが、私はその情報こそ偽情報だと考えています。

なぜなら私は、納豆を毎日、最低でも2パック以上、食べ続ける人生を送っているのに、私はむしろ太らず健康でいるからです。

そしてそういう栄養の取り方をしていると、実は次第に体質が変わってきて、空腹が苦痛ではなくなってきました。むしろ「空腹は幸福感」という感覚になっていくのです。

車で言うと、燃費が良くなっていく感じです。大型トラックの平均燃費は、燃料1リットル当たり約4キロですが、郵便局などで使用されているスーパーカブは、リッター約70キロです。これは約18倍の燃費の良さです。

これと同じで、人間の体も高たんぱく低脂肪の食事を積極的に続けていると、少量の食事でも動ける体質へと次第に変化していくのです。

これは本当に誰でも可能なことです。「1日1食のプチ断食の生活なんか、絶対に自分には無理」と考えている人もいるかもしれませんが、無理しない範囲で、少しずつやれば必ず誰でも体質は変わっていきます。

つまり「食べなければ動けない」というのは、一種の洗脳なわけです。なぜなら誰でも皮下脂肪があるからで

す。

ですから食事を食べて、お腹の中の食材を燃料として燃やして体を動かすのではなく、皮下脂肪を燃料として使って、体を動かせば燃費は良くなります。そうした意味では、「栄養学」もまだ発展途上にある、あるいは嘘が紛れ込んでいるとも言えるでしょう。

なぜなら『太陽の法』に描かれている金星人ではありませんが、本当に光合成だけで、何十年と不食を続けている人も世の中にはいるからです。こうした不食の人というのは、栄養学の観点からは説明がつかないのです。

役者の榎木孝明さんも、数年前に30日間の不食にチャレンジして、現在でも10日くらい食べないことがあるそうです。

ですから不食までチャレンジする必要はありませんが、徐々に毎日の食事を減らしていくことで、1日3食が2食になり、1日2食が1.5食になり、最終的に1日1食のプチ断食生活を開始することは本当に可能です。

「お腹が空いた」と思ったら、すぐに何かを食べる人がいますが、しかし皮下脂肪があるのに、本当に体が栄養を欲しているのか、それを自身の体に問うてみる必要があります。

汚い話ですが、お腹の中に空気が溜まっていて、ゲップしてその空気を出したら、空腹がおさまった、ということもあります。

食事に関する体質は、チャレンジすれば割と簡単に改善できます。

これはまた逆も可能で、誰でもマクドナルドなどのジャンクな物ばかり食べていると、燃費の悪い体質になってしまって、すぐに空腹になって、疲れやすくなったり、ステーキなどが食べたくなくなります。私も外食が続いて、現代人が行っているような普通の1日3食の食事が一週間でも続いてしまうと、元の体質に戻すのに根気が要ります。

そうした燃費の悪い体質になってしまうと、私も空腹がとても苦痛になって、「あれ、空腹感は幸福感なんてどうして言えてたんだらう？」と首をかしげることもあります。

しかしまた根気よく体質改善に取り組めば、次第に1日3食が2食になり、やがて1日1.5食くらいになり、一週間もすれば、元の体質に戻って、再び「空腹感は幸福感」という感覚になり、1日1食になります。この体質改善の日数は、おそらくその人の体重にもよるでしょう。

とにかく、お腹がそれほど空いていなくても、我慢して高タンパク低脂肪の食事を先に摂ってしまえば、ステーキのことは忘れられ、体質は徐々に変えていけます。

肉食を避けたファスティング

脂物を避けて納豆や豆腐ばかり食べているために、「脂質が足りないからカサつく」と感じた場合は、オリーブオイルなどの植物性油を接種することをおススメいたします。

とにかく自分が食べている食事について、三大栄養素の何を摂り過ぎているか、何が足りていないのかを良く知ることです。「何の栄養を食べているのか分からない」、という知識不足の状況が一番、不健康と早死に繋がります。

そして適度に空腹を味わい、空腹感を抑える工夫を行い、自分の体を急激に空腹にしない努力も行いながら、食べなくても動ける体質を作っていくことで、「オートファジー」が始まっていきます。

すでに述べましたように、食事を採らない時間が16時間を超えると、細胞が新たに生まれ変わり、癌を克服する「オートファジー」が始まるわけです。

「空腹は減量、健康、長寿に良いという意味での幸福感」を実感し続けることで、「1日1食のプチ断食」が継続的に続いていくのです。

これが「ファスティング」です。

「ファスト」とは「断食」を意味します。そして実は誰もが毎日、ある意味において、「プチ断食」しているのです。

なぜなら寝ながらご飯を食べる人は少なく、誰もが夜寝て、朝起きるまでの間、何も食べていないからです。つまり睡眠中の7時間とか、8数時間くらいは、誰もが断食しているわけです。

だから朝食のことを「ブレイクファスト」と言い、これは「断食を壊す」という意味でもあります。

このように良質な食事を心がけて体質が良くなってくると、その食べない時間が少しずつ伸びていき、やがて16時間でもでも耐えられるようになり、「空腹は幸福感」という感覚に近づいていくわけです。

しかも「肉食をなるべく避けたファスティング」は、癌と脳梗塞と心筋梗塞を避けて、減量、健康、長寿に良いだけでなく、元気にもなる一方で、ショートスリーパーにもなります。

つまり「ファスティング」すると、睡眠時間が5時間くらいにもなるために、一日がとても充実もしていくわけです。

「1年間に千冊の書を読む」では、ありませんが読書の時間、精進の時間が増えます。

ただし、このショートスリーパーの新たな生活に慣れるのも、とても大変です。なぜならこれまで8時間寝ていた人が、体質改善と共に睡眠時間が減っていくわけですが、1日の組み立てが困難になるからです。

もちろんこれだけの少ない「情報」でファスティングをするのは危険ですから、話半分に聞きつつも、しかしご自身で勉強してみると良いと思います。

なぜならファスティングをすると、必ずと言って良いほどデトックスが起こり、長年の間に体内に蓄積されてきた有害毒物を排出させる「好転反応」が起きるからです。「好転反応」とは、体の悪い部分が良くなる反応のことで、症状としては体のダルさ、眠さ、下痢、頭痛、吹き出物がでる場合があります。

だから本書では、「ファスティングというものがある」、ということを知る程度にして、ご自身で勉強してください。

とにかく成長期の子どものならばまだしも、二十歳を越えた大人が、わざわざ朝、昼、晩の3食も食べることに、さらには肉食ばかりすることは、実は不健康と早死にまっすぐ歩んでいることを、どうかご参考までに知っておいてください。

精神科医は心の医者ではない

精神医学は科学ではない

さて、少しだけ食事に関する話をさせて頂きましたが、再び医学の話、その中でも精神医学の話に戻らせていただきます。

宗教と精神医学は、共に「心の医者」を語っているわけですから、宗教家として「精神医学」の知識も、ある程度は知っておくべきでしょう。

なぜなら現在、心を病んだ人々が行っている先は、お寺でも、教会でも、神社でもなく、「〇〇クリニック」という精神科だからです。

日本では90年代から広告代理店を使って、「心の風邪」というキャンペーンが繰り返されました。その結果、今では駅という駅に心療内科があり、精神疾患になっている日本人は600万人を超えております。現在の日本人の心の惨状として、働いている3人に1人が心に何かしらの患いを持っており、そして心病む彼らは、「宗教」より「医学」に権威を感じて、安易にクリニックに足を運んでいるわけです。

実は日本は、世界で最も精神病床（ベッド）の数が多く、人生をボロボロにしている人がたくさんおり、その一方で、製薬会社がボロ儲けしております。

ですから、まず心の医者、看護師として、知らなければならない知識として、「精神医学は科学ではない」という事実です。

たとえば足が折れて病院に行く場合、あるいはインフルエンザに罹ったかもしれないから病院に行く場合、こうした時、医師は必ず検査を行ってくれます。たとえば「レントゲン」などを見せてくれて「足が折れている」、あるいは「ウイルスに感染している」と、科学的根拠を示して患者に教えてくれます。それが医学であり、そして科学というものです。

科学とは誰がやっても同じ結果になるものです。これを「科学の再現性」と言います。つまり同じ条件ならばAさんが実験をしても、Bさんが実験しても同じ結果になるのが科学の大原則であり、そして医学は科学を根底

に持っております。

しかし実は精神医学には、この「科学の再現性」がまったく存在しません。

つまり精神医学には、まったく科学的根拠が無いわけです。もう少し詳しく言うならば、精神医学は単なる「仮説」に基づいて診断しているに過ぎないわけです。

この仮説のことを「モノアミン仮説」と言います。

「モノアミン」とはドーパミン、ノルアドレナリン、アドレナリン、セロトニン、ヒスタミンなどの神経伝達物質の総称のことです。このうちノルアドレナリン、ドーパミン、セロトニンという化学物質が、精神的な病と密接な関連があり、それがうつ病、パニック障害、不安障害、統合失調症などを引き起こしている、という仮説があるわけです。

しかしその脳内の「セロトニン」、「ノルアドレナリン」、「ドーパミン」のバランスなどは、科学的に測ることができません。たとえばCT、MRIという医療機器によって、脳内の構造を調べて、脳出血・脳梗塞・脳腫瘍などを発見することならばできます。また脳内の血流の流れを測定することもできます。しかしCTやMRIなどは、「セロトニン」などの脳内の化学物質を調べているわけではないのです。

「モノアミン仮説」の話を知れば、誰もが「医者たちは脳内のそれらの化学物質をどうにか計測して、バランスが崩れていることを見つけ出して、うつとか、パニック障害と診断しているのだろう」と想像するものですが、実はまったくそうではないということです。

よく世間で言われる話として、「日光浴するとセロトニンが増えて鬱病に良い」という話があります。しかし実はセロトニンなどの脳内にあるモノアミンを、現代の科学では測ったことは一度もありません。たしかに人が日光浴すると元気になることは分かっていますが、「セロトニンが増える」というのは単なる憶測に過ぎないわけです。

ネズミや死んだ人間の脳を開いて、モノアミンを確認したことがあります。セロトニンの動きそのものを測ったことは一度もないのです。それでも精神科医やセラピストを名乗る人たちは、「日光浴するとセロトニンが増える」と堂々と語るわけです。

確認したことがないものを「増える」と言っているのですから、嘘なのです。

つまり「精神科医」と名乗る者たちというのは、患者の話を聴いて、測ることのできないモノアミンを主観で予測して、科学的根拠を持たない仮説に基づいて、単なる予測と憶測で、もしくは独断と偏見によって、「貴方は鬱病です」、「貴方は不安障害です」と診断を下し、そして薬を処方しているわけです。

そのために一人の患者に対して、医師によって診断結果も異なれば、診断方法も大きく異なります。たとえば相模原の障害者施設で、一人の男によって19人もの人々が殺害され、26人が負傷するという悲惨な大事件がありました。この恐ろしい事件を行った犯人に対して4人の精神科医たちは、それぞれ合計7つもの異なる病名をつけました。これなどまさに、先ほど述べた「誰がやっても同じ結果になる」という「科学の再現性」が無い証拠に過ぎません。

このように精神医学は科学ではないのです。科学を装った似非科学、それが精神医学なわけです。

しかし「現代医学」には多大な権威が与えられており、そして人間は権威に弱いところがあります。あるいは「内科や外科などの他の医学が科学だから、きっと精神医学も科学なのだろう」と多くの人々が誤解、錯覚しているわけです。そのために精神科に足を運ぶ人が、ここ十数年で激増しているわけです。

「精神科に行く人が増え続けている」、それは精神医学が、心の病を治していない一つの証拠と言えるでしょう。

精神薬はと自殺と変死の関係

精神医学で特に問題なのは「精神薬」です。鬱病は「自殺予備軍」と呼ばれることもあるというのに、鬱病の薬「パキシル」の添付文書には、はっきりとこう記されております。

「自殺に関するリスクが増加するとの報告」、「自殺企図のリスクが増加するとの報告」

米田倫康という方が書かれた『発達障害のウソ』という書籍によれば、10歳の男の子が「うつ病」、「注意欠

陥多動性障害」、「行動障害」と診断されて、この「パキシル」を処方され、2013年6月14日に自殺したそうです。しかし「パキシル」の添付文書には、こうも記されています。

「警告 海外で実施した7～18歳のうつ病性障害患者を対象としたプラセボ対照試験において有効性が確認できなかったとの報告、また、自殺に関するリスクが増加するとの報告もあるので、本剤を18歳未満のうつ病性障害患者に投与する際には適応を慎重に検討すること。」

つまり「18歳以下のうつ病には効果が無く、自殺の可能性がある」というわけです。こんな危険な薬を10歳の子どもに処方して、そして自殺させてしまうことは罪ではないのでしょうか？

あるいは「ジェイゾロフト」という抗うつ薬にも、やはり同じく「自殺念慮、自殺企図のリスクが増加するとの報告がある」と明確に記されています。

名古屋市の25歳の男性は十分な診察もないまま、医師から処方された向精神薬を服用し続けて、依存症になった末に自ら命を絶ちました。この男性が向精神薬を服用し始めたのは19歳の時でした。体の不調を訴え、名古屋市内の精神科クリニックで診察を受けると、医師はわずかな時間でうつ病と診断し、「リタリン」という向精神薬を処方しました。リタリンを飲み始めた当初、この男性の表情はイキイキとし、元気を取り戻したかのように見えました。

しかしすぐに不眠や体のだるさを口にして、やがて「リタリン」の服用量が増えていきました。彼は別の病院やクリニックを次々と掛け持ちして、受診して、いつしかこの「リタリン」という薬を大量に集めるようになりました。そして彼が自殺した際、彼の部屋には、リタリンの空き瓶や大量の処方箋が散乱していました。どうやら30以上の医療機関が、彼に「リタリン」を処方しており、彼のパソコンには「リタリンをやめるためにはどうすればいいのか」と書き残されていました。

実は「リタリン」は、覚せい剤と同じ中枢神経刺激薬です。そのために「リタリン」の依存症になる人が増えて、違法売買、処方箋の偽造、窃盗にまで手を出す人が出てきました。そのために安易に「リタリン」を処方していたクリニックが、次々と摘発され、密かな社会問題となりました。

あからさまに受付に、「薬の処方だけの患者さんはこちら」と表示するクリニックまで現れて、1日に300人以上の患者に、リタリンの処方箋を出して、わずか1日で百万円以上も荒稼ぎする精神科医もでてきたのです。

こうしたことから厚生労働省は、2008年から「診察時間は最低5分以上」という規制を設けました。しかし精神科医と患者が顔なじみの場合、互いに口裏を合わせて、5分以上診察したことにして、患者の回転数を上げることも簡単にできてしまいます。

精神科医の西城有朋という方が書かれた『精神科医はなぜ心を病むのか？』という書籍によれば、精神科医は一般人の5倍も自殺しているそうです。アメリカの精神科医の自殺者数は、一般の人の7倍、若い成り立ての精神科医の場合は10倍の自殺率だそうです。まさに精神医学が、人の心を治せないために、精神科医こそ心が病んでいることが分かります。

「パキシル」や「ジェイゾロフト」といった抗鬱薬の添付文書に、「自殺」の文字があるように、向精神薬には必ずと言ってよいほど副作用が伴います。そうした精神薬の副作用のことを「賦活症候群」、または「アクチベーション・シンドローム」と言います。

かつてタレントの飯島愛さんがマンションの一室で孤独死して、亡くなってから数日後に発見されたことがありました。彼女も向精神薬を飲んでいただけが分かっております。しかし遺書が無いために「自殺」ではなく「変死」にされました。実は現在の日本では、遺書などが無く「自殺」と断定できない場合、「変死」にされております。

一般的に「日本の自殺者は減り続けている」と言われておりますが、しかしそれに反比例するように増えているのが、実はこの「変死」なのです。元兵庫県警刑事の飛松五男（とびまついつお）氏は、次のように証言しております。

「ひと昔前は、自殺に対する考え方も緩く、ある程度は自殺として処理していました。ただ最近は、遺書などの具体的な証拠がなければ、自殺とは認めず、変死体として処理するようになったそうです。すると、見かけ上の自殺者数が減るだけでなく、司法解剖を行うので予算を要求しやすくなる、一石二鳥なわけです」

厚生労働省は「自殺は減っている」と発表しておりますが、その一方で、「変死者」は発表していないために、

様々な憶測が飛び交い、「日本の変死者は年間に約15万人もあり、その半数が自殺ではないか」という話まであります。

もちろん精神科医の中には、丁寧に人々の話を聴いて、断薬治療にあたりたり、抜苦与樂を行おうとする医師もごく少数ではありますが存在しております。しかし精神科医のほとんどが、診察に来た人の話を聴いて、仮説に基づいて診断し、科学的根拠なく病名をつけて、向精神薬を処方するという行為を、「治療」と呼んでいるのが現代の精神医学の惨状です。

精神薬は殺人鬼をつくる

そして向精神薬を飲んで、「消えたい」、「死にたい」と思わない場合、「憎たらしい」、「殺したい」と考えてしまうこともよくあります。つまり暴力や殺人に向かってしまうことがあるわけです。

実のところ近年起きている凶悪事件の背後には、かなりの確率で向精神薬が関与しています。死者15名、負傷者24名を出したアメリカの「コロンバイン高校銃乱射事件」をはじめ、アメリカで起き続けている幾つもの銃乱射事件において、やはり犯人たちは向精神薬を服用していました。

市街地に飛行機が墜落して大惨事になりかねなかった「全日空61便ハイジャック機長刺殺事件」、死者一名、負傷者2名を出した「西鉄バスジャック事件」、児童8人が殺害され、負傷者15人を出した「池田小学校事件」などの犯人たちも皆、向精神薬を服用していました。

特に「池田小学校事件」の犯人の宅間守にいたっては、裁判の中で、「向精神薬を飲まなければ池田小学校には行かなかった」という趣旨の証言までしているほどです。

「京都アニメーション放火殺人事件」では、スタジオが全焼し、社員36人が亡くなり、33人が重軽傷と負うという過去に例を見ない大惨事となりました。

犯人の男は、2012年にコンビニ強盗事件を起こして刑務所に入り、服役中の2015年頃から、暴言を吐いたり、幻聴を聞いたり、自殺未遂などを起こし、そのために彼は37歳で精神疾患と診断され、向精神薬の服薬を始めます。2016年に刑務所を出所した後、この男は、さいたま市のアパートに移り住み、訪問看護などの支援を受けながら、精神科クリニックに通っていました。

しかし彼は、事件の約2か月前から、通院と服薬を中断します。覚せい剤にも禁断症状があるように、実は向精神薬の突然の断薬は非常に危険です。

ここから、彼はさらに狂い始め、大音量で音楽を流したりするために、近隣住民とトラブルとなり、警察が度々、駆けつけるようになりました。事件の4日前には、大きな叫び声を出し、アパートの隣室の玄関を叩き、不審に思った隣人の胸ぐらを掴んで髪を引っ張り、「黙れ、殺すぞ」、「余裕ねえんだ」などと、意味不明なことを述べています。

そして2019年7月18日、41歳の時に凶行に及ぶわけです。

「京アニ事件」の犯人は、向精神薬を飲まずとも、コンビニ強盗をするくらいですから、もともと凶暴性はあったことでしょう。

精神科医は、「通院と服薬をやめたから凶行におよんだ」と述べていますが、しかし本当に、向精神薬には何の問題も無かったのでしょうか？警察に逮捕された時も、この男は「お前ら全部知っているだろ！」と異常なことを述べておりました。

1960年代のアメリカにも銃はありましたが、しかし無差別の殺人事件は起きてはおらず、当時はあまりなくて、今では当然のように町という町にあるもの、それは精神科クリニックと言えるでしょう。

はっきり言って、「心の医者」を自称する精神科医たちが、処方している精神薬は、「自殺」と「他殺」の両面からとても危険であり、だから精神科に通うことによって、人生をボロボロにしている人が世界中にいて、特に日本人に多いわけです。

人生は一冊の問題集でありますから、「将来に不安がある」、「過去を思い返すと胸が締め付けられる」といった取り越し苦労、あるいは持ち越し苦労は誰にでもあるものです。そのために眠れず、天井をまんじりと見つめることもあるかもしれません。

真理を学んでいる者でも、眠れぬ夜を過ごすことはあるものです。

そうした時に、もしも精神科に行くと、すぐに病名をつけられて、そして薬を処方されます。

その結果、さらに鬱病が酷くなる、あるいは暴力的になってしまう、ということが実は世界中で起きているのです。

これはおそらく一体の憑依していた悪霊が、薬を飲んだことによって、二体、三体に憑依されたと言えるでしょう。

そうした状態で精神科に行くと、さらに別の病名がつけられて、さらに大量の薬が処方されて、そして自殺するか、猟奇的な殺人事件が起こるか、といったことが世界中でたくさん起きてきたわけです。

それはまさに、小悪魔が憑いて、「死ぬ」とか、「殺せ」とか、そうしたことを囁いていると言えるでしょう。

この精神医学の悪行は、宗教家として、見過ごすことのできないものではないでしょうか。

精神病院の恐ろしさ

「心の医者」と称する精神医学の闇を見ているわけですが、こんなレベルではありません。

私たちは、隣の家の子の昨日の晩御飯が何でもあったのも分からないように、実は精神病院の中で何が行われているのかも分からないことだらけなのです。

なぜなら精神科医の中でも、「精神保健指定医」という特別な医師には、多大な権限が与えられていて、たとえ本人の同意が無くても、誰か一人、家族の同意さえあれば、精神病院に強制入院させることが可能だからです。

警察官でさえ現行犯逮捕か、裁判所の令状が無ければ人を連行することはできませんが、しかし「精神保健指定医」には、家族一人の同意さえあれば、誰かを強制的に入院させられるのです。

そのために家族が、遺産目当てに精神科医と共謀して、親を強制入院させて薬漬けにすることで、本当に精神病にしてしまうということまで起きています。

ある女性は、精神科医が身内にいる夫の付き添いで、精神科の診察に連れて行かれました。彼女は夫が精神科にかかっていたので、その付き添いのつもりで行ったのです。しかし彼女はまったく健康であったにも関わらず、医師から「入院です」と告げられ、カルテに判を押されると、抵抗する間もなく、2人の男性看護師から両手、両肩を掴まれて閉鎖病棟の隔離室へと連れて行かれました。

こうしたことが日本中で起きているために、日本では今、1日に平均約500人が強制入院させられています。

日本全国では合計30万人が入院しており、日本は世界一精神病床が多い国であり、これは世界の5分の1を占めており、50年以上、精神病院に入れられている人の数は1773人です。

健康だった人が強制入院させられて、薬漬けにされたら、正常ではなくなってしまうでしょうが、十年、二十年と精神病院に入れられて薬漬けにされると、もはや社会復帰は困難を極めると言えるでしょう。しかし精神病院は患者に大量の薬を処方しながら、家族から、国家から利益を上げているわけです。

しかも精神科病院では今、「身体拘束」が増えています。

厚生労働省の調査によれば、その数はここ10年で2倍以上にも増えて、1日1万人以上の人々が身体拘束されております。

しかも精神病院では、度々、暴力や性的な虐待行為が明らかになり、リンチによって死亡事件も発生しております。

鬱や統合失調症などの精神病は、もともとは死ぬような病気ではないはずですが。しかし精神病院から死亡退院する人の数は、1ヵ月に約2000人です。全国に30万人もいる入院患者のうち、精神病を治癒して退院する人の数は、1ヵ月にわずかたった300人ですから、約千人に1人の割合であり、つまり0.1%の生存率です。この数字だけを見ても、精神医学は明らかにおかしいことが分かります。

しかも2022年、政府は家族の同意が無くても強制入院できる法改正さえ試みておりましたから、これは宗教と政治の両方に関わる問題と言えるでしょう。

子ども標的にする精神医学

しかも米田倫康という方が書かれた『発達障害のバブルの真相』という書籍によれば、「モノアミン仮説」と同様に、精神科医たちは今、主観と憶測、独断と偏見でもって、次々と大勢の人々に「貴方は発達障害です」と診断を下しているそうです。

そのために日本で今、「発達障害」と診断される人がバブル的に増えているそうです。

それは「発達障害のチェックリスト」を見ても、明らかにおかしいことが分かります。

こうしたことから実は日本や世界では今、子どもから大人、あるいは生後わずか数ヶ月の乳幼児まで、精神科医たちによって「発達障害」という診断が、科学的根拠を持たずにされているのです。

脳を調べるわけでもないのに、子どもが遊んでいる光景を診て、数分足らずの診断で「発達障害」と診断されて、薬が処方されるようなことさえ世界中で起きております。

そして年端もいかない子どもが、自殺したり、あるいは突如、暴力的になったりしているわけです。アメリカの学校では、向精神薬がドラッグとして売買されています。

精神科医たちには、使命感や責任感が欠如しているのか、科学的な根拠が無くても平然と診断をくださるのです。すでに死者一名、負傷者2名を出した「西鉄バスジャック事件」の犯人も、向精神薬を飲んでいたことは述べましたが、この犯人となった少年は、実は医師の診断を直接は受けていないのです。代わりに電話で母親が医師と話して、精神病院に入院となり、そして外泊許可を得た際に、凶悪事件を起こしたのです。

精神科医と心理学者が作った75項目のチェックリスト

- ・初めて出てきた語や、普段あまり使わない語などを読み間違える
- ・文章の要点を正しく読みとることが難しい
- ・大人びている。ませている
- ・みんなから、「〇〇博士」「〇〇教授」と思われている(例:カレンダー博士)
- ・他の子どもは興味を持たないようなことに興味があり、「自分だけの知識世界」を持っている
- ・独特な目つきをすることがある

そうしたいい加減なマインドを持った責任感も、使命感も無い者たちが、次々に科学的な根拠も無いままに、「発達障害」と診断を下しているわけです。

ちなみに現代の精神医学からすれば、坂本竜馬も、織田信長も、レオナルド・ダヴィンチも、トーマス・エジソンも、アインシュタインも、モーツァルトといった光の天使、偉大なリーダーたちは皆、発達障害の部類に入るのだそうです。

私たち人間は、たしかに時に、脳に障害を持って生まれてくることはあります。しかしたしかに精神科医たちが行っている「発達障害」の診断には、このように大きな問題あるわけです。しかし大勢の人々が「医学の権威」に服従し、「精神医学」を科学と錯覚して、そうした「発達障害」という診断を受け入れて、次々と薬を飲んでしまっているわけです。

そしてついに2019年3月26日、「脱法覚せい剤」とまで呼ばれる「ビバンセ」という発達障害のADHD薬が、厚生労働省によって承認されました。この「ビバンセ」という薬は、国際的な一般名を「リスデキサンプエタミン」といって、この成分は、体内にある赤血球の酵素と化学反応して、「アンフェタミン」という物質に素早く変化します。「アンフェタミン」とは、「覚せい剤」そのものです。つまり「ADHD薬・ビバンセ」は「覚せい剤の物質」なわけです。

しかも「ビバンセ」が認可される前年の2018年3月23日、厚生労働省は、「本日付で、『覚せい剤原料を指定する政令』を一部改正し、新たに1物質を覚せい剤原料として指定しました」と述べておりました。つまり厚生労働省は、「リスデキサンプエタミン」が覚せい剤原料であるために、「最高で1年以上の有期懲役又は情状により500万円以下の罰金」と制定していたわけです。

にもかかわらず厚生労働省は、そのちょうど翌年の3月、この「リスデキサンプエタミン」こと「ビバンセ」を、発達障害の薬として認可しているわけです。

ビバンセの添付文書を見ると、「4. 効能・効果 小児期における注意欠陥／多動性障害 (AD/HD)」とあり、さらには「自殺念慮や自殺行為があらわれることがある」という文言もあります。

はっきり言って、厚生労働省がやっていること、そして精神医学は狂っていると言えるでしょう。

これもまた、「政治」と「宗教」、その両方に関わる問題と言えるでしょう。

権威に弱さが招いた罪

とても、とても遠回りをしながら、「癌治療」に続いて、「精神医学」の問題について述べているわけですが、やはりこれらを説明するためには、「苛酷過ぎるユダヤの歴史」と「恵まれ過ぎた日本の歴史」を述べた上で、『タルムード』の思想をご紹介しなければ、おそらく理解不可能と思われると思ったからです。

実際にある法友に癌治療の話をして、「それは信じられない」と言われた経験から、「日本人はお人よしだから遠回りをしなければならない」、というのが私の本音です。

では、なぜ、こんな狂ったことが起きているのでしょうか。

癌は治るのに多くの日本人が死んでいる、心の医者と称する者たちが、むしろ人々の心を狂わせ、自殺や殺人が行われている、この狂った根本にあるもの、それは「権威の弱さ」と言えるでしょう。

おそらくは医師たちこそが、政府と医学の持つその「権威」にコロっと騙されて、「自分が学んできたことは間違いない」、「自分が行っていることは治療である」と信じ込んでいるのでしょう。

そして多くの人々が、医師免許という「権威」にコロっと騙されて、「お医者さんの言うことは間違いない」、「お医者さんの言う通り治療したら治る」と信じ込んでいるのでしょう。

その結果、多くの悲劇が生まれているのでしょう。

問題は「権威」にあると言えるでしょう。

アメリカのイェール大学の社会心理学者スタンレー・ミルグラム博士は、自身がユダヤ人を両親に持つことから、ナチスが行った『ホロコースト』のメカニズムを解明するために、「権威への服従実験」というものを行いました。

その実験とは、本当は電流が流れないのですが、しかしボタンを押すと電流が流れる演技をする役者をまず準備します。次に老若男女の実験対象者に来てもらいます。

そして「権威」を持つ人物が、その実験対象者に対して、ボタンを押すように依頼します。役者は苦痛の演技をして、絶叫し、金切り声を上げます。

しかし権威者は実験対象者に対して、冷酷な表情を浮かべて、「迷うことはありません。ボタンを押してください」と、さらにボタンを押すように依頼します。

一般的な通説として、「ナチスによるホロコーストによって、600万人ものユダヤ人が殺戮された」と言われております。その責任者と言われている人物に、アドルフ・アイヒマンという男がいました。この「権威への服従実験」は、その男の心理を解明するための実験でもありました。

そしてこの「権威への服従実験」によって、なんと約9割の人が素直に権威に従って、たとえ役者が絶叫を続けても、電流が流れるボタンを押し続けたのです。

この実験から「いかに人間が権威に弱い」ということが分かりました。

「ホロコースト」で主導的な役割を果たしたアドルフ・アイヒマンは、南米アルゼンチンに逃げて、逃亡生活を送っていましたが、イスラエルの秘密警察『モサド』によって捕まり、エルサレムで裁判を受けることとなります。

この時、連行されたアイヒマンの風貌を見て、世界中が驚きました。なぜなら彼があまりにも「普通の人」だったからです。冷酷無比な目つきをしているわけでもなく、とりわけサイコパスな雰囲気や目つきをしているわけでもなく、アイヒマンはどこにでもいるような、気の弱そうな普通の男でした。

このアイヒマンの裁判を傍聴していたユダヤ人の政治哲学者ハンナ・アーレントは、『エルサレムのアイヒマン』という書籍を書き、その副題には「悪の陳腐さについての報告」と名づけました。「陳腐」とは、「ありふれていて、古臭くて、つまらない」という意味です。

つまりハンナ・アーレントは、「ホロコーストという大きな罪も、アイヒマンが陳腐な男であったために起きた」と結論づけたわけです。「ホロコースト」という罪は、「恐るべき大きな悪」そのものですが、しかしその「大きな悪」を、実際に現場で取り仕切った者は、「陳腐な男」であったとアーレントは述べているわけです。

そして彼女は、「悪とはシステムを無批判に、受動的に受け入れることである」と結論づけております。

すなわち善悪を客観的に考えず、自分の意思を持たず、ただ受け身となって、システムを無批判に受動的に受け入れ、そして命令や指示に従い、「権威に流される」ことで、「ホロコースト」という最悪な悲劇は起きたと、

ハンナ・アーレントは述べているわけです。

そして彼女は、「陳腐な悪は、誰でも犯してしまう危険性を持っている」と警鐘を鳴らしています。

そしてミルグラム博士の「権威への服従実験」にもありますように、人間は権威に弱く、そしてその権威への弱さが、時に冷徹な虐待をも行わせてしまうことが明らかになっています。

そして政府にも、医学にも「権威」があるために、多くの医師たちがその権威に素直に従って、自分が行っている治療に疑問を持つことなく治療を行っています。

そして一流大学を出られた医師にも権威があるために、多くの人々が癌治療を受けたり、向精神薬を処方されています。

その結果、「人を治すように見せかけて人を殺し、心を癒すように見せかけて心を狂わせている」という、恐ろしいことが行われている可能性は、やはり捨てきれないわけです。

ここで今一度、抗癌剤や向精神薬という観点から、ルター言葉を思い出してください。「彼らは一時間、あるいは1ヵ月で死をもたらす毒を人々に与え、どのように薬を扱ったらよいのか熟達している」。

オウムとC I A

私は本書の冒頭で、日本人の心には、『オウム』や『旧統一教会』によって「新興宗教トラウマ」があると述べましたが、実はこのオウムという邪教も、精神医学やC I Aと深い関わりがあります。

「世界精神医学会」の会長ドナルド・ユーン・キャメロン博士は、「人間の脳にLSDの投与や電気ショックを与えて白紙の状態、無意識の状態にして、その状態の人間に命令を下せば人間をマインド・コントロール、つまり洗脳できる」と考えました。そしてこの博士を中心に、アメリカとカナダの両国で、「洗脳実験」、「マインドコントロール実験」が繰り返されました。

このC I Aの極秘洗脳実験のコードネームを、「MKウルトラ計画」と言います。

「MKウルトラ計画」は、1950年代初頭から少なくとも1960年代末まで、被験者にはまったく内緒で行われました。1973年、当時のC I A長官リチャード・ヘルムズが関連文書の破棄を命じたものの、しかし辛うじて残されていた数枚の文書が1975年になって、アメリカ連邦議会で初公開され、世間を騒がせました。

ですから「MKウルトラ計画」という洗脳実験、マインドコントロール実験は公然たる事実なわけです。

そしてこの「MKウルトラ」は『拷問と医者』という一冊の書籍にまとめられました。

果たしてどういう経路だったのか定かではありませんが、なぜかこの書物が、オウムの幹部で、医師でもあった林郁夫の手に渡ります。林郁夫は裁判の中でも、自身の著書の中でも、この『拷問と医者』という書籍に触れております。

こうして単なるヨガ団体であった『オウム神仙の会』は、C I A仕込みの精神医学を駆使したマインドコントロール、洗脳技術を用いることで、エセ宗教団体へと変貌を遂げたわけです。そしてこの『オウム』は罪深くも、「真理」という言葉を名前につけて、発展を遂げて、「地下鉄サリン事件」を起こすことで、日本中を恐怖のドン底に陥れました。

その結果、日本人の心の中に、「新興宗教＝洗脳する恐怖の団体」という方程式を、深く刻み込み、「新興宗教トラウマ」を日本国内に築きあげたわけです。

さらに『旧統一教会』、『現在の家庭連合』も、やはりC I Aとの関わりがあります。C I Aと『統一教会』の関係について述べているのが、「フレイザー報告書」です。

この報告書は、厳密には『統一教会』と韓国の中央情報局KC I Aとの関係について書かれたものですが、しかしC I AとKC I Aは、とても親しい間柄にあり、なおかつ日本と同様に韓国も、アメリカの従属的な立場にあることを考えれば、KC I AはC I Aの下部組織と言えるでしょう。というよりも「韓国のKC I AはC I Aによって作られた」と、かねてより言われているわけです。

こうした邪教の跋扈によって、多くの日本人が「精神医学は善だが、新興宗教は悪である」と考えているようになってしまったわけです。

そのために、『幸福の科学』の小冊子や書籍を献本しても、それらの中身には触れることなく、拒絶反応をしめすことが多々あるわけです。しかしその一方で、もしも眠れなかったり、不安を抱えて心が病むと、「心の風邪かも」などと口にして、気軽に精神科に足を運んで薬を処方されているわけです。

精神医学とWHOの目的

では、日本や世界で、次第に「宗教」が廃れていく一方で、偶然の産物として、「精神医学」は徐々に流行してきたのでしょうか？

そして単なる偶然の結果、コロナが流行したために、『WHO』は今、「パンデミック条項」や「IHR」を可決することで、それぞれの国々の主権を奪い取って、厳しい監視社会を築こうとしているのでしょうか？

さらには単なる偶然に『世界経済フォーラム』は、世界にデジタル化を推し進めつつ、人々が私有財産さえ持たない「グレート・リセット」という名の世界共産革命を、2030年に向けて進めているのでしょうか？

そしてただの偶然の流れで岸田首相も、「新しい資本主義」とか、「グレート・リセットの先にある世界を見据えて」と述べたのでしょうか？

さらに、さらに偶然の偶然が重なって、日本の内閣府は「ムーンショット計画」などと言い始めて、国民一人当たり数体のアバターを与えて、仮想空間で暮らせる時代を2050年に向けて構築していこうとしているのでしょうか？

『タルムード』という家畜思想、ルターの警鐘的な告発、医師になって人を殺せという「ウススの手紙」、人を治さず殺している癌治療、問題だらけの精神医学、そして『WHO』が行おうとしている「パンデミック条項」や「IHR」、さらには『世界経済フォーラム』の「グレート・リセット」、内閣府の「ムーンショット計画」、これらは単なる点に過ぎません。

しかし「鳩のように純粋で、蛇のように狡猾であれ」という観点から考えれば、点と点を結ぶことで面になり、面と面を繋げると立体になり、次第に邪悪なる者たちの壮大な地球侵略計画がおぼろげに見えてきます。

そして、ここで見逃してはならない重要な事実として、実は『精神医学』と『WHO』は、絶対に分けて考えるべきではないのです。

1940年代に『世界精神保健連盟』という組織が誕生し、この組織は『WHO』の参加にも入っております。この『世界精神保健連盟』の会長は、ブロック・シチョルムという人物でしたが、実は彼こそ『WHO』の初代事務局長です。

つまり世界の医療を牽引して、「パンデミック条約」や「IHR」を実現しようとする『WHO』の初代事務局長と、人々の心を癒しているように見せかけて狂わしている世界の精神医学を牽引する『世界精神保健連盟』の初代会長は同一人物であり、なおかつこのブロック・シチョルムという人物は、共産主義者です。

これから詳しく述べてまいります、『WHO』にも、精神医学にも、実はその根底には共産主義があります。

というよりも結論だけ先に述べてしまいましたが、本当は『タルムード』が共産思想なのです。共産思想を生み出したマルクスがユダヤ人であること、世界初の共産国家の指導者レーニンがユダヤ人であることを、どうか思い出してください。

ですからこれは共産主義との戦いなのです。

そしてこの『WHO』の初代事務局長ブロック・シチョルムは、『世界精神保健連盟』の初代会長としても講演を行い、次の7つの目標を掲げました。

- | |
|---------------|
| 第1 憲法の破壊 |
| 第2 国境の破壊 |
| 第3 誰でも拘束できる社会 |

- 第4 合法殺人の権利
- 第5 すべての宗教の撤廃
- 第6 性道德の破壊
- 第7 学校での薬物常用によって未来のリーダーを奪う

この悪魔的とも言える7つの項目は、1943年にホワイトハウスで行われた講演記録により、公式に音声記録も存在しています。あるいは1945年10月、『世界精神保健連盟』初代会長ブロック・シチョルムはワシントンD. Cで次のように言っています。「世界を支配するために、人々の心から排除すべきものは、個人主義、家族のしきたりへの忠誠、愛国心、宗教的な教義である」と。この音声も残っており、私のTwitterなど、ネットでご覧になれます。

はっきり言って現在の精神医学は、愛国心や宗教を排除することを目的とし、その根底には共産主義が深く横たわっているわけです。

それではブロック・シチョルムが掲げた7項目を、一つずつ見ていきたいと思います。

「第1 憲法の破壊」、これは日本が先の大戦に敗れたことによって行われたことであり、後ほど詳しく説明いたします。

「第2 国境の破壊」、これは多国籍企業によるグローバル化、あるいは中国共産党が行っている「一带一路」などによって、すでに押し進められています。

「第3 誰でも拘束できる社会」、これは精神医学の流行と精神病院の設置によって、今まさに実現しつつあります。すでに述べましたように、精神病への入院は、本人の同意が無くても、家族の同意さえあればできてしまいますが、2022年には家族の同意が無くても入院できるように、法律の改悪が試みられていました。

医師の内海聡さんの話によれば、1800年代から欧米で建てられはじめた精神病院は、もともと政治犯を取り締まり、強制的に入院させるためのものであったそうです。

もしもこのまま「パンデミック条約」や「IHR」が可決されて、ワクチン接種の強制化、その証明書の所持が義務化されてしまったら、この目標もかなり達成されることでしょう。

「第4 合法殺人の権利」、これはまさに歯向かう家畜を屠殺するデストピア社会です。どうやら彼らは、最終的に、ここまで目指しているようです。実際に中国では、政府に歯向かう者がことごとく殺されています。そしてロックフェラーは、そうした「文化大革命」を絶賛しているわけです。ちなみに『ロックフェラー財団』は、『WHO』が設立された当初から多額の支援を行ってきましたから、この財団の意向が『WHO』の経営に強く繁栄されていることは、まず間違いのないでしょう。

「第5 すべての宗教の撤廃」、これは彼らが精神医学を流行させ、宗教を隅に追いやることで、これまで積極的に行われてきました。

敗戦後にやってきたGHQは、「神道指令」や「修身教育の排除」を行い、宗教を公の場から隅に追いやりましたが、実はこのGHQには、思想的に間違っている彼らの意向が、色濃く繁栄されていたのです。

すなわち日本人の宗教に対する「スコトーマ (心理的盲点)」は偶然の産物ではない、ということです。さらに『オウム』や『統一教会』によって、日本人の心の中に「新興宗教トラウマ」が築かれました。

そして昔は精神病院というものは非常に珍しい存在だったのですが、90年代から「心の風邪」と称して「うつキャンペーン」が展開されたことで、駅という駅に「〇〇クリニック」が展開して、多くの日本人が気軽に足を運んで、より心を狂わせていきました。

実は『旧統一教会』の事件によって始まった、現在の日本で行われている宗教叩きの裏側にも、精神医学の関係者が深く絡んでおり、彼らは本気で、すべての宗教の撤廃を最終的的目的にしています。

すなわち彼らは、宗教を完全に潰しにかかってきている、ということです。

「第6 性道德の破壊」、これは日本でヘアヌードが解禁される際、かつて主は、マスコミ関係者が日本全土を色情地獄にすることに警鐘を鳴らされましたが、彼らは地上に色情地獄を作り出すことで、家畜とみなす我々が増えすぎて、やがてコントロールが効かなくなることを防ぎたいのでしょう。そのためには人々の性に対する価値観を乱して、なおかつ世の中を貧困化すれば、この目的はかなり達成されていきます。そして実際に今、この目的はかなり達成されています。

「第7 学校での薬物常用によって未来のリーダーを奪う」、これは今まさに、現在進行形で行われております。

すでに述べましたように、精神医学の立場からすると、坂本龍馬やエジソンなどの英雄や偉人、光の天使たちは皆、「発達障害」に値します。つまり次から次へと子どもたちに「発達障害」と診断を下して、薬を処方している目的は、ただ単に製薬会社が利益を得たいためだけではなく、光の天使が現れて、自分たちに歯向かってくることを防ぎたい、という恐ろしい狙いがあるわけです。

そのために今なお世界中の小中学校で、「発達障害の早期発見、早期治療」と称して、向精神薬の処方が子どもたちに行われております。

これらの、『世界精神保健連盟』初代会長にして、『WHO』の初代事務局長ブロック・シチョルムが掲げた目標を見れば、まさに精神医学の異常性が分かります。

表現を変えれば、精神医学そのものが「悪魔教」という見方さえできるわけです。なぜなら『WHO』と精神医学は、確かに「世界にデストピアを築こうとしている」と見て取ることができるからです。

「心の医者」と呼ばれながらも、その実、本当の意味においてユートピアとは真逆の方向に世の中を導き、心を癒すように見せて心を狂わせている、それが多くの精神科医たちの姿なわけです。

だからこそ私たちは、信仰においては鳩のように純粹に主と一体となりつつも、しかし情報においては主にぶら下がることなく自立し、蛇のごとく狡猾にならなければなりません。

なぜなら主エル・カンターレと共にある私たちこそ、真の心の医者だからです。

心病む者が求めしものは、「クスリ」ではなく、「サトリ」だからです。

第三章 ヤマトの心

メシア待望論

いろいろな話をしてきたために、もしかしたら、もうお忘れかもしれませんが、あくまでも本書は、僧団がイノベーションを起こして、弟子の力で法輪を転じていくためのものです。

しかし私は、日本の人々は心の中に、「トラウマ」と「スコトーマ」があるために、なかなかストレートの伝道が通じないから、かつての行基菩薩と同じく、「政治的アプローチ」から「宗教的アプローチ」を行っていくべきである、と主張しているわけです。

そしてその「政治的アプローチ」も、「従来の政治的アプローチ」ではなく、「新たな政治的アプローチ」が必要不可欠であると、私はそのように主張して、遠回りをしながら様々なことを述べてきたわけです。

そして、ここまで根気強く読んで来られた方ならば、「もういい加減、そろそろその与国が主張する『新たな政治的アプローチ』とやらの説明に入るのでは？」と思われるかもしれませんが、どうかお許してください。

「反ユダヤ主義」や「ユダヤ差別」と誤解されないためにも、「日本人とユダヤ人の関係」、そして「ユダヤのメシア論」についても、少しばかり説明させてください。

『幸福の科学』の信仰者が忘れてはならないことは、主は今から1億5千万年前、「エローヒム」という名で地上に降臨されて、そして中東でも信仰されてきたということです。

今から二千年前、ユダヤ教徒たちはイエスが現れると、一部のユダヤ教徒は預言者としては認めつつも、メシアとは認めず、「INRI」と罪状を掲げて、そして十字架にかけてしまいました。この「INRI」とは、ラテン語の「IESVS NAZARENVS REX IVDAEORVM」の略で、日本語に訳すと「ユダヤ人の王、ナザレのイエス」という意味です。

しかしロシアやウクライナ問題によって、ハルマゲドンの危機さえ迫っている今、実はイスラエルでは、「メシア待望論」が非常に高まっております。それは「メシア降臨」こそ、ユダヤの古代から続く悲願だからです。

誰もが一度くらいは、「嘆きの壁」の前で、ユダヤ教徒たちが祈りを捧げている姿をご覧になってことがあるでしょう。彼らは何を祈っているのか、幾つかありますが、その一つが「メシア降臨」なのです。

ユダヤ教団体『トーラーの道』のケン・スピローという人物は、今から約二十年前に、次のように語りました。「メシアは、ユダヤ暦によれば、『創世記』から6000年までに現れると書かれています。そして今はユダヤ暦5756年（現5783年）です。ギリギリの期間です。ですらもう、（メシア到来まで）そんなに時間はありません。」

またユダヤ教の指導的立場にあるイスラエルのラビ（宗教指導者）チャイム・カニエフスキー氏も、差し迫るメシア到来に備えて、世界のユダヤ人にイスラエルに戻るように声明を出したといっています。

昔からユダヤ教団体が経営する幼稚園では、終わる前に必ず次の内容の唄を歌うそうです。

「今日も終わりました。明日、もしメシアが来なかったら、元気に明るく幼稚園へ出かけましょう」

つまりもしもメシアが到来したら幼稚園はお休みなわけです。「メシアが来なかったら、明日も幼稚園に来ましょう」、そう歌って、幼稚園を帰る子供たちが遠い国にはいるわけです。

あるいはラビであるイスラエル・ゲリスは、すでにイスラエルで起きているメシア待望の動きについて、次のように語りました。

「2週間前、私の知り合いの98歳になる老人が亡くなりました。彼は死ぬまで近くにカバンを用意し、そこにはユダヤ教に必要なものを入れていました。それは、もし『メシアが来た』と聞いたとき、すぐにでも出かけられるための準備だったのです。」

残念ながらその98歳の老人は、メシアには会えずに、この世を去ったわけです。キリスト教、イスラム教は、



ユダヤ教を土台にしておりますから、「終末」と「メシア降臨」の話は、この2つの宗教にも当然あります。それはつまり「メシア待望論」は、欧米でも、アラブでも徐々に高まりつつあるということです。

そしてかつてユダヤ教徒は、イエスをメシアとは認めずに十字架にかけてしまいましたが、もちろん皆様もお分かりのように、主エル・カンターレは、現『幸福の科学』の信者だけのメシアではなくて、全人類のメシアであります。つまり私たち仏弟子は、一刻も早く法輪を転じて、『主なる神を讃える歌』を、ユダヤ教徒たちにも届けねばならないわけです。

メシア論

日本の他民族国家だった

しかしユダヤ教の「メシア論」は、『幸福の科学』の「メシア論」とは少し異なっております。

なぜなら彼らユダヤ教徒の「メシア論」では、「イスラエルの民の中からメシアが現れる」とされているからです。

今から約三千年前、エジプトで奴隷にされていたイスラエルの十二部族は、モーセの導きのもと「出エジプト」を果たし、現在のイスラエルの地にたどり着いて、そして紀元前1021年に「古代イスラエル王国」を築きました。しかしこの国は、建国からわずか百年が経過した紀元前922年には、「北イスラエル王国」と「南ユダ王国」に分かれてしまいます。そしてそれからさらに約二百年後の紀元前722年に、北イスラエル王国はアッシリアから攻撃を受けて、滅んでしまいます。

そしてこの時、イスラエル十二部族のうち十部族が、歴史の表舞台から、忽然と姿を消してしまいます。

残ったイスラエル人は、南の「ユダ王国」の2部族だけのために、彼らは「ユダヤ人」とか、「ユダヤ教徒」などと呼ばれるようになるわけです。

ですから本来、彼らは「イスラエル人」なのです。

先の大戦で日本は敗れましたが、日本にやってきたGHQは、7000冊以上もの日本の書物を焚書しました。その焚書された書物の中には、とりわけ重要な一冊がありました。それは四国・大山祇神社だいやまづみじんじやの宮司である三島敦雄氏が記された、『天孫人種六千年史の研究』という書物です。

このGHQから危険視された書物によれば、「皇室および日本人の起源は、シュメール文明にある」というのです。すでにご紹介したように、シュメール文明とは、現在のイラクの地に突如誕生した「最古の高度な文明」と云われている文明のことです。なぜこんな高度な文明が、今から5000年前の紀元前3000年という太古に突如誕生したことは、今もなお歴史の謎とされております。

そしてこの抹殺された『天孫人種六千年史の研究』によれば、「日本は古代において、多民族国家であった」というのです。

この書物は戦前の日本において、100万部に近いベストセラーとなり、陸軍士官学校の課外読本にも採用されていきました。今も「100万部」はベストセラーですが、しかし当時の日本の人口が約七千万人であったこと、そして日本の軍人たちの多くが、この本を読んでいたことを考えると、当時の日本の知識人たちの間では、「日本は神秘の国であり、日本はもともと多民族国家であった」ということは、当然の常識であった可能性があります。

聖徳太子の仏教の師匠である慧慈えじは、朝鮮半島の高句麗から渡来した僧侶ですし、また奈良の大仏の建立で活躍された行基菩薩も朝鮮半島の百済に起源を持ち、日本に仏教を広めた鑑真も唐からやって来しました。

その他にも、紀元前3世紀に中国大陸を初めて統一した秦の始皇帝、この始皇帝の命令を受けて、不老長寿の靈薬を探して、多くの財宝を持って、三千人の男女を連れて、日本にやって来た徐福も渡来人です。あるいは『日本書紀』にも記されている秦氏も、やはり渡来人です。

北海道にはアイヌ民族が、沖縄には琉球民族がいたように、日本という国は、様々な地域と文化交流を重ねてきた多民族国家でありながら、共に一つの「日本人」というアイデンティティを持って、「和の心」でもって調和を求めながら歴史を築いてきたわけです。

ヤマトとスメラノミコトの意味

今から約4000年前、モーセ、イエス、ムハンマドの先祖に、アブラハムという人物がいたのですが、このアブラハムが住んでいた土地を「ウル」と云い、現在のイラク地方にありました。そしてすでに述べましたように、そこには世界最古の都市文明「シュメール文明」がありました。

しかし「シュメール」というこの言葉は、英語にしても、ラテン語にしても、「Sumerian」とスペルを綴り、どう聞いても「スミアン」と読み、「シュメール」とはまったく聞こえません。

そして太古の昔より日本においても、日本のことを「スメラミクニ（皇御国）」と呼んで、天皇陛下のことは「スメラミコト」と呼んで敬ってきました。さらにシュメール文明の古代バビロニア語においても、「スメラ」には「尊い」という意味があり、実は日本語とまったく同じ意味なのです。

しかもユダヤ人のヨセフ・アイデルバーグという方が書かれた『大和民族はユダヤ人だった』によれば、「スメラミコト」について、こう記されております。「日本語では満足に説明しかねるこの称号は、古代ヘブライ語の一方言では『サマリアの陛下』と解釈することができる」と。

「サマリア」というのは、北イスラエル王国の首都の名です。つまりシュメール語では「スメラ」には「尊い」という意味があり、古代ヘブライ語の一方言では、「スメラノミコト」は「北イスラエル王国の首都サマリアの陛下」という意味になるというのです。

また日本語には「大和魂」とか、「大和心」という言葉がありますが、では、「ヤマト」ってなんですか？

私はこの日本語が好きですが、良く使用しますが、しかし人に説明する際、漢字の成り立ちから「大いなる調和を求める魂や心」と話しております。しかしそれは本当に正解なのでしょうか？

ヘブライ語の「ヤマトゥ」には、「神の民」という意味があります。

ですからヘブライ語で解釈すると、「大和魂」は「神の民の魂」という意味になり、まるで「神性」、「仏性」のことを言っているようです。

神道の『古事記』や『日本書紀』には、「神性」という概念はありません。しかし『古史古伝』の『ホツマツタエ』には、「大宇宙にあるすべての意識は、造物主のアメノミヲヤから分かれて独立したもの」というカタチで「神性」の概念があります。そしてヘブライ語の「ヤマトゥ」のほうが、その意味を正しく残しているようにも感じ取れるのです。

しかも『古事記』を紐解くと興味深い記述があります。イザナギのミコト、イザナミミコトの二柱の神々が、「天の御柱」という柱の周りをイザナギは左から、イザナミは右から回るのです。

そして二人が出会ったところで、先にイザナミが、「あなにやし、えをとこを」と言い、後からイザナギが「あなにやし、えをとめを」と言って見つめ合いました。これは「ああ、なんて素敵な男性!」、「ああ、なんて素敵な女性!」という意味だと言われております。

二人は国産みをするにあたって、お互いを褒め称え合って言葉を掛け合ったのですが、しかしこの時は、女性のほうから声をかけたので失敗し、次に男のほうから声をかけて成功します。

「あなにやし」という言葉は、日本人でも聞き慣れない言葉ですが、ヘブライ語には「アニーアシー」という言葉があり、この意味は「結婚してください」です。「えをとこを」、「えをとめを」は「素敵な男性」、「素敵な女性」と解釈できます。

ですから日本語とヘブライ語をミックスして解読すると、「美しい殿方よ、どうか私と結婚してください」、「美しい乙女よ、どうか私と結婚しよう」という意味になるわけです。

しかもユダヤの結婚式では、花婿の周りを綺麗に着飾った花嫁がぐるりと回るといふ儀式が行われ、地域によっては綺麗に飾った柱があって、その周りを花嫁と花婿が共に回ることもあり、これはユダヤ教の古くからの伝統なのだそうです。

YAP 遺伝子の不思議

一石英一郎という科学者が書かれた『日本人の遺伝子～ヒトゲノム計画からエピジェネティクスまで～』によれば、男性の細胞の中には、Y染色体というものがあり、これは遺伝子DNAの格納庫のようなものだそうです。そしてこのY染色体の遺伝子情報は、父から息子へ、男系でのみ伝えられているそうです。

日本人男性のY染色体には、中国人や韓国人にはほとんどみられない、非常に重要な特長があり、その特徴とは、日本人の約40%の人々のY染色体DNAには、「YAP」（ヤップ）と呼ばれる特殊な遺伝子配列があることです。

このYAP遺伝子は、同じ東アジアに生きる中国人にも韓国人にもほとんど見られませんが、なぜか全世界のユダヤ人の20～30%は、このYAP遺伝子配列を持っているのです。

しかも興味深い話として、スファラディ・ユダヤ人にも、アシュケナージ・ユダヤ人にも、共にこのYAP遺伝子があるというのです。

スコットランド人のノーマン・マクラウドは、明治の頃に日本を訪れて、「日本人はイスラエルの失われた十部族の一つ、エフライム族である」と考え、『日本古代史の縮図』という書物を記されました。この書物は、日本人をはじめとする世界中の人が、それほど関心を持たなかったのですが、しかしユダヤ人だけは「そうかもしれない」と、実は強い関心を抱きました。

「そんなバカな！」と、そう思うかもしれませんが、それが「日ユ同祖論」です。

すでに述べたように紀元前722年に、北イスラエル王国がアッシリアから攻撃を受けて滅んだ際、この時、イスラエル十二部族のうち十部族が、歴史の表舞台から忽然と姿を消してしまうわけですが、「日本人はその失われたイスラエルの民かもしれない」と、ユダヤ人たちが述べているわけです。

そして実際に、YAP遺伝子をユダヤ人と日本人は持っております。以上のことを考えるとユダヤ教徒の「イスラエルの民からメシアは現れる」という「メシア論」と、『幸福の科学』の「メシア論」には共通性が見られるわけです。

イザヤ書には、このように書かれてあります。

彼らは声をあげて喜び歌う。

主の威光のゆえに、西から喜び呼ばわる。

それゆえ、東で主をあがめ、海沿いの国々でイスラエルの神、主の名をあがめよ。

われわれは地の果から、さんびの歌を聞いた、「栄光は正しい者にある」と。

『旧約聖書』イザヤ書24章4～16節

ここで言っている「主」とは、もちろんユダヤ教で言う「神」、すなわち「造物主」のことです。そして、「彼らは声をあげて～西から喜び呼ばわる」とありますが、この「西から」というのは、現在のイスラエル地方の小さな村のことです。

さらに「それゆえ、東で主をあがめ、海沿いの国々でイスラエルの神、主の名をあがめよ」とは小さな村から見た、東の果てにあたる地域、つまりおそらく日本のことです。

「国々」とされているのは、かつての時代、日本国内には小さな国がたくさんありました。

つまり、「メシア待望論」のあるユダヤ教において、「東で造物主を崇め、海沿いの国、日本において、イスラエルの神でもあるエローヒムを崇めよ」と言っているようにも思えるわけです。

また、『旧約聖書』の「イザヤ書」を次のように翻訳したテレビ番組もありました。

「この世の終末、メシアが現れる時、新時代が訪れる時、失われた十部族が再びイスラエルに戻ってくる。それは東の果ての海沿いの国、聖書を知らない人々である。」



天御祖神

しかもこの日本人とユダヤ人が持つ「YAP遺伝子」ですが、この遺伝子は3万年前からの縄文人にも存在していたことが分かっております。つまり今から7000年前に突如、誕生したシュメール文明なわけですが、その起源は、もしかしたら天御祖神の富士王朝にあるのかもしれないわけです。

『天御祖神の降臨』の「第2章 日本文明のルーツを探る」の中で、こう教えてくださっております。

古代の人たちは、「神」と「宇宙人」との区別はつかないんでね。両方一緒でもあるんだけど、違う場合もあるの。九州に降りた者も、奈良あたりに降りた者もあるし、富士山のあたりに降りた者もある。まあ、いろいろなところに降りたんだけどね。

私が言いたいことは、「ユダヤとか、インドとか、中国とか、ヨーロッパとか、まあ、そういうものに引けを取るような日本ではないんだ」ということを知っておいてほしいし、「(日本には)ムーの残留が来た」と言っているが、それは事実ではあるけれども、「そのムーにも影響を与えた存在が、日本なんだ」ということを知っておいてほしいな。

日本文明が、ムー文明にも影響を与えたのならば、現代の歴史において、一般的に最古の文明とされているシュメール文明にも、日本文明が影響を与えていたことは、容易に想像できます。

縄文文明は今から7300年前(6300年前説もある)の九州の鬼界カルデラによって完全に滅びましたが、その後、シュメール文明が高度に発展した状態で突如として現れるわけです。ですからシュメール文明に日本文明が影響を与えていた可能性は十分に考えられます。

そして実はこれらの話には、物的証拠もあって山口県の彦島、あるいは大分県などには、「ペトログラフ」と呼ばれる、イラク地方に伝わるシュメール文明とまったく同じ古代遺跡があります。

近年になって、これらのシュメール文明の遺跡が、日本で発見された時、世界中の考古学者たちが「なぜ!？」と驚きました。書かれた文字の意味は、「最高の女神が、シュメールのウルク王朝の最高の司祭となり、日の神の日子王が神主となり、七枝樹にかけて祈る」だそうです。



また武内宿禰も霊言の中で、次のように教えてくださっています。

質問者A 特に、ユダヤなどでも、「古代ユダヤと日本」が、何か関連があったなどという歴史も遺っていますし。

武内宿禰 うん、それはあるよ。あったよ、うん。

質問者A また、日本の天皇がユダヤに行ったというような説も……。

武内宿禰 いや、逆だ。ユダヤから、日本の天皇が替わったときに、挨拶に来ておったんだ。

たしかにイスラエルから日本は、はるか遠い地の果てであり、飛行機も車も無い時代ならば、並大抵の努力で行けるものではありません。

しかし『西遊記』のもととなった、中国の仏僧・玄奘三蔵げんじょうさんざうが、国の法律を犯してまで、1万キロのシルクロードを歩いて中国からインドに渡り、そして仏教の教えを、持ち帰ったように、宗教者の情熱というものは、並大抵のものではありません。

しかも「開封かいほうのユダヤ人」と言って、失われたイスラエルの民が、中国の河南省の開封という町にまでやって来て、暮らしていることは明らかになっております。

秦の始皇帝の名を受けて、日本にやって来た徐福と秦氏を同一視する人もいますが、それは定かではありません。しかし「秦氏を失われたイスラエルの民である」という説はね強くあります。

そして実際に、秦氏一族が、日本に稲荷神社などを創祀したことは事実です。この稲荷信仰は神道の裏側の部分、妖怪性として当会から見れば問題がありますが、しかし総裁先生の霊査によって、ユダヤ教が裏側の裁きの神エンリルの影響を強く受けていたことは事実です。



このように日本がシュメール文明に影響を与えていた可能性、そして失われたイスラエルの民が日本にやって来た可能性は十分にあるわけです。

日本とイスラエルの共通性

① 日本語とヘブライ語

実は「日ユ同祖論」を考えるにあたり、その証拠とも言えるものが、実はたくさんあります。

たとえば海外から外国人が日本にやって来ると、日本の独特な文化や風習に触れて、「やはり東洋の神秘の国、日本は変わった国だな」と感想を抱きますが、しかしユダヤ人たちだけは違います。

なぜなら彼らは、日本にやって来ると、まるで故郷にやってきたような、そうした親近感や懐かしささえ覚えるからです。

たとえばお風呂に入る際、まず日本人は、体を洗ってから浴槽に浸かりますが、こんな風習、欧米人にはありません。しかしユダヤ人には、同じ風習があるのです。

「比較言語学」という学問には、「語族」という枠組みがあります。語族とは、元は同じだった言語が、時代の流れの中で変化し、分かれた言語を、元々の言語で分類する方法のことです。

たとえば、英語は「インド＝ヨーロッパ語族」と呼ばれる語族に分類されます。それは英語が、インドからヨーロッパの辺りで話されていたであろう言語から分かれた言語だからです。フランス語、ドイツ語、ロシア語、ペルシャ語なども、この「インド＝ヨーロッパ語族」に属します。

では、日本語はどの語族に属するのかと言えば、「不明」です。日本語は未だにどの語族に属するか不明のために、日本語は「孤立した言語」と呼ばれています。

しかしなぜか、日本語とヘブライ語の共通性は多く、「ありがとう」、「さようなら」、「悪（ワル）」、「憎む」、「困る」など、なんと約3000語もあると言われております。

「侍」も、なぜ強く優しい人々を「サムライ」と呼ぶのか、日本人にさえ謎ですが、ヘブライ語では、「シャムライ」は「守る者」という意味です。

日本語がルーツ不明の孤立した言語であるにも関わらず、これだけ離れた土地で、これだけ言葉に共通性を見つけ出せる言語は非常に珍しいことです。

また、ヘブライ語とカタカカナは、実によく似ています。

アリガトウ (有難う)	アリ・ガド (私にとって幸福です)
ハナス (話す)	ダベル (話す)
ミカド (帝)	ミカドル (高貴なお方)
ヌシ (主)	ヌシ (長)
サムライ (侍)	シャムライ (守る者)
ヤリ (槍)	ヤリ (射る)
滅ぶ (滅ぶ)	ホレブ (滅ぶ)
ダメ (駄目)	ダメ (駄目)
ニクム (憎む)	ニクム (憎む)
コマル (困る)	コマル (困る)
スム (住む)	スム (住む)

(グループA: 日本のルーツは古代イスラエル!? 失われた10支那の謎を追究!!)

	k	k	q	th	f	l	lu
ヘブル文字	ק	ק	ק	ת	פ	ל	ל
日本の文字	コ	ケ	カ	ト	フ	レ	ル
	ko	ku	ka	to	fu	re	ru
	n	ts	s	h	w	.	ri
ヘブル文字	נ	צ	ס	ה	ו	ו	ר
日本の文字	ノ	ソ	サ	ハ	ワ	ウ	リ
	no	so	sa	ha	wa	hi	ri

②ヘブライ語で理解できる日本の童謡

誰もが一度は、お母さんや先生などから、「さっさと勉強しなさい！」などと、「さっさと～」と叱られたことがあるはずです。では、「さっさと」とは、どういう意味ですか? 「早く」とは、微妙に違うことは分かります。

イスラエルの政治家であり、宗教家でもあるエリ・コーヘンという人物が書かれた、『大使が書いた日本人とユダヤ人』という書物によれば、日本各地にある童謡には、数多くのヘブライ語が紛れているといえます。

たとえば「エッサ エッサ エッサホイ サッサ おさるのかごやだ ホイサッサ」、日本人が歌っている唄なのに、日本人には意味不明です。しかしヘブライ語で「ETUSA (エッサ)」とは、「運ぶ」、もしくは「運べ」という意味であり、「SASAH (サッサ)」には、「喜ぶ」という意味があります。

つまり「エッサホイサッサ」には、「喜んで運べ!」という意味があったわけです。ですから「さっさと勉強しなさい!」とは、ヘブライ語から考えると、「喜んで勉強しなさい!」という意味になるわけです。

モーセは神から十戒を授かり、その十戒が刻まれた石板をしまった箱のことを「契約の^{せいひつ}聖櫃」、「アーク」と云います。「失われたアーク」として、映画『インディ・ジョーンズ』でもお馴染みです。

実は日本の「神輿」は、「アーク」と驚くほど多くの共通点を持っており、古代においてはイスラエル人にも神輿の風習がありました。

『旧約聖書』を紐解くと、どの霊人かは不明ですが、神がモーセに対して、事細かにアークの作り方やサイズを説明している記述があります。

彼らはアカシヤ材で箱を造らなければならない。長さは二キュビト半、幅は一キュビト半、高は一キュビト半。あなたは純金でこれをおおわなければならない。【中略】

またアカシヤ材のさおを造り、金でこれをおおわなければならない。そしてそのさおを箱の側面の環に通し、それで箱をかつがなければならない。さおは箱の環に差して置き、それを抜き放してはならない。【中略】

また純金の贖罪所（神のおられる場所）を造らなければならない。長さは二キュビト半、幅は一キュビト半。また二つの金のケルビムを造らなければならない。これを打物造りとし、贖罪所の両端に置かなければならない。

『旧約聖書』出エジプト記25章

この通りにアークを創ると、長さ130センチ、幅80センチ、高さ80センチの小さなサイズの神輿によく似たものが完成します。

アークの場合、箱の両側に智天使ケルビムが備え付けられておりますが、神輿は鳳凰が真上に一つだけ備え付けられております。しかし鳳凰というのは中国の伝説の神獣です。なぜ神道で鳳凰なのかは疑問が残ります。

神輿は英語にすると「ポータブル・シュライン」、つまり携帯神社であり、病気などの理由から神社に参拝に来られない人のため、あるいは神の御光で地域を浄化するために、神輿というものは行われております。

しかし日本で神輿の風習が始まったのは奈良時代ですから、もしかしたらイスラエルから逆輸入されて、神輿が始まった可能性も十分に考えられます。



③相撲の言葉や風習

また『古事記』に起源を持つ相撲、その掛け声は、「はっけよ〜い、のこった、のこった」ですが、やはり日本語としては意味不明です。

たしかに『日本相撲協会公式サイト』には、「ハッキョイ」とは「^{はっけようよう}発気揚揚」がつまったもので、「気分を高めて全力で勝負しよう」という意味であると書かれておりますが、ヘブライ語では、「HaKeH・YoHY」は、「投げつけよ・やっつけよ」という意味があります。また「のこったのこった」も、ヘブライ語では、「勝つ」という意味になります。

すなわちヘブライ語で「はっけよい、のこった」は、「投げつけて勝て!」という意味になるわけです。

また、力士は始まる前に塩を撒きますが、これなども欧米人などには、さっぱり理解できませんが、ユダヤ人にはよく理解できます。なぜならユダヤの家では「塩を撒いて清める」、ということをごく普通に行なっているからです。

④民謡にあるヘブライ語

あるいは「ソーラン節」は、やはり日本人には、まるで歌詞が意味不明です。しかしヘブライ語にすると意味が分かります。「ヤーレン」は、ヘブライ語で「喜び歌う」、「ソーラン」は「独りで歌う者」という意味であり、この「ソーラン節」を、「約束の地カナンを目指すイスラエルの歌」と考える日本人やユダヤ人も多くいます。

さらにもう一步、踏み込んで、「日本こそイスラエルの約束の地」とまで考える人までいます。

またかつて青森県には「戸来村」と呼ばれていた村があり、これを「本当はヘブライ村だ」とする意見もあります。

そしてこの村には、「ナニヤドラヤ盆踊り」と云われている民謡があり、この歌詞は、さっぱり意味不明なのですが、しかし神学学者の川守田英二博士によれば、ヘブライ語にすれば解読出来るといいます。

「ナニヤドラヤ」は、「お前の聖名を誉め讃えん」という意味だそうです。

⑤ほら貝とショーファー

現在でもユダヤ人は祈りの時に、『旧約聖書』の言葉を収めた「ヒラクティリー」と呼ばれる小さな小箱を額部分に付けるのですが、これは山伏が頭につける「兜巾」と呼ばれるものによく似ています。

また山伏が吹く「ほら貝」の音は、ユダヤ人の祭りに使われる「ショーファー」という羊の角で作った吹奏楽器と似ています。

山伏とは修験者であり、修験道の祖は役行者（えんのおずぬ）であり、これは高橋信次の過去世であり、シュメール文明において、エンリルとして生まれております。



⑥神社と幕屋や神殿

そして伊勢神宮の伝統やしきたりと、ユダヤ教の伝統やしきたり、そして神社の構造とユダヤ教の幕屋や神殿の構造は、実によく似ております。

モーセと共に、イスラエルの民は荒野を旅していたために、彼らは「幕屋」といって、何度でも造っては片付けられる簡易礼拝所を持っていました。そしてついにイスラエルに辿り着き、ソロモン王の時代になると、彼らはエルサレムに神殿を建立し、そこを「聖地」としたのです。

そして図にもありますように、その幕屋や神殿の作りと、日本の神社の作りが、奇妙な一致を見せるのです。



しかも儀礼においても類似点は多くあり、神社では、「手水舎」といって、手を洗って口をすすぐ清めの場、すなわち「禊の場」があり、その奥に「拝殿」と「本殿」という2つの聖所があります。

この儀礼はイスラエルの神殿や幕屋も同じで、まず手足を洗うことが義務づけられており、その奥に「聖所」と「至聖所」の2つがあるのです。

⑦三種の神器

キリスト教、イスラム教、仏教、儒教、ヒンズー教など、数多くある宗教の中で、「三種の神器」があるのも、やはり日本の神道とイスラエルのユダヤ教くらいのものです。

神道の三種の神器は、八咫鏡、八尺瓊勾玉、天叢雲剣であり、ユダヤ教の三種の神器は、十戒の石板、アロンの杖、マナの壺です。

天叢雲剣、通称「草薙の剣」は熱田神宮に、八咫鏡は伊勢神宮に八尺瓊勾玉は皇居にあります。

一方、ユダヤ教の三種の神器は、失われた十部族と共に、歴史の表舞台から消えてしまっています。



神道にしる、ユダヤ教にしる、これら三種の神器の現物を見た人はいません。昭和天皇でさえも、三種の神器は見たことが無かったそうです。

しかし一説には、「明治時代の文部大臣^{もりありのり}森有礼氏が伊勢神宮に祀られている八咫鏡を見た」、という話があります。これを「不敬」として、森有礼は国粹主義者に短刀で脇腹を刺されて、暗殺されたとも云われております。

またその他にも、元海軍将校で、大本教の元信者で、『竹内文書』の研究も行ってた矢野祐太郎氏も、やはり「八咫鏡を見た」と言っております。矢野氏によれば、鏡の裏には何か模様のようなものが書かれていて、何だか分からないけれども、慌ててその鏡の裏に描かれている模様を書き写したそうです。



それは日本語ではなく、ヘブライ語にすると読むことができ、「אהיה(エヘイエ) אשיר(アシエル) אהיה(エヘイエ)」と読み、これは「我は在りて有るもの」という意味です。

『旧約聖書』の「出エジプト記」第3章14節において、神はモーセに対して述べられました。

「我は在りて在るもの」と。つまり「ユダヤ教の神ヤハウエの語源となったヘブライ語が、なぜか日本神道の三種の神器の一つ、八咫鏡の裏に記されている」、そう噂されているわけです。

この言葉の意味は「我は過去に存在し、現在にも存在し、未来にも存在するものである」というものであり、『「ヤハウエ」「エホバ」「アッラー」の正体を突き止める』によれば、これを述べたのは、『幸福の科学』で信仰の対象としている主エル・カンターレです。そしてこの言葉から、ユダヤの神は「ヤハウエ」とも呼ばれるようになったと言われています。

また、「大阪府堺市にある仁徳天皇陵はユダヤの三種の神器のマナの壺のカタチをしている」、なんて意見もあります。



四国剣山・京都祇園祭とイスラエル

会員ならば誰もがご存じのように、大川総裁がお生まれになられたのは徳島県です。そして徳島県には剣山があり、この山は修験道の聖地であり、役行者や弘法大師も修行したという霊山でもあります。中国に仏道修行に出かけた空海が、中国に渡るその前後に登ったことでも、剣山は有名です。

そして「この剣山には、ユダヤ教の三種の神器が眠っている。イスラエル・ソロモン王の財宝がある」なんて説を展開する人が実はたくさんおります。

剣山には、実際に「鶴岩」、「亀岩」が存在することから、「鶴亀山」と呼んだ時代もあったと言われていて、日本のいわゆる「籠目」^{かごめ}のカタチが、ユダヤのダビデの紋章と同じであることから、「ユダヤの秘密を、動揺の『かごめ歌』に隠した」なんて説まであります。



しかしなぜ、徳島県と、ユダヤが繋がるのでしょうか。

そのヒントは『旧約聖書』の「ノアの箱舟」の物語に隠されています。

神はノアと、箱舟の中にいたすべての生き物と、すべての家畜とを心にとめられた。

神が風を地の上に吹かせられたので、水は退いた。

また淵の源と、天の窓とは閉ざされて、天から雨が降らなくなった。

それで水はしだいに地の上から引いて、百五十日の後には水が減り、

箱舟は七月十七日にアララテの山にとどまった。

『旧約聖書』創世記第8章14節

この『聖書』の「創世記」の言葉から、ユダヤのお祭りには、「シオン祭」というものがあります。ノアの箱舟

が7月17日に山に停まったことから、イスラエルでは7月17日の前後の合計で3週間をかけて、「シオン祭」を行っています。

そしてなぜか7月17日は、徳島県のこの剣山でもお祭りが行われおり、さらには京都でも祇園祭が約一ヵ月かけて行われており、その祇園祭の中でも、7月17日は、「神幸祭」という特に重要な日となっています。

この「祇園」という言葉は、仏教の「祇園精舎」から来たと云われております。そして「祇園」という言葉は、祇園精舎を建てられた「ジェータ太子」と「スダッタ長者」の二人の名前を合わせた略語であると云われております。

しかしどうして「ジェータ太子」と「スダッタ長者」の二人の名前をあわせて、それを略すと「祇園」になるのか、語学に弱い私には分かりません。

その一方で、「シオン」と「祇園」が似ているのは、果たして本当にただの偶然なのでしょうか。

鳥居と過ぎ越し祭り

伊勢神宮の内宮から外宮に至る道の両側に並ぶ、700にもおよぶ石灯籠には、やはり不思議なことに「籠目紋」こと「六芒星・ダビデの紋章」が刻み込まれています。これは戦後に建てられたものなのに、とても不思議です。

そして鳥居です。

ヘブライ語の「トリイ」は、アラム方言で「門」という意味だそうです。

すでに述べたように、今から約三千四百年前、イスラエル人たちはエジプトにおいて奴隷にされており、そしてモーセによって、「出エジプト」を果たすわけですが、その際、モーセは、エジプトの王ファラオと対決しました。

この時、モーセを支援している天使たちが、全エジプトに襲いかかりました。そしてモーセは、イスラエル人たちに、「天使の攻撃から逃れるためには、玄関口の二本の柱と鴨居に、羊の血を塗らせて、天使が静かに通り過ぎるまでは、家の中で待つように」と指示したのです。

これが、ユダヤ人が今も行っている「過ぎ越し祭」の始まりです。

玄関口の二本の柱と鴨居を赤く染めると、稲荷系の赤い鳥居によく似ております。すでに述べたように日本に稲荷信仰を広めたのは、渡来人の秦氏です。

現在、日本の国歌として歌われている「君が代」は、『古今和歌集』におさめられている、作者不明の歌を歌詞を少し変えて、音楽を付け足したものです。そしてなぜからこの「君が代」も、「ヘブライ語でも意味が通じるのではないか？」という仮説があるのです。



日本語	ヘブライ語	意味
君が代は	クム・ガ・ヨワ	立ち上がり神をたたえよ
千代に	チヨニ	シオンの民
八千代に	ヤ・チヨニ	神の選民
さざれ石の	ササレー・イシィノ	喜べ残された民よ、救われよ
巖となりて	イワオト・ナリタ	神の印（預言）は成就した
苔のむすまで	コ（ル）カノ・ムーシュマツテ	全地に語れ

日本人とユダヤ人に何かしらの共通性があることは、おそらく事実でしょう。

また日本文明がシュメール文明に影響を与え、そしてイスラエル人が日本人に何らかの影響を与えたことは、おそらく事実でしょう。

そうした確かな事実として、イスラエルの民がメシアを待っていること、そして日本にメシアがお生まれになられたことは、揺らぐことのない真実です。

しかしGHQによって、『天孫人種六千年史の研究』という書物が焚書にされたように、日本人とユダヤ人の仲を引き裂きたい者たちがいるのではないかと、私はどうも感じてしまうのです。

天才のユダヤ人、秀才の日本人、この二つの民が結びついて、日本にメシアがお生まれになられた真実を、知られないくない者たちが、どうも暗躍しているように思えて私にはなりません。

ならばこそ、私たち信仰者は、かつて「エローヒム」と呼ばれた方が、主エル・カンターレが、この日本にお生まれになられたこの事実を、世界に宣べ伝えるためにも、一刻も早くイノベーションを成し遂げ、法輪を転じていくしかありません。

なぜなら私たちの主は、私たちだけのものではないからです。

シオニズムの問題

冒頭で少しだけご紹介しましたが、次にご紹介する話は、『幸福の科学』の信者にとって、驚嘆の事実かもしれません。実は、ユダヤ教徒の中には、イスラエルの再建国を認めていないユダヤ人も多くいます。そしてそうした人の中には、次のように語る人もいます。

「正統ユダヤ教徒はイスラエル建国を認めない。

イスラエルを建国できるのはメシアだけだから」

すでに述べましたように、すべての「ユダヤ人」を自称する者たちが『タルムード』を奉じているわけではなく、ユダヤ教の中には『トーラー』と呼ばれるモーセ五書にのみ忠実な人たちもいます。そして「トーラー主義」の人々というのは、「シオニスト」に対してかなり批判的です。

超正統派のユダヤ教徒の中には、こう語る人もいます。

「イスラエル建国は間違っていた。我々の考えは迫害されているパレスチナのイスラム教徒と同じだ。

我々は反シオニストだ」と。

つまり『聖書』を学ぶ人たちの間でも、イスラエルの建国はメシア降臨の前か、後かで意見が分かれているわけです。そのために超正統派ユダヤ教徒は、5月14日の建国記念日にイスラエルの国旗に火を着けて、次のように主張してデモを行っています。

「ナチスは同胞の体を燃やした。しかしシオニストは我々の魂を燃やす」

トーラー主義のヤコブ・M・ラブキンというユダヤ教徒は、シオニストに対して、驚くべきことを述べています。

「シオニズムは宗教用語を多用するが、他の者への同情や調和、親切心といったユダヤ教の教えとは根本的に相容れない。無神論的とも言える」と。

このヤコブ・M・ラブキンという方が書かれた『イスラエルとは何か』という書籍を紐解くと、非常に興味深いことがたくさん書かれてあります。それは「戦後の日本人が、宗教の価値を忘れて、神道も忘れてきたように、再建国されたイスラエルにおけるシオニズム教育では、一応、ユダヤ教の教育があるものの、イスラエルの民が無宗教化している」、というのです。

「無宗教の新たなユダヤ人が作られている」、そうヤコブ・ラブキン氏は主張するわけです。そのために、イスラエルでは、学生が校庭に『トーラー』を積み上げて燃やすことまで起きているというのです。

そして日本では、自衛隊さえ違憲と言われる憲法9条を押し付けられて、左翼教育が行われ、「専守防衛」が叫ばれていますが、逆にイスラエルでは「先制攻撃」が叫ばれて、男女ともに徴兵制があります。そして教育では、「力強さ」、「自己主張」、「戦闘性」が全面に押し出されているというのです。

その結果、ユダヤ教の信仰には目覚めていないというのに、大人になると徴兵に行って、シオニズム運動に加

担する者が多くいるというのです。

それはまさに「大イスラエル計画」を実行するための教育が行われているとみて、ほぼ間違いないでしょう。

こう考えていくと、やはりユダヤ教えの中に、「自分たち以外は家畜だ」と考える『タルムード』が入り込んだことが問題であったことが分かりますが、それ以上に、無宗教のユダヤ人が増えていることを考えると、「宗教はアヘン」と考える共産思想と『世界精神保健連盟』が掲げる「すべての宗教の撤廃」という項目が、まるでイスラエルの中にも、深く入り込んでいるようです。

ちなみにもう一つ話がややこしいのは、キリスト教徒の中にも、実は多くのシオニストがいて、彼らが「メシアご降臨と終末の前には、イスラエルの回復がなされなければならない」と考えていて、イスラエルの建国と存続を支持していることです。

キリスト教福音派から多大な支持を受けているトランプが、イスラエルを支持し続ける理由は、娘がユダヤ教徒に改宗したことのみならず、こうしたところもあるのでしょう。

日本人に謝りたい

さて、こうした「日ユ同祖論」をご紹介しながら、彼らユダヤ教徒の「メシア論」もご紹介したわけですが、ここで、とりわけ興味深い書物が一冊あります。

それはユダヤ人のモルデカイ・モーゼという人物が書いたとされている、『あるユダヤ人の懺悔「日本人に謝りたい」』という書籍です。

この書籍は、「偽書なのか？真実なのか？」と議論がされております。

しかしルターの『ユダヤ人と彼らの嘘』、プラナイティス神父が書かれた『仮面を剥がされたタルムード』を読んで、そして「日ユ同祖論」とユダヤの「メシア論」を考えれば、この書籍は、非常に興味深いものです。

本当か嘘か、とあるユダヤ人がこう言っています。

我々は信じ難いほど頭が悪かったのだ。

もともと、我々が犯した誤ちはごく単純そのものの誤りだったのだ。

しかるに、この小さな誤ちの及ぼした影響は想像以上に大きかった。それは、戦前まで日本が世界に冠絶した類い稀れなものとして誇っていた数々のものを破壊してしまう結果となったのであった。

このことを知るに及んで、我々の心は痛むのである。しかも、その日本が戦前もっていた類い稀れな長所というものが我々ユダヤ民族の理想の具現化されたものでもあったことを知り、ますます我々の苦悩は倍加されるのである。

我々ユダヤ民族は、西洋人にならぬ高尚な理想を常に頭に画いていたのである。

しかし日本の皆様もご存知のように、ユダヤ民族は永い永い迫害の悲しい歴史の中ではこれら理想を具現化する余裕など全くなく、ただどうして生命の安全を全うするかということに心血を注ぐのが精いっぱいであった。第二次大戦終結までは我々の解放のための闘いは絶えず続いていたのであり、そのような理想を追求する余裕は残念ながらなかったのであった。

しかるに第二次大戦後、日本が占領政策の結果大幅に改革された結果初めて、戦前の日本に我々の理想とするものが多々実在したことを発見したのであった。

これは我々にとって大きな驚きであった。

この書籍の内容を簡単に紹介するならば、実はユダヤの理想は戦前の日本にこそあった、だがそれが分からなかった我々ユダヤ人たちは、日本の学校教育も、家族制度も、倫理観も、様々なものを破壊し、金、金、金の拝金主義的傾向を作り上げてしまった、日本中に多くのエコノミック・アニマルを輩出し、日本を共産主義化させてしまったのは我々ユダヤ人であった、我々ユダヤ人は迫害に次ぐ迫害の歴史をくぐり抜けてきたために、世界の片隅に、まさかこんな素晴らしい国があるとは想像もしていなかった、だから日本を壊してしまったことを懺悔したい、といった内容です。

この『日本人に謝りたい』では、日本に原爆を落としたB-29「エノラ・ゲイ」の本当の意味も明かしてい

ます。これまで機体名称の由来は、機長の母親である「エノラ・ゲイ・ティベツ」から採られたものと言われていました。しかし真実の意味は、これは東ヨーロッパのユダヤ人の間で使われているイディッシュで、「天皇を屠れ」だと言うのです。

「屠る」とは家畜に対する言葉です。すなわち「皇室を破壊して、日本から天皇陛下を無くさせる」、そうした目的が、彼らユダヤ人にはあったというのです。

しかしこの書籍では、「ユダヤ人こそ日本人から学ばねばならない」とした上で、次のように語っているのです。

天皇制は古代からユダヤ民族の理想だった

ユダヤ人ルソーの思想は搾取、被搾取の関係にない君主制を求めているわけである。これは確かに理想である。しかし残念ながら、ルソーはそのようなものが実在できるはずもないからやむを得ず、民主主義を選ぶというものである。【中略】

一般にユダヤ人が天皇制の類い稀な点を発見したのは、戦後の天皇とマッカーサーの会見の時であった。

世界に類例のない君民共治

(会見の際) 天皇が開口一番、自分の事はどうなってもいいから国民を救ってほしいと切り出した時、マッカーサーは驚天せんばかりであった。この席にルソーが同席していなかったのが真に残念であるが、西洋の君主というものはそれこそマルクスのいう支配者、搾取者である。

神道に問題が無いわけではありませんが、しかし昭和天下の戦後の行動を見て、この書籍の作者のユダヤ人は、日本こそユダヤの理想であり、ユダヤ人こそ日本人から学ぶべきである、と述べているわけです。

なぜなら西洋では、君主というのは常に、国民を搾取し続ける強欲な存在であり、国民を大御宝（おおみたから）と考えることなどあり得なかったからです。

どこまで真実なのか分かりませんが、ユダヤ人のアインシュタインは来日した際、日本に向けて次のようなメッセージを送ったと言われております。

近代日本の発達ほど世界を驚かしたものは無い。

その驚異的發展には他の、国と違ったなにかのものがなくてはならない。果たせるかなこの国の歴史がそれである。この長い歴史を通じて一系の天皇を戴いて来たという国体を持っていることが、それこそ今日の日本をあらしめたのである。

私はいつもこの広い世界のどこかに、一ヶ所ぐらいはこのように尊い国がなくてはならないと考えてきた。なぜならば、世界は進むだけ進んでその間幾度も戦争を繰り返してきたが、最後には闘争に疲れる時が来るだろう。

このとき人類は必ず真の平和を求めて、世界の盟主を挙げなければならない時が来るに違いない。その世界の盟主こそは武力や金の力ではなく、あらゆる国の歴史を超越した、世界で最も古くかつ尊い家柄でなくてはならない。

世界の文化はアジアに始まってアジアに帰る。それはアジアの高峰日本に立ち戻らねばならない。

我々は神に感謝する。神が我々人類に日本という国を作って置いてくれたことである。

このアインシュタインの言葉からも分かるように、世界は人種の違い、民族の違い、宗教の違いから、幾つもの迫害と差別を生み出して、たくさんの戦乱をくぐり抜けてきました。その中でも最も迫害を受けたのが、天才の多いユダヤの民かもしれません。逆に日本人は、世界の中で恵まれた歴史を歩み、勤勉な自助努力の精神でもって、秀才性を発揮してきました。

恵まれているからこそ、日本人には高貴なる義務があると言えるでしょうし、その日本人の中でもエル・カンターレ信仰を持つ者には、やはりメシア降臨の奇跡を世界に伝えて、世界を救っていく使命があると言えるでしょう。

第四章 光の戦士として

共産化の真実

侵略最終段階の日本

では、戦後の日本が壊されてしまったとして、今の日本や世界において、果たして何が起きているのでしょうか。

そして私たち信仰者は、どのようにその起きていることに対して、対応していけば良いのでしょうか。

たとえばスイスという国は、ナチスがユダヤ人を迫害していた頃、ユダヤ人たちが資産をスイスの銀行に預金することは歓迎しつつも、しかしユダヤ人自身がスイスに逃げ込んでくることには歓迎しませんでした。

そればかりかスイス政府は戦時中、ナチスと協力関係にありました。

しかし日本は、共産主義ソ連という共通の敵がいたことから、ナチスと「防共協定」という協定を結びつつも、ナチスが行っているユダヤ人迫害に対しては、「人道に反している」と考え、ナチスのユダヤ人迫害に少しも協力しないばかりか、むしろ国家を上げてユダヤ人を上海で助けていたのです。

血生臭い世界史の中には、国家をあげてユダヤ人を追放したり、迫害した国はたくさんありますが、しかし国家をあげてユダヤ人を助けた国は、人類の歴史上、唯一日本だけです。

スイスにはそれができず、むしろナチスのユダヤ人迫害に加担したわけです。

その人口900万人の小さな永世中立国スイスは、他国と同盟を結ぶこともできないため、国民の防衛意識を高めることを目的に、各家庭に1冊、『民間防衛白書』という書籍を配布しています。

その内容は、「戦争をせず他国を支配するマニュアル」であり、具体的には、いかに民間人をマインドコントロールして、最終的に国全体を乗っ取るかを「6段階」に分けて、こと細かく紹介しています。

第一段階	作業員を送り込み、政府上層部を掌握、洗脳。
第二段階	宣伝、メディアの掌握、大衆の扇動、無意識の誘導。
第三段階	教育の掌握、国家意識の破壊。
第四段階	抵抗意志の破壊、平和や人類愛をプロパガンダとして利用。
第五段階	教育や宣伝メディアなどを利用し、自分で考える力を奪う。
最終段階	国民が無抵抗で腑抜けになった時、大量植民。

スイス政府発行の『民間防衛白書』によれば、まずは侵略すべき国に作業員を送り込み、政治家やメディアを握ります。

次に教育をも掌握して、国民の国家意識を破壊、抵抗する意識をも破壊して、代わりに「平和」や「人類愛」といった耳ざわりの良い言葉を謳います。

こうして大衆から考える力を奪い取ることで、国民が無抵抗で腑抜けになった時に、最終的に大量の移民を送り込むことができれば、その国は簡単に侵略できると言います。

つまりたとえ戦争はせずとも、侵略と防衛という意味での戦争は、こうしている今も行われているということ、スイス政府は国民に教えているわけです。

そして日本は、国民が無抵抗になり、移民問題が取り沙汰されている現状を見ると、すでに最終段階を迎えていることが分かります。

つまり日本は内部崩壊、国家侵略の危機を迎えている、ということです。

GHQによる日本共産化

そしてハンガリー系ユダヤ人でラビの資格を持つラビ・マーヴィン・トケイヤーという人物が書かれた書物に、『ユダヤ製国家日本—日本・ユダヤ封印の近現代史』という書籍がありますが、その書籍からも、「GHQとユダヤ人の深い関係」は明らかです。

では、戦後にやってきたGHQは、果たして日本に何を行ったのでしょうか。

『日本人に謝りたい』には、以下のように記されております。

GHQのニューディーラー

ニューディーラーは事実上、初期のGHQを思うがままに牛耳っていた。マッカーサーもニューディーラーの指令に忠実に動いていたことは事実である。

先ず、日本の国体と密接に関係のある教育における去勢作業から始めたのであった。修身、地理、歴史（地理歴史という場合問題とされるのは、事実上、日本の皇国史観のみであった）の授業を禁止する措置をとった。

「ニューディーラー」とは、ユダヤ人のフランクリン・ルーズベルト大統領によって展開されたニューディール政策を推奨し、社会主義的な思想を持った人々のことです。

社会主義とは、企業が得た利益を国が管理して、国民の給料も国が管理、分配する社会です。一方で共産主義とは、すべての利益を皆で共有する社会制度であるために、共産主義の一步手前の社会のことを社会主義と考えることもあります。

つまり戦後、日本にやってきたGHQとユダヤ人の関係は深く、しかもその本質は社会主義であった、そうこの書籍は述べているわけです。

これを踏まえて、『日本人に謝りたい』のこの記述をご覧ください。

日本共産党を育てたのは我々の最大の誤りだった

ユダヤ人が日本人に謝らなければならない最大の問題は、戦後日本共産党を育て残置謀者として残していったことである。これは具体的にはニューディーラーが全て行ったことである。共産主義者群から成っていたニューディーラーは社会主義革命こそ行わなかったが、戦前の日本にあった類い稀な長所をすべて破壊したのである。それ以上に大きな誤りは、残置謀者として日本共産党を育て、残したことである。

日本を戦争によって倒したルーズベルトも、共産思想を生み出したのもマルクスも共にユダヤ人であり、ソ連という巨大な共産国家を誕生させた「ロシア革命」も、実はその本質は「ユダヤ革命」でした。なぜならレーニンも、トロツキーも、ソ連の政府中枢にいた人々は皆、ユダヤ人だったからです。

すなわち日本の敗戦とGHQによる日本改造は、まさに日本共産化であったと見るができるわけです。

先の大戦を機に中国やベトナム、カンボジアをはじめアジアやヨーロッパの多くの国々が、共産化しました。ソビエト連邦は「革命」によって誕生しましたが、「戦争」も共産化に利用されたと見ることもできるわけです。

『共産党宣言』では、マルクスは「万国のプロレタリアート（労働者階級）よ、立ち上がり団結せよ」と呼び掛けているわけですが、著者のモルデカイ・モーゼによると、「プロレタリアート」の語源はラテン語の「Proles = 子孫」という意味であると言います。この言葉の本来の意味は、「子孫しか財産のない者」、つまり「無産者」、何も生産しない者という侮蔑の意味が込められているそうです。

そしてこう記されております。

マルクス主義は「ユダヤ民族解放」のための虚構理論だった

戦後の日本の混乱に最大の責任があるのはマルクス主義である。

マルクス主義の害毒といった場合、普通は表面に現われたもの、例えば安保騒動の如きものとしか捉えず、日本共産党の民主連合政府綱領を見て、革命というマルクス主義の現実的脅威はなくなったと考えるかも知れない。だが、問題はそんな生易しいものではない。というのは、マルクス主義とは単なる「革命理論」ではないということである。

マルクス主義の戦後における影響の最たるものは、この稿でとり上げる戦後の病理、虚妄性、日本歴史の真の構築を阻む跛行性をつくり出したということにあるといわねばならない。

これらを具体的にいうと、国家・民族意識、愛国心の去勢、道徳観の失墜、拝金主義の培養、家族制度の崩壊、その他、戦前の日本が世界に誇った冠絶した長所を失墜せしめたことにある。

毛沢東も、スターリンもユダヤ人ではありません。しかしこの二人が信じた共産主義というイデオロギーは、「平等」を謳いながらも、結局は超独裁国家を築くものであり、彼らは望み通り独裁者になりました。

そしてモルデカイ・モーゼによれば、実のところ『タルムード』の本質とは、共産革命を実践する思想である、ということです。

実際にルーズベルト本人、妻エレノアには共産主義の疑惑があり、ルーズベルト政権には数多くの共産主義者がいました。近年、公開された『ヴェノナファイル』というアメリカの機密文書から、戦時中、米政権の幹部とソ連のコミンテルンが綿密に連絡を取っていたことも明るみになっています。

実は日本を戦争に追い込んだ最後通牒「ハルノート」ですが、この文書の原案を書いたアメリカ官僚デクスター・ホワイトは、ソ連のスパイであったことも、すでに歴史的事実となっているのです。

すなわち、ルーズベルトはじめアメリカで強い力を持っているユダヤ人を自称する者たちの本質とは、まさに『タルムード』の家畜思想であり、さらにその『タルムード』の本質は、実は共産主義だったわけです。

つまり『タルムード』の思想は、他の人を家畜と見なして、奴隷支配する思想であり、共産主義の思想は、自分を物質の塊と見なして、奴隷支配される思想なわけです。表現を変えれば、一つの奴隷支配の思想を上から見ると『タルムード』になり、下から見ると共産主義になる、そう表現できるわけです。

ですから「日本の同盟国であり、自由のキリスト教国家でもあり、資本主義の大国アメリカの大統領は、時にルーズベルトやバイデンなどは共産主義者である」、この驚愕の事実を私たち人類は素直に受け入れるべきなのです。

なぜならこれを考えればこそ、なぜ映画『ノストラダムス戦慄の啓示』の最期に、アメリカ大陸が描かれていないか、あるいは『黄金の法』でアメリカ大陸が沈むと予言されているか、その理由が見えてくるからです。

また、たしかに日本にやって来て、日本を改造し尽くしたGHQは、日本の「軍部」、「財閥」、「地主制度」などを解体する一方で、日の丸を掲げることも、国歌斉唱も許されない厳しい占領下の中で、共産主義の教育者たちが『日教組』を創設することは許しました。

『日教組』とは、表向きは教育者の労働団体ですが、その本質は共産主義です。

この『日教組』が、どれほど日本人から国家意識を奪い、愛国心を奪い、日本人を無抵抗な腑抜けた民に変えてきたことか、それは計り知れません。そして今なお『日教組』は、「LGBT教育」を積極的に推奨しております。

人間獣化計画の被害者日本人？

そして『日本人に謝りたい』という書籍によれば、「日本国憲法の作者はユダヤ人である」とした上で、こんな記述があります。

なぜ現代日本はワイマール体制末期のドイツと似ているか

日本では最近とみに識者の間で、今日の日本はワイマール体制末期のドイツに酷似しているのではないかと、いわれているようである。これは真に興味深いことであると思う。

この原因は、ワイマール憲法と日本国憲法の類似性にあると思う。というより、日本国憲法はワイマール憲法の丸写し——しかもかなりずさん——であるといった方が正確であろう。

ワイマール体制の支柱となったワイマール憲法は、ご存知の通り、ユダヤ人で内相も務めたフーゴ・プロイス以下3名のユダヤ人によって作られたものである。

また日本国憲法はこれもご存知の通り、ユダヤ人ケーディスを中心としたGHQのニューディーラーによってわずか「2週間」という短日時に作られたものである。【中略】

(ワイマール憲法を書いた)プロイスは、ここでちょっと色気を出した。それは、ユダヤ民族の反撃戦のプログラムの要諦ともいべき要素の指示するところを盛り込んでしまったのである。それは簡単にいえば、19世紀のプログラムであるマルクス主義から一步飛躍した闘争方針の要諦を指示するものといえよう。

その一步飛躍した闘争方針というのは、マルクス主義が経済的闘争の道具であるのに対して、これは神経戦、心理戦を主とした闘争の道具とするものといえよう。簡単にいうと、「人間の純度」を落とすことを狙いとしたものである。人間を闘争本能まっだしの動物的なものに回帰させるのを目的とするものであり、それにより既存の国家を内部から崩壊させようとするものである。それに対しては後にゲッベルス宣伝相がドイツ国民に警告する文書を公布している。

この『日本人に謝りたい』の記述によると、現憲法はワイマール憲法の丸写しであり、その目的は「人間の純度」を落として、動物的にすることであった、というのです。実際に現日本国憲法の草案を書いた、GHQのチャールズ・ケーディスはユダヤ人です。

さらにこの『日本人に謝りたい』には、こうも記されております。

ゲッベルスは戦後日本の予言者だったのか

ドイツのゲッベルス宣伝相は、ドイツ国民に与える警告として次のような内容の文書を1934年に公布している。

それは、非常に強大な超国家的勢力が、文明の破壊にもつながる心理戦、神経戦を挑んできている。これに対してドイツ国民は十分警戒せねばならない。この心理戦、神経戦の目的とするところは、人間の純度を落とすことにより現存する国家を内部からむしばんでいこうとするものである。

ゲッベルス宣伝相が挙げたこの超国家的勢力の狙いとする心理戦、神経戦とは次の如き大要である。

「人間獣化計画」

愛国心の消滅、悪平等主義、拝金主義、自由の過度の追求、道徳軽視、3 S 政策事なかれ主義 (Sports Sex Screen)、無気力・無信念、義理人情抹殺、俗吏属僚横行、否定消極主義、自然主義、刹那主義、尖端主義、国粹否定、享楽主義、恋愛至上主義、家族制度破壊、民族的歴史観否定

以上の19項目をつぶさに検討してみた場合、戦後の日本の病巣といわれるものにあてはまらないものがただの一つでもあるだろうか。否、何一つないのを発見されて驚かれるであろう。ゲッベルス宣伝相は、戦後の日本に対する予言者だったのであろうか。

たしかにナチスのゲッベルスが警戒した「人間獣化計画」の19の項目は、戦前の日本人にはあまり当てはまりませんが、しかし戦後の日本人には、当てはまるものばかりです。

そしてそれはまさに、スイス政府が「民間防衛白書」が警戒している国民性の墮落です。

つまり『日本人に謝りたい』という書籍を、ごくごく簡単に説明するならば、戦後の日本人の墮落、そして日本の共産化は、けっして単なる偶然の産物でもなんでもなく、実は自分たちユダヤ人の仕業であった、しかしユダヤ人は迫害に継ぐ迫害の歴史を歩んできたために、我々は愚かであったのだ、ユダヤ人こそ日本人から学ぶべきであり、日本にこそユダヤの理想があった、だから懺悔する、日本に謝りたいというわけです。

税金と水道代が上がる理由

この『日本人に謝りたい』という本が偽書なのか、真実なのか、それは定かではありません。しかし愛の神・主エル・カンターレの教えから考えれば、『タルムード』が思想的に間違っていることだけは明らかです。そして懺悔しているユダヤ人もいるのかもしれませんが、未だに懺悔することなく、世界に「グレート・リセット」という名の共産革命を起こして、「グレーター・イスラエル計画」に邁進している者たちがいることも事実と言えます。

ですからこの『日本人に謝りたい』という本は、もしかしたユダヤ人を貶めるための罠、偽書なのかもしれませんが、彼ら戦略を読み解く参考書としては、十分に読む価値があると言えるでしょう。

そしてすでにご紹介しましたように、プラナイティス神父が書かれた『仮面を剥がされたタルムード』を紐解くと、「キリスト教徒を殺す者達は天国で高い位を獲得する、ユダヤ人はゴイム絶滅を止めてはならない、彼らを平和にしておいてはならない」という恐ろしい言葉があります。あるいは『タルムード』には、次のような言葉もあります。

非ユダヤ人はイスラエル人の財産に対し所有権を有せず」(シュルハン・アルフ、第3巻正義の楯)。
非ユダヤ人の所有する財産は、本来ユダヤ人に属するものなれど、一時彼らに預けてあるだけである。
汝に何らの代償もなくして、これら財産をユダヤ人の手に収めるも可なり (シュルハン・アルクーショツツエハミツパッド第348条)。

この言葉を冷静に考えれば、何ゆえに消費税が上がり続け、水道代、ガス代、電気代が値上がりして、そして

日本国民の暮らしが徐々に苦しくなっているのか、その原因も見えてくることでしょう。

たとえば日本の水道事業は2018年に民営化されました。そしてすでに『ヴェオリア』などの外資系企業が、日本の水道事業に入り込んでおります。この会社はユダヤ人ロスチャイルドが、前身の『ジェネラル・デゾー』という会社を設立して、現在にいたっております。

そのために水というものは人間の生命の存続に欠かせないというのに、日本人が今、水を使えば使うほど、お金が海外に垂れ流れていく状態になってしまいました。

「水を使う度に海外にお金流れ、水道代も上がり、徐々に国民が貧しくなっていく」、これもやはり間違ったグローバリズム、共産化の流れであると言えるでしょう。

まさに「貧乏の平等分配」が行われ、独裁政治が始まろうとしているわけです。

しかも『ヴェオリア社』の傘下にある『ラファージュ』という会社は、麻生副総理の親族が経営する『麻生セメント』と資本提携しております。ですから水道利権に政治家が群がっているようにも思えます。

では、水道事業が民営、もしくは外資化すると、果たしてどうなるのでしょうか。

たとえば1999年、『世界銀行』はボリビア政府に対して、ボリビアで3番目に大きい都市「コチャバンバ市」の水道事業を民営化させる計画を押し付けました。『世界銀行』は「もしコチャバンバ市が民営化すれば、適切な料金で良質な水の供給を行うことが可能になる上、さらにボリビア政府の600万ドル借金を免除してやる」、という条件を提示したのです。

そして巨大建設会社『ベクテル』の子会社『アグアス・デル・ツナリ』という会社が、コチャバンバ市の水道経営権を買取りました。すると『ツナリ社』は、「水道サービスの向上のためにダムを建設する」という理由から、水道料金を一気に4倍にまで引き上げたのです。

最低月額給料が百ドル、日本円に換算して約1万程度の町で、なんと水道の請求額が20ドル、約2千円にまで上昇しました。単純に言って、給料の5分の1が水道代になってしまったわけです。

この後、コチャバンバでは死者を出す暴動にまで騒ぎが発展して、何とか水道事業は再び国営化されました。

しかも日本で水道事業が民営化された時、日本中は別の2つの件に釘づけにされておりました。一つは突然、行われた『オウム』の麻原の死刑執行、もう一つはワールドカップサッカーに日本代表の活躍です。日本中がこの2つの件に釘づけになっている最中に、サラッと水道事業は民営化されて、今では外資が参入しているわけです。こうした大きな報道で何かを隠す手法を、「スピン報道」と言います。

もしもこのまま放置していたら、日本の水道料金も値上がりが続けて、「コチャバンバ水騒動」のような事態になってしまうかもしれません。なぜなら水道、電力、ガスの外資化によって、多国籍企業が入り込み、すでに日本はグローバリズムの波に飲み込まれつつあるからです。

遺伝子組み換え食品について

明らかに危険な除草剤

電気、ガス、水道が外資化することによって、日本がグローバリズムの波に飲み込まれ、共産化しつつあるわけですが、その他にも身近なグローバリズム・共産化は「食」です。

すなわち「遺伝子組み換え食品」の問題です。ロックフェラー傘下の会社に『モンサント』という会社があり、この一社だけで世界の90%の「遺伝子組み換え食品」が作られております。

すでに自民党政権が行っている「農協改革」によって、『JA全中』は社団法人に格下げされ、今後、外資に売られる可能性さえある中、さらには種を守るための法律「種子法」も廃止されてしまいました。

そのために日本の農家は、外資から高い種と農薬と肥料を買わされることになりました。

肥料や燃料の高騰によって、日本の農家が次々と廃業に追い込まれていく中で、日本国内に工場を次々と建てて、「遺伝子組み換え食品」を作り、勢いを伸ばしているのがこの『モンサント』なわけです。

このように「食の問題」は、健康のみならず、グローバリズムの問題でもあるわけです。

そして実は日本は世界一位の遺伝子組み換え食物消費国です。そのために、すでに私たちの身の回りには、たくさんの遺伝子組み換え食品が並んでいます。

つまり「日本人の食卓には、すでに多くの遺伝子組み換え食品が並んでいる」ということです。特にお菓子の原料に多くの遺伝子組み換え食品が使われているために、お菓子を良く食べる人、子どもほど「遺伝子組み換え食品」を食べていることになります。

では、遺伝子組み換え食品は安全なのでしょうか？

それとも人体に何らかの悪影響があるのでしょうか？

なぜ私たち日本人は、通称「GMO」と云われるこの食品について、ほとんど何も知らずに毎日を過ごし、そして口にする事態となっているのでしょうか？

『タルムード』の「ゴイム絶滅を止めてはならない、彼らを平和にしておいてはならない」ということを前提において、「遺伝子組み換え食品」について、考えてみたいと思います。

モンサント社は、90日間、遺伝子組み換え食品の大豆を、マウスに与える実験を行なって、「何も問題はない」と発表しました。しかしフランスの『カーン大学』のセラリーニ教授たちの研究チームが200日間、モンサントの遺伝子組み換え大豆をマウスに与え続けたら、なんとゴルフボールのような腫瘍がポコポコと出来上がりました。しかも遺伝子組み換え作物を育てている畑の近くに住んでいる少女は、全身がホクロだらけになってしまい、世界中を驚かせ、そして悲しませました。

しかし、なぜ人類は今、食物の遺伝子操作を行っているのでしょうか。それはお金のためです。

かつての農家ならば雑草が生えてくれば、その雑草を一つ一つ手で取らねばなりません。しかしそれでは手間がかかり、人件費もかかります。

そこで『モンサント』という巨大な食品会社は、雑草を一気に枯れさせてしまう強い除草剤を開発しました。広大な土地に、飛行機で空から除草剤をまくわけです。

しかし強い除草剤をまいたら、育てたいはずの作物も一緒に枯れてしまいます。

そこで「生物の遺伝子を組み換える」ということが行われ始めたわけです。つまり作物を枯れさせるほどの強い除草剤にも耐えさせるために、大豆やトウモロコシ、菜種、綿、テンサイなどの遺伝子が組み換えられたわけです。

しかし実はこの『モンサント』こそ、ベトナム戦争の際に、米軍が空からまいた枯葉剤を造っていた会社でした。

ベトナム戦争中、米軍は森林の中で行うゲリラ戦に悩まされました。そこで「森林を丸ハゲにしてしまおう」と、空から強烈な枯葉剤をまきました。これによって森林が丸ハゲになる代わりに、その地域に住む人々は健康を害し、生まれた子どもたちには様々な奇形がみられたのです。「ベトちゃんドクちゃん」と言えば、記憶されている方もいるのではないのでしょうか？

『モンサント』こそ、ベトナム戦争でまいた枯葉剤を造っており、そして遺伝子組み換え食品を育てるために撒かれる除草剤も、実はもとを辿ればこの枯葉剤だったわけです。

そして一般的に言われていることとして、この除草剤が問題なのです。

2021年5月、アメリカのカリフォルニア連邦控訴裁判所で、『モンサント（現バイエル）』の敗訴しました。『モンサント』の除草剤『ラウンドアップ』によってガンになった」と訴えていたエドウィン・ハードマン氏は、2019年にも地裁で勝訴しており、その後、『モンサント』が控訴していたのですが、2021年にも勝訴したわけです。賠償額は一審判決の8300万ドル（83億円）から減額され、2500万ドル（25億円）になりました。

裁判結果からも明らかなように、遺伝子組み換え作物を育てる際に使用される除草剤には、確かに危険性があるわけです。

食品と歯磨き粉の危険性

アメリカの甲状腺ガンの発生率と遺伝子組み換え食品が増加していく推移を見れば、やはりどう考えても遺伝子組み換え食品そのものが安全には思えません。なぜなら私たちは毎日365日、約八十年の人生にわたって食べ物を口にするからです。

実際に世界的に活動する『フレンド・オブ・ジ・アース』という市民団体の調べによれば、『モンサント』の従業員食堂では、遺伝子組み換え食品を出していないのです。

アメリカ人の髪の毛をDNA検査すると、食べていたものを分析できて、そして結論を言えば、アメリカ人の肉体の大部分はトウモロコシからできているそうです。もちろんアメリカ人も野菜や肉も食べているのですが、しかしDNAの分析結果は、ほぼトウモロコシでした。

なぜならトウモロコシから「コーンスターチ」を始めとする様々な原料が何でも作れるからです。

日本の食卓を取り戻し、子どもたちの健康を守るためにも、どうか男性も覚えてください。「コーンスターチ」です。

「コーンスターチ」は、あらゆる原料になります。カマボコ、チクワ、てんぷら粉、お好み焼粉、ベーキングパウダー、即席麺類、冷凍麺、缶詰スープ、冷凍卵焼き、ソース、マヨネーズ、スナック菓子、米菓子、ビスケット、カレールー、その他のインスタント食品、ビールなどなど・・・実はあげればキリがありません。

しかもコーラ、発酵乳酸飲料、フルーツジュース、清涼飲料、ポン酢などの調味料、ドレッシング、パン、アイスクリームなどの成分表を見ると、必ずと言って良いほど「ぶどう糖果糖液糖」、あるいは「果糖ぶどう糖液糖」と書かれています。そしてこの「ぶどう糖果糖液糖」、「果糖ぶどう糖液糖」、2つを総称して「異性化糖」と云うのですが、実はこの「異性化糖」の原料も90%以上は、やはりこの「コーンスターチ」です。

しかもこうした遺伝子組み換え食品は実は作物のみならず、鶏肉などの家畜・動物にも行われています。足が何本もある鳥、あるいは無毛の鳥などの肉が、すでに世の中に出回っています。足の部分に多くの肉があり、毛が無いほうが出荷する時に手間が省けるからです。

このように小説の『フランケンシュタイン』のような、あるいはゲームの『バイオハザード』のようなことが、実際に『モンサント』の畑、あるいは工場の中で行われ、そして日本をはじめ世界中で食べられているわけです。

すでに遺伝子組み換え食品は、世界中に出回っているために、世界中の市民団体が危険性を訴える講演を行ったり、世界同時多発デモが大々的に行われてきました。2015年5月には世界48カ国、400都市以上で、反モンサント・反遺伝子組み換え食品の大規模デモが行われました。

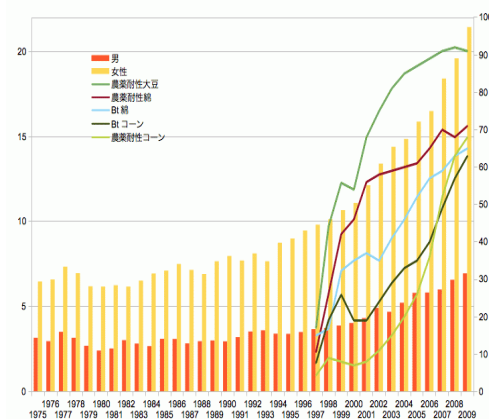
しかしこれらの事実についても、日本のマスコミではまったく取り上げられません。

そのために日本のデモだけ規模は小さく、日本人は遺伝子組み換え食品の危険性を知らずに、常日頃から世界で最も遺伝子組み換え食品を口にしていくわけです。

そして関係があるかどうか、それは定かではありませんが、たしかに日本の癌は増加しており、外資系の医療業界と保険会社まで潤わせてもいます。

たとえば日本人に非常に馴染み深い大豆ですが、国内自給率は6~7%しかなく、残りはアメリカ、カナダ、中国などからの輸入に頼っています。そして日本に流通している大豆の約84%は、すでに遺伝子組み換え大豆なのです。

米国での甲状腺ガンと遺伝子組み換えの推移



バイエルとモンサント

他にもこの『モンサント』は、害虫が作物を食べると死ぬ遺伝子なども作っています。あるいは「ターミネーター種子」といって、遺伝子組み換えの結果、種がつかない作物も開発しています。普通は種がつけば、その種で来年の農作物を育てることができますが、しかし種が付かないために、毎年、『モンサント』から種を買い続けなければいけないわけです。

もしもこの種が世界に広まってしまえば、世界の食は『モンサント』によって完全に支配されてしまいます。そのためにこの「ターミネーター種子」は「奴隷種子」とも言われています。

実は世界中で反『モンサント』、反遺伝子組み換え食品でデモが起きているその理由の一つに、これを危惧している部分がかかなりあるのです。

実際にそうした「種による食の支配」は、すでに世界で始まっております。

1999年に『モンサント』は、綿花生産で世界3位のインドの企業を買収しました。そして『モンサント』は、2001年から自慢の遺伝子技術で、殺虫剤不要の綿花の種をインドでも売り始めたのです。その「遺伝子組み換え種子」は、これまでの4倍の値段でした。しかしなぜかインド政府は、『モンサント』の綿花の種子しか、販売を許可しなくなってしまったのです。

そのためにインドの農家の人々は、この高額な遺伝子組み換え種子を買うしか、農業を続けることができなくなってしまいました。ところがこの遺伝子組み換え作物でも、耐性を持つ害虫が大量に発生してしまいました。そのためにインドの農家は、壊滅的な大打撃を受けました。

「4倍も高額の種子で、しかも大半の作物が害虫にやられてしまった」、それは農家を営む人々にとって、途方もない苦しみです。その結果、2009年だけでも17638人の農家の人が自殺したのです。これは30分に一人の割合で、農家の関係者が自殺した計算になります。そしてこの事件以来、インドの農家の人々の自殺率は、平均してずっとこのくらいなのです。

このように遺伝子組み換え作物は、人から職を奪い、健康も奪い、命さえも奪っているのです。

私たちが、『モンサント食品』しか食べ物を口にできないそんな時代は、けっして幻想ではありません。

近年、『モンサント』は『バイエル』という会社を買収されました。『バイエル』と聞いて、「なんだウィナーの会社が『モンサント』を買ったのか？」と考えたら大間違いで、『バイエル』とは製薬会社です。

その会社が『モンサント』を買収し、そして様々な遺伝子組み換え食品を製造しているわけです。

このように電気、ガス、水道のみならず、食においても、特に遺伝子組み換え食品と種子というカタチで、私たちのすぐ身近にグローバリズム・共産化の流れがあるわけです。

そしてその背景には、「非ユダヤ人は財産を所有しない、一時彼らに預けてあるだけである」、「一切の私有財産を認めず、共同で財産を持つ」という恐ろしいタルムード・共産思想があります。

すでに自民党・岸田政権は完全に社会主義化しており、共産党の影が薄くなりつつある中、自民党の対抗馬として若者から人気を集めているのは山本太郎ですが、彼の周囲にいるのは、やはり共産主義者です。

アメリカもバイデン政権によって社会・共産主義しておりますが、地球全体が「グレート・リセット」や「パンデミック条項」などによって、今まさに共産化しているわけです。

そしてこの地球上において、この悪魔の思想に打ち克つだけの思想戦、言論戦を行える組織は、私たち『幸福の科学』および『幸福実現党』において他に存在しません。

ですから私たちは神の戦士として、光の使命として、もう一段、力強い思想戦、言論戦を行っていくべきなのです。

心の医者として癒す

戦略見抜いて戦略を立てる

私は本書の冒頭で、「宗教的アプローチ」で伝道できる相手には、ストレートに伝道すべきですが、しかし日本国民は心に「トラウマ」や「スコトーマ」を抱えているために、「宗教的アプローチ」によるストレートの伝道はなかなか通じない、だからかつて行基菩薩が行われたように、「政治的アプローチ」から行うべきであり、しかもそれは「新たな政治的アプローチ」が必要である、ということを書きました。

悪魔の戦略からなのか、日本国民の大変が「宗教に興味がない(スコトーマ)」、「新興宗教が嫌い(トラウマ)」なのです。

ですから私たち仏弟子は、その日本国民の心を深く理解した上で、原因・結果のプロセスを見抜く生かす愛の心に基づいて、対機説法型の伝道を行っていくべきあります。

そしてそのためには、「新たな政治的アプローチ」が必要であり、私はその「新たな政治的アプローチ」を伝えるために、遠回りに遠回りを重ねて様々な話をしてまいりました。

それは「世界が共産化に向かっている」という事実をお伝えするためであり、「共産化を行おうとしている者たちの思想がいかに間違っているか」をお伝えするためであり、「私たち光の戦士しかグレート・リセットを止めることはできない」ということをお伝えするめであり、「主エル・カンターレは日本人にとっても、ユダヤ人にとっても、地球人類が待ち望むメシアである」ということをお伝えするためでもあります。

その過程の中で、常に一貫して私が行ってきたことは、「彼らの戦略を暴く」ということでもありました。

それは冒頭でもご紹介しましたように、ゼウスが初期の霊言の中で、「**戦の要諦は敵の戦略をいち早く見抜くことにある**」と述べられたことであり、『孫子の兵法』の「敵を知り己を知れば百戦危うからず」ということです。

では、私たちは光の戦士として、敵の戦略を見抜いた上で、一体いかなる「戦略」を立てるべきなのでしょう。

本書をここまで読まれてきた方ならばお分かりのように、日本国民は何も真実を知らされていないのです。

医療についても、食や水道などについても、真実の歴史についても、税金についても、何も真実を知らされないまま、スポーツや映画などには夢中にさせられて、気づかぬうちに無抵抗にさせられて、貧しい人生を送る羽目になっている、それが現在の日本人の悲しき状況です。

ユダヤ人も加害者ではなく被害者ならば、日本人もまた被害者なわけです。

ですからまずは、無抵抗にされた彼らに、秘されている真実を教えるべきでしょう。

もちろんのこと、『幸福の科学』のイメージが悪くなるので、陰謀を前面に押し出すのではなく、また世の人々から「反ユダヤ主義」や「ユダヤ差別」と誤解されないようにも、細心の注意が必要です。

ですからあくまでも医・食・住(電気、ガス・水道)など、生活に密着した知識と情報に留めておくべきです。

つまり何も知らされていない日本の人々に、医・食・住の知識を与えて、公の怒り、公憤を呼び起こすのです。

中国共産党によるチベットやウイグルの人権問題、香港問題、台湾危機、そして日本にも同じ危機が迫っている事実を伝えても、すでに日本国民の多くのが無抵抗な状態にさせられているために、「自分の生活には関係ない」と感じて、「怒り」の感情を奮い立たすことはなかなかありません。

老若男女に当てはまることですが、今の日本国民は、そもそも政治に関心がないのです。

それは選挙の低い投票率が物語っており、まさに現代の日本は衆愚制民主主義そのものです。

しかし遺伝子組み換え食品や種の問題、外資化している水道、電気、ガス、そのために値上がりしている光熱費の問題、さらには癌治療の問題、これらの問題はとても生活に密着しているために、「怒り」が湧き起こり易いと言えます。

実際に私は、『幸福実現党』の旗は立てておりませんが、遺伝子組み換え食品の問題で街宣を行ったことがありますが、国防問題の時とは町の反応が異なり、多くの人が青ざめた顔をして聴いておりました。

ですから身近な話をして、まずは人々を真実に目覚めさせ、公憤を呼び起こしていく必要があります。

つまり生活に密着した関心の高い政治の話をして、私たちの話を聞いてもらい、1ミリでも、1センチでも政

治に近づいていただくわけです。

表現を変えれば、目覚めた国民によって徳ある者が選び出されていく、徳治制民主主義へと変えていくのです。

そしてこれらの医・食・住（光熱費）といった話は、従来の『幸福実現党』にはない「新たな政治的アプローチ」と言えます。

自由、民主、信仰

実は、こうした遺伝子組み換え食品、水道外資化、癌治療、精神医学の問題などの政策を立てて、初めての国政選挙で国会議員を出したのが『参政党』です。『参政党』は、これまで政治に対して、ほとんど関心が無かった主婦層の支持を集めておりますが、それは参政党の政策が、医療、食料、水道などといった、主婦層にも関心の高い生活に密着した問題だからです。

悲しいことに私は、ネット上でこうした医・食・住に関する「情報」を拡散すべく幾つもの動画を上げてきましたが、しかしそれらの動画を見る人は、『幸福実現党』には投票せず、むしろ『参政党』に投票してしまっているという事実があります。

私自身、「世の人々に少しでも真実に気がついて欲しい」、「政治に一步でも近づいて欲しい」という想いから、様々な「情報」の動画などを上げているわけですが、しかし『幸福実現党』には、そうした医・食・住の政策が無いために、結果的には『参政党』に貢献してしまっている、という恐ろしき事実があるわけです。

しかし『幸福の科学』の信者も、女性、特に主婦層が非常に多いのですから、やはり国防問題等をこれまで通りにやりつつも、こうした医、食、住の問題にも取り組んでいくべきであると、私は考えます。

なぜなら主が『I Can! 私はできる!』と「仏法真理の学習」と「情報収集の努力」を行うことで、素晴らしい新世界を作る創造的な人間になれると、お教えくださっているからです。

普通に冷静に考えてみて、主婦同士、あるいはママ友同士が集まって、クッキーを食べながらお茶をしたとして、会話が「中国共産党が台湾に侵攻しそうでさあ〜」という方向に、自然なカタチでなるかと言えば、現代の日本ではなかなか難しいものがあります。むしろ「そのクッキー、遺伝子組み換え食品だからやめておいてほうが良いよ」という話のほうが、自然の流れと言えるでしょう。

すなわち私が推奨する「新たな政治的アプローチ」とは、無抵抗にさせられてしまった日本国民に、少しでも政治に目覚めてもらうべく、生活に密着した医、食、住（光熱費）の問題から入る、ということです。

これは「衆愚政治から徳治政治に変えていく」という啓蒙戦でもあります。

そしてこれはまた、「異質な知の統合」という意味での、僧団のイノベーションにも繋がっていくことでしょう。

たしかに主は、お隠れになる前、水道や食料や医療の問題には、それほど言及されることなく、むしろ「小さな政府、安い税金」、「国際化」ということは教えてくださいました。

しかしもしも先生がお話しされた「情報」からしか、政策を作らないのならば、それは考える力を失った訓誥学と言えるのみならず、むしろ創造性が欠落していると言えるのではないのでしょうか。

冒頭でも述べましたように、私たちは仏・法・僧の三宝に帰依する信仰者であり、私たち仏弟子が帰依している「法」とは永遠なるものであり、仏の慈悲であり、仏の子である我々に「悟りの縁」を与えてくれるものであり、「愛の発展段階」、「知の発展段階」、「八正道」や「六波羅蜜多」に深く関わるものです。

ですから私たち信仰者は、主の法に帰依し、主と一体となりつつも、「些末な知識」や「ガラクタな情報」は、弟子の力でかき集めて、判断力と創造性を磨いていかなければならないわけです。そうした意味での主にぶら下がる自立を、私たちは成していかなければならないはずで。

それに何よりも、主は「グローバリズム」については危険視されていました。

そして水道、電気、ガスが外資化して、これらを使う度に、日本のお金が海外に垂れ流れて、日本国民が貧しくなっていく中で、さらに税金を上げて、政府が給付金としてバラマクのならば、これは明らかに間違った

グローバリズムであり、共産化そのものです。

そして共産主義者たちが今、「グレート・リセット」という名で、世界的共産革命を起こそうとしているのなら、この危機を好機に変えていくのも、やはり主の教えです。

ならばこそ、たとえ総裁先生が、電気、ガス・水道の外資化については、明確に言われていなくても、日本人の暮らしを守り、日本の共産化を防ぐための政策を、私たち仏弟子は創造的になって、信仰心と智慧の力で考え出さなければなりません。

そしてそれは薬事法においても、まったく同じことが言えるでしょう。なぜならすでに述べましたように、現在、主流になっている癌治療では亡くなる可能性が高い一方で、代替医療によっては癌が治る可能性が高いからです。しかし薬事法に縛られて、「自由」が無いために、高い抗癌剤で製薬会社を儲けさせ続けています。

ならばこそ「薬事法」を改正することによって、癌治療にも「民主主義」と「自由競争」を取り入れる、それが主のお考えです。

また、精神医学に関して言えば、『世界精神保健連盟』が「すべての宗教の撤廃」というこおとを掲げています。なおかつ精神科医たちは、単なる仮説に基づいて、科学的ではない検査を行い、主観や独断で病名をつけて、さらには人が亡くなるような薬を処方し続けています。それでも未だに多くの人々が、神仏を信じるよりも、「精神医学が人の心を癒してくれる」と信じております。

以上のことから、はっきり言って「精神医学は宗教の敵」と言えるでしょう。

神は悪魔に敗れない、主は永遠に勝利し続ける。

そして正しき信仰者もまた敗れざる者である。

しかし『幸福実現党』が時に選挙で敗れることがあるように、信仰者もこの世的には一時的に敗れることはあるかもしれない。

これと同様に精神医学が日本において、本格的に広報活動を始めたのは90年代からであり、小泉政権の時に、「精神分裂病」という病名は「統合失調症」というオブラートにつつんだような名称に変更となり、「鬱病」には「心の風邪」というキャンペーンが行われて、駅という駅に〇〇クリニックが建てられて、精神医学は大発展してきた。

すなわち広報活動という分野において、『幸福の科学』は「精神医学」に勝っているのか、それとも敗れているのか、その結果を真摯に受け止め、もし反省すべきところがあるならば反省する、それもまた妖怪、天狗信仰から離れる上で、とても大切なことと言えるのではないのでしょうか。

なぜなら妖怪、天狗は反省しないのですから。

多くの人々が宗教、神仏より、「精神医学が人の心を癒してくれる」と信じている以上、まさに精神医学は「宗教、神仏の敵」なのですから、精神医学の邪悪性を暴き、それを世の人々に知らしめて、世の中の常識を逆転させていくことも、非常に大切なことではないのでしょうか。

癌治療に「民主主義」と「自由競争」を取り入れ、「信仰の敵」である精神医学の間違いを糾す、それもまた、主エル・カンターレが私たちに教えてくださった、「自由、民主、信仰」ということなのではないのでしょうか。

ゆえに今こそ私たち仏弟子は、「仏法真理の学習」と「情報集の努力」を怠ることなく行い、創造的になって、マスコミ的な動きをなして異質な知を統合し、主の願いである僧団のイノベーションを行うことで、弟子の力で法輪を転じ、「自由、民主、信仰」の日本を実現していくべきです。

宗教の力が世界を救う

医・食・住というこうした「身近な恐怖」を、多くの日本人に教えてあげるべきなのですが、この時に必要なのが、「人と人の温もり」であり、人と人の触れ合いであり、すなわち「ハイタッチ」です。

総裁先生は『凡事徹底と静寂の時間』の中で、「**宗教が強調するべきはハイテクよりもハイタッチ**」ということを教えてくださいましたが、実のところネット等の「ハイテク」には様々な問題があります。

たとえば『Google』の共同創業者はセルゲイ・ブリンとラリー・ペイジの2人ですが、彼らはともにユ

ダヤ人だと主張しています。

この2人と共に『G o o g l e』を引っ張ってきたエリック・シュミレットが掲げた『G o o g l e』の経営スローガンは「Don't Be Evil (邪悪になるな)」でした。しかし2014年、エリック・シュミレットは、「Don't Be Evilは愚かなルールだった」と語り、『G o o g l e』が中国に協力して、中国国内で検閲していることを公表しました。

たしかにすでにセルゲイ・ブリンとラリー・ページは、『G o o g l e』のCEOをインド系アメリカ人サンダー・ピチャイに譲っています。しかしこの2人のユダヤ人は、親会社の取締役にとどまり、なおかつ51%の株式と「議決権」を今なお持っています。そのために彼らは、未だに『G o o g l e』のCEOを解任することも、選任することもできません。

ですから単純に言って『G o o g l e』というインターネット会社は、ユダヤ人を自称する者たちが経営しているわけです。「おそらく彼らの根本的な思想には、タルムード・共産思想がある」、それが10回も『Y o u T b e』をBANされ、11回目のアカウントを作って、元ボクシング日本チャンピオンとの真剣なスパーリングをしても、アクセス数がまったく伸びなかった私を感じていることです。

実際に『G o o g l e』の元エンジニアのザック・ヴォリーは、『G o o g l e』の「AIプラットフォーム」に政治的な偏見が組み込まれていること、そして『G o o g l e』がその「アルゴリズム」を使って、政治的偏見があるその事実を隠蔽していることを内部告発しました。

つまり元エンジニアのザック・ヴォリー氏の告発によれば、『G o o g l e』は、「表現の自由」があると全世界に見せかけておきながら、実際には政治的偏見を『Y o u T u b e』の中に組み込ませているわけです。

彼は『G o o g l e』で8年間も働き、年収は26万ドル(約2600万円)の高収入だったそうです。しかし彼は言います。

「私には会社に残って、給料をもらい続けたい理由もありましたが、しかし『G o o g l e』がこうした計画を実行していることを知りながら、自分の利益のために見て見ぬ振りをしたのならば、私は永遠に自分を許すことが出来なかったでしょう。」

命を懸けた内部告発を行ったザック・ヴォリーによれば、『G o o g l e』は、自分たちが気に入らないチャンネルや動画は、登録者数やアクセス数が増えるのを止めているそうです。

実際に『Y o u T u b e』では、コロナ・ワクチン問題、ロシア・ウクライナ問題において、『G o o g l e』の意図に沿わない発言をすると動画が消されるか、アカウントごと削除されてしまうことが度々起きております。

つまり『Y o u T u b e』は多くの人々を錯覚させているわけです。その錯覚とは、「たとえ政治的な動画であっても、動画の内容さえ良ければアクセス数が増えて、チャンネル登録者数も増える。アクセス数が低く、チャンネル登録者数も増えないのは、その政治系の動画の質が悪く、内容が真実ではないからである」という錯覚です。

その証拠に、『Y o u T u b e』の急上昇ランキングは、いつも幼稚な動画ばかりです。

あるいは仮に、政治的な動画を上げて、伸びているチャンネルアカウントがあったとしても、「タルムード・共産思想」、「ユダヤ人を自称する者」、「レプタリアン」といった問題の本質にまでは踏み込まず、上辺の政治に留まっているものばかりです。

また『幸福の科学』にとって何よりも問題なのは、『G o o g l e』が霊的な事柄を認めてなく、そうした動画はアクセス数があまり増えないようになっていることです。つまり『G o o g l e』は唯物論に近いために、『幸福の科学』および『幸福実現党』には、かなり向いていないわけです。

つまりユダヤ人を自称する者たちが経営する『G o o g l e』は、明らかに世界の共産化、「グレート・リセット」を推奨し、実行していると言えるわけです。

だからこそ手段としては、多少ネットを使用しつつも、やはり求められるのは宗教が大切にしている「ハイタッチ」、すなわち人と人とのふれあい、温もりなわけです。

すなわち大救世主のもとに集いし我々は、『G o o g l e』をも乗り越えていく、救世の戦士とならなければいけないわけです。

そして主のおかげであり、天上界のご支援のおかげであり、在家、出家を問わず信者さんのおかげで、すでに北海道から沖縄まで支部や精舎が建立されているために、インターネットを超えられるだけのネットワークはすでに出来上がっている奇跡に、私たちは気がつくべきなのです。

それはつまり、インターネットを使いながらも、温もりのネットワークこそを使って、「情報収集の努力」を行い、主が望まれる全員幸福のNew World order（新世界秩序）を構築すべく、より創造的な人間になり、マスコミ的な動きをするということです。

政治と宗教の意義

新たな常識を建設する

ページ数が増えてしまうために、本書では詳しく説明できませんが、実は日本国民が政治に対して意識が低く、宗教の価値が分からないのは、単なる偶然ではありません。意図的な邪悪なる洗脳教育の結果、日本人は政治の意義を知らず、宗教の価値も分かっていないのです。

それはGHQが『日教組』を黙認して、自虐教育を行ったこと、終戦からわずか四か月後に「神道指令」を発して、宗教を隅に追いやっている事実からでも、少し予想できるはずです。

ならばこそ、日本国民に癌治療に問題点を伝え、「医学の闇」に気がついてもらい、そしていかに精神医学が人々の心を癒すどころか狂わしている事実を知ってもらったのならば、次は「政治と宗教の意義」について語るべきでしょう。

それはつまり、これまでの間違った価値観を破壊できたのならば、新たな正しい価値観を建設する、ということです。

もちろん一票もらうために、奮闘することも大切です。

戸別訪問も行うべきです。

しかし日本国民は、政治の意義を知らず、そのために選挙の投票率も低く、その結果、政治がまったく分かっていないタレントが政治家になれるのです。

はっきり言って現代の衆愚政治では、熱き志を持って『HS政経塾』に入塾するよりも、アイドルグループに入って、第二の就職先として政治家を選んだほうが、国会議員になれる確率が高いわけです。

また、衆愚政治の大きな問題点として世襲制があります。

科学者の苦米地英人氏は、『世襲議員という巨大な差別』という書籍の中で、次のように述べています。「一般人と比べて世襲議員の当選確率は2300倍。国民は彼らの奴隷状態です。こんな状況をいつまで許すつもりですか！これ以上「穢れた」世襲議員たちを許しておいてはいけません！！」と。

本当に、こんな穢れた状況を、私たち日本国民は、果たしていつまで許すのでしょうか。

しかしこの世襲制を含んだ衆愚政治の根本は、日本国民の「政治意識」が低いことが問題です。

「政治意識」とは、すなわち「政治に対する心」です。

そして私たち宗教者の仕事というのは、言葉を自分で創造してでも、人々の心にまで届く言葉を投げかけて、心に何かしらの良き影響を与えることです。

表現を変えれば、愛の心でもって、相手の心を深く理解して、そして原因・結果のプロセスを見抜く智慧の力でもって、人々を生かしめ導いていく、それが宗教者の仕事です。

ならばこそ、左翼自虐教育に洗脳され、「国なんかどうでもいい、政治なんか知ったこっちゃない」と考えている日本国民に、伝えるべきなのです。

「国は人生の土台である」という事実を。生まれ育つ国が異なれば人生の基本部分が異なるのだから、国とは人生の土台であり、国が貧困化すれば、大多数の国民も貧困化し、国が繁栄すれば大多数の国民も繁栄に向かい、その国を造るものが政治である、こうした政治の意義を説くべきでしょう。

政治に無関心な日本人は多かれども、政治と無関係な日本人は一人もいないという事実を伝え、そして政治の意義を説いて、政治に対する意識を高めるべく啓蒙活動を行うべきです。

すなわち衆愚政治から徳治政治へと時代を変えるべく、言葉でもって啓蒙活動を行うべきです。

また、宗教の価値も同時に伝えるべきです。

なぜなら多くの日本国民が、「宗教は結婚式や葬式といった冠婚葬祭の専門業」といった程度の認識だからです。ですから宗教家の仕事とは魂の教師であり、心の医者であるという事実も伝えるべきです。

すなわち常識が破壊されたところで、「政治と宗教の意義」を語り、新たな常識を建設すべきなのです。

常識の崩壊と建設、そして逆転

さて、ハイテクを使いながらも、ハイタッチとして人と人が触れ合い、温もりによって「新たな政治アプローチ」を行っていく、そして「宗教的アプローチ」へと繋げて、同時に僧団にイノベーションを起こしながら法輪を転じていく、という話をしてまいりました。

この「新たな政治的アプローチ」のためには、それなりのマニュアルも必要でしょうが、ごくごく簡単ではありますが、お話しさせていただきます。

まず、医・食・住どの順番でも構いませんが、これらの真実を隣人に語ることで、私たちの話を聴いてもらう流れを作りだすべきです。

女性が受け入れやすい話題は、遺伝子組み換え食品ですが、男性の場合は水道問題が話題として入りやすいと言えるでしょう。「スピン報道によって、水道民営化が注目されなかった」という事実は、多くの人の公憤に結びつきます。

そして次に癌治療と薬事法の問題に触れることで、西洋医学には闇がある事実を隣人に知ってもらいます。

そして医学の闇に気がついていただいた時点で、精神医学の真実を知っていただければ、多くの日本人の常識は崩壊していきます。

隣人の「精神医学は善、新興宗教は悪」という方程式を、まず破壊するわけです。

この「医・食・住の話から精神医学の話に移ることによって常識を崩壊させる」ということは、北海道から沖縄まで、日本ならばどこでも通じることでしょう。

そして「常識の崩壊」は、「常識の建設」のチャンスでもあります。

また『幸福実現党』が世の人々を真実を伝えて目覚めさせることによって、政党の支持母体である『幸福の科学』が、世の人々からもう一段、信頼を得ることになります。

ですから常識の崩壊の時に、真理の伝道も行っていくことで、新たな常識が建設されていきます。

常識の崩壊、そして建設は、まさに常識の逆転です。

ここで、「真の宗教家の仕事とは、冠婚葬祭ではなく説法であり、正しい宗教家こそ、人々を悟らしめる魂の教師であり、心の医者である」という真実を隣人に知ってもらう必要があります。

「人は何も教わらなければ狼にもなりかねないが、しかし人は真理を学ぶことによって仏にも近づいていける」という、ごくごく簡単な真理を世の人々に知ってもらう必要があります。

つまり「精神医学こそ悪であり、幸福の科学こそ正義であり、真の宗教家こそ心の医者であり、魂の教師である」という真実を知ってもらうことで、日本全体の常識を逆転させていくわけです。

これが、私が冒頭から述べている「新たな政治的アプローチ」から「宗教的アプローチ」へと繋げて、法輪を転じていくという流れです。

この流れそのものは、北海道でも、沖縄でも、日本全国どこでも通じるものであり、まさに「金太郎飴型の伝道」と言えるのではないのでしょうか

この「金太郎飴型の伝道」について、もう少しだけ具体的に言うならば、以下のような手順で語りかけていく

べきと私は考えます。簡単ではありますが、ご説明いたします。

今、水道、電気、ガスといった光熱費が値上がりしていますが、その原因は、実は日本の政治が愚かなために、それらが強欲な外資系企業に叩き売られてるからです。

このままでは、上げる必要のない消費税も、さらに上がってしまっ、私たち日本人の暮らしはますます苦しくなります。

また、日本人は世界で最も遺伝子組み換え食品を食べているというのに、多くの人がこの危険性を何も知らずに食べ続けていることも、やはり大問題です。

なぜなら遺伝子組み換え食品は発癌性が問題視されており、たしかにアメリカや日本では癌の発生率は上がっているからです。

そして何よりも切る、盛る、焼くといった癌の三大治療は、ほとんど人の命を救ってではなく、むしろ毎日千人の日本人が死んでいます。

これは年間で言うと、原爆投下よりも多い約40万人が亡くなっている状態です。

しかし本当は、オートファジーをはじめ、他の代替医療で癌を治癒している人は大勢おります。

マスコミはこれらの事実を報じず、高額な抗癌剤ばかりかが売れて、製薬会社を儲けさせております。

マスコミというのは日本国民の利益より、企業の利益を優先させているのです。

このように医学には多くの闇があります。

そして医学の闇の一つに精神医学があり、精神医学は科学的根拠を何も持たずに、精神科医たちは単なる仮説に基づいて、科学的な検査もすることなく、独断や主幹でもって診断を下し、病名をつけて、薬を処方しています。

しかも向精神薬には、「賦活症候群（アクチベーション・シンドローム）」とあって、副作用が伴うために、結果的に多くの人を自殺に追い込み、時には普通の人間を殺人鬼に変えてしまうこともあります。

精神病院から死亡退院する日本人の数は1ヵ月に約二千人もいる一方で、全国に30万人もいる精神病入院患者のうち退院できる人の数は、1ヵ月にわずかたった300人、たった0.1%の生存率です。

真の心の医者とは、精神科医ではなく宗教家です。

真の宗教家の本来の仕事とは、葬式や法事ではなく心の医者として、魂の教師として、自らは正しい教えを学んで、世の人々に説法することです。

かつては日本にも素晴らしい宗教家がたくさんいましたが、しかしいつしか葬式仏教へと墮落してしまいました。

以上のことから、宗教の善し悪しは新しさや古さではなく、あくまでもその中で説かれている心の教えであることは、おそらくご理解いただけるはずです。

古くても間違っものはあり、新しくても正しいものはあるのです。

たしかにこの国では、多くの新しい宗教が社会的事件を起こして消えてきました。

しかし箱の中に100個のリンゴがあり、99個腐っていたからといって、「残り最後の1個も必ず100%の確率で腐っている」とは誰も言い切れなように、邪教がたくさん暗躍して、社会的な事件を起こしてきたからといって、正義の宗教が存在しないと誰も言い切れません。

そして『幸福の科学』こそ、『オウム』、『統一教会』、『創価学会』の問題点を述べて警鐘を鳴らしてきた、唯一の新しく正しい宗教です。

伝統仏教が葬式仏教に墮落し、代わりに精神医学が流行することで、人々が自殺したり、殺人鬼になっている今、実は人生という一冊の問題集のヒントを教えてあげられる本当の心の医者、あるいは心の看護師は『幸福の科学』にこそいます。

ですからどこか、大川隆法先生の本を素直な気持ちで読んでみてください。

行基菩薩が土木事業を行いながら説法を行ったように、こうした流れて政治的な真実を教えてあげて、人々の心の中で常識の崩壊させ、さらには逆転を起こしていくわけです。それと同時に宗教家の使命を説いて、伝統宗教にも問題があることも伝えた上で、真理の伝道を行っていくわけです。

そうすることによって、「トラウマ」と「スコトーマ」を癒していくことができます。

ここにこそ、日本のどこにでも通じる「金太郎飴型の伝道」があると私は考えます。

すなわち「金太郎飴型の伝道」とは、まずは「秘された真実を伝える」→「公憤を呼び起こす」→「常識を逆転させていく」→「仏法真理を伝える」という流れです。

そしてこの大前提にあるものが、「主と一体となる」という意味での「信仰」であり、「主にぶら下がらない」という意味での「自立」であり、それが一年に千冊の書物を読まんという気概を持った「知的正直さにおける中道」と言えるのではないのでしょうか。

「信仰」と「自立」、そして「知的正直さにおかえる中道」、私はこれこそ光の戦士に必要なものだと考えます。

最終章 宇宙戦争

3つ目のイデオロギー

単なる資本主義の否定

大川隆法総裁先生は2009年4月30日、『幸福実現党宣言』と題して、ご説法され、そして翌5月23日に『幸福実現党』が立党されました。これについて先生は『幸福実現党宣言』の中で、『**共産党宣言**』の向こうを張ったつもりです」と述べております。

では、『幸福実現党』のイデオロギーは資本主義なのか？と問えば、明らかに違うことが分かります。それは『幸福実現党』が掲げる「自由、民主、信仰」という言葉からも明らかです。残念ながら信仰無き資本主義は共産主義に向かっていくからです。表現を変えれば、現在の資本主義も、共産主義も、目指しているものは一緒なわけです。

ですから私たち信仰者は、共産主義を完全否定しつつも、『資本主義の未来』を見据えなければならないわけです。

たとえば「商売の神様」と呼ばれた松下幸之助氏は、他人が家先に備え付けてある水道を勝手に使っているのを見て、「水はただではない、しかし水はただのように安いから怒る人は少ない、電化製品も水のように安ければ世の中の苦しみも減っていく」と考えられて、「水道哲学」を考えられました。

この「水道哲学」が、松下電器の大発展の一つの大きな鍵でした。

しかしボリビアのコチャバンバ市で死者まで出す水騒動が起きたように、世界にはこの「水道哲学」とは正反対の思想を持って、水道事業を我が物にしようとする者たちさえおります。

松下幸之助氏の「水道哲学」の根底にあったものは「愛」ですが、しかし「真逆の水道哲学」の根底にあるものは「欲」であり、厳密に言えば「支配欲」です。そしてすでに述べましたように、支配欲を持つ彼らは、どうやら「大衆に自由を与えることは危険である」と考えていて、人間を信じていない可能性があります。

そのために「自分たちは人間だ、あとは獣だ」という思想のもとに、資本主義社会の中で経済活動を行っていくと、結局、世の中はソ連や中国のような独裁共産主義世界が構築されてしまいます。

だからこそ、やはり「自由、民主、信仰」が大切であることが分かります。

つまり厳密には私たち仏弟子のイデオロギーは、従来の資本主義ではない、ということは明らかではありません。

表現を変えれば、『幸福実現党』のイデオロギーは、共産主義を完全否定しつつも、しかし資本主義にも終止符を打つ新たなイデオロギーであり、それはまさに「第三の選択」と言えるでしょう。

このことについて、総裁先生も『資本主義の未来』の中で、明確に「資本主義は終わりを迎える」と述べておられます。

新たな経済学の必要性

では、新たなイデオロギーを持つ私たち信仰者が実現する、資本主義を超えた社会とは、果たしていかなる社会なのでしょうか？

松下幸之助氏は、1979年11月に行なわれた講演で、次のように語っておられました。

国民は高率の税金に苦しんでいる。にもかかわらず政府は財政窮迫し、赤字国債を発行して国費に充てているという前途暗澹たる状態である。しかし、今から120年を使えば、日本は無税国家に変わる。

この20年で研究し、その後の100年で余剰金を積み立てて運用すれば、積立額は膨大になり、その運用益だけで予算を賄える。

経営の神様が「120年かければ無税国家は実現できる」と述べたわけですが、しかし120年も要らな

かったのです。なぜなら『フォード・モーター』の創業者ヘンリー・フォードは、皮肉を込めて次のように述べていたからです。

国民が金融の仕組みを理解していないことは良いことだ。

もし国民がそれを理解したら、明日夜が明ける前に革命がおきるだろう。

松下幸之助氏は「120年かければ無税国家になれる」と述べる一方、ヘンリーフォードは「金融の仕組みを理解したら、明日の朝にも革命が起こる」と述べました。

これは果たして何を意味しているのでしょうか？

反ユダヤ主義で、ナチスを支持したことでも有名なフォードのこの言葉は、何を意味しているのでしょうか。

オックスフォード大学大学院、東京大学大学院にて経済学を専攻し、今現在はイギリスのサウサンプトン大学にて教授を務められている経済学者に、リチャード・ヴェルナーという方がいます。彼は著書『虚構の終焉』の冒頭で、次のように驚くべきことを述べています。

「経済学はフィクションであり、人々から宗教のように信じられているが、まさに邪神崇拝であった。」

世界的な経済学の教授が述べる「経済学は邪神崇拝である」という言葉、これはまさに驚くべき発言です。

2018年に『ノーベル経済学賞』を受賞したポール・ローマーという方も、2016年の講演の中で次のように述べております。「マクロ経済学は、過去30年以上にわたって進歩するどころか、むしろ退歩した」と。

あるいは2008年に『ノーベル経済学賞』を受賞したポール・クルーグマンも同じく、受賞の翌年、こう述べています。「マクロ経済学の大部分は、良くて役に立たず、悪くてまったくの有害である」と。

もしくは『ゾンビ経済学』という書籍を書かれたジョン・クイギンという経済学者も、やはり次のように述べております。「経済学では、既に破綻した思想や理論が、破綻したあとも、ゾンビのごとく復活し、幅をきかせているのだ」と。

では、そもそも「経済学」とは何なのでしょう？

「経済」という言葉は元々、中国の言葉「けいせいざいみん経世済民」から来ています。「経世」は「世の中を治める」とか、「世を統治する」ということを意味し、「済民」は「人民を救済する」ということを意味しています。すなわち「経済」という言葉の本来の意味は、「世の中をよく治めて、人々を苦しみから救う」ということなわけです。

つまり医学が、人間の肉体の病を癒して、人を幸福に導くものであるように、経済学とは、国家における不況という病を癒して、人々を幸福に導くものであるわけです。

しかし実のところ、癌治療が癌患者を治していないのと同様に、これまでの既存の経済学では、そもそも「お金とは何なのか？」という根本的なことをまったく考えてきませんでした。これまで経済学は、「民間中央銀行」と「通貨発行権」について、何も議論することなくスルーしてきたのです。

そして山口薫元教授がこの経済のタブーについて切り込むと、彼は同志社大学を解雇されてしまったのです。

「お金」というものは、国家においてよく「血液」に喩えられることもあります。そして「血液」を体中に送り出しているポンプの機能を担っているのが「心臓」です。そして人間の「血液」を体内に送っているのが「心臓」ならば、「お金」を造って世の中に送り出しているのは銀行でした。

ですからお金を血液に譬えるのならば、銀行は心臓に当たるわけです。しかしこれまでの「経済学」では、「どうすれば血液（お金）の流れを良くすることができるか？」ということとは色々議論しても、「そもそも血液・お金とは何なのか？」、「血液・お金を送り出している心臓部分・銀行とは何なのか？」という根本的なことを、まったく考えることなく、議論さえもしてこなかったわけです。

しかし医者が血液の流れだけを考えて、心臓について何も考えないなど滑稽なことです。

ここにこそ経済学における最大の詐欺があるのです。

つまり癌治療や精神医学における医学に問題があったように、そもそも経済学にもかなり詐欺的な面があったわけです。

なぜなら同志社大学の元教授である山口薫氏が、「学んできた経済学と実際の経済はまったく異なる」と述べているように、実は現在の経済学は、結論から言って「金融の仕組み」を覆い隠すものでしかなかったから

です。

実はノーベル賞も、「経済学賞」だけは受賞金の出どころが異なり、本当の名称が「ノーベル経済銀行賞」であることを考えても、ノーベル賞まで「金融の仕組み」を覆い隠し、人々の目くらましに利用されているとしか言いようがありません。

たとえば1983年に『ノーベル経済学賞』を受賞した経済学者ジェラルド・ドブルーは、受賞した際に記者から、「先生の理論は、現在の米国経済において、どのように役立つのでしょうか？」と質問されて、次のように平然と答えています。「私の一般均衡理論は、日々の経済活動にはまったく役立ちません」と。

あるいは『ロングターム・キャピタル・マネジメント』、略称『LTCM』という大きな投資会社が、マイロン・ショールズ、ロバート・マートンという2人の「ノーベル経済学者」を揃えておきながらも破綻して、世界の経済に大きな損害を与えたこともあります。

ダイナマイトの発明によって巨万の富を築いた、スウェーデンの実業家アルフレッド・ノーベルの遺言によって、『ノーベル賞』は創設されました。ノーベル賞は1901年から始まり、物理学、化学、医学生理学、文学、平和の5賞が設けられ、今では「世界で最も権威ある賞」とさえ云われております。

実は経済学賞だけは、『スウェーデン国立銀行』が創立300周年を記念して、1969年から始まったために、この経済学賞の正式名称は、「アルフレッド・ノーベル記念経済学スウェーデン国立銀行賞」なわけです。

そのために他の部門が、「ノーベル財団」が運用して得た利益から賞金に充てるのに対して、この「経済学銀行賞」だけは、「スウェーデン国立銀行」から賞金が支払われております。

2001年に『ノーベル財団』の実務責任者であったミハエル・ソールマンという人物も、「経済学賞はノーベル賞ではありません。ノーベルの遺言にはない記念の賞です」と取材で答えています。

つまり『スウェーデン中央銀行』がやったことは、いわば世界的規模における「商標権の侵害」とも言えるわけです。

1974年に『ノーベル経済学銀行賞』を受賞した経済学者フリードリヒ・ハイエクも、授賞の晩餐会のスピーチで次のように述べました。「もし自分が相談されていたら、『ノーベル経済学賞』の設立には断固反対しただろう」と。

このように現在の経済学に問題があるのみならず、経済学に「世界的な権威」を与えている『ノーベル経済学賞』にも大問題があったわけです。

しかし世界中の多くの人々が、経済学者、一流大学教授、ノーベル経済銀行賞の受賞という「権威」に、コロっと騙されて、精神医学と同様に、「経済学は金融の仕組みを教えてくれる」と騙されているわけです。

「多くの人々が経済学に騙されている」、これが何を意味するか、それは、「経済学は経世済民^{けいせいさいみん}という意味における人々の救済をまったく行っていない」ということであり、もっと厳し目の表現をするならば、「経済学によって多くの人々が金融の仕組みを知らされず、その結果、金融詐欺被害に遭っている」とも言い換えられるでしょう。

だからヘンリーフォードは「金融の仕組みを理解したら、明日の朝にも革命が起こる」と述べたわけですから。

少しだけ金融のカラクリ

「経済学の闇」については、また別の機会に、もっとゆっくり深く説明する必要があると思いますが、しかし冷静に考えてみて、なぜ人々は100ドル札、あるいは1万円札を欲しがるのでしょうか。

なぜそんな紙キレごとで人は泣いたり、笑ったりして、そして紙キレで物を買ったり、サービスを受けたりすることができるのでしょうか。

それは人々がお互いに、「紙キレでも価値がある」と信じているからです。

原始時代や江戸時代にお札を持っていても、何も買えません。誰も信じていないからです。

もしも江戸時代にタイム旅行するならば、100万円の札束を持っていくよりも、100円ライターを10個持っていったほうが、よっぽど高く売れるでしょう。

では、どうして私たち人類は、いつの間にかただ紙キレを、まるで神のごとく信じているのでしょうか。なぜ人類は「紙を信じる」というような、まるで「バアル信仰」のようなことを始めたのでしょうか。

すでに述べましたように、「神に反逆する者」と呼ばれるニムロデは、「バベルの塔」の建設を始めて、神の怒りを買いました。

そして実は今、世界には、この「バベルの塔」に、とても良く似た重要な建造物が2つあります。一つがスイスのバーゼルにある『国際決済銀行・B I S』のビルであり、もう一つがEU・欧州連合本部ビルです。

特にEU本部ビルは、画家のピーテル・ブリューゲルが描いた『バベルの塔』の絵をモチーフに建設したとしか思えません。

では、なぜEU本部ビルは「バベルの塔」にそっくりなのでしょう？それはユダヤ人を自称している者たちが、共産主義であり、グローバリストであるために、彼ら「国境を取り除きたい」と考えているからです。

つまり彼らの独裁共産思想からすると、EUは一つの理想体であり、また一つ通過点なわけです。

では、EU本部ビルが「バベルの塔」に似ているのは分かるとしても、では、もう一つの『B I S』とは、果たして何なのでしょう？

人々がただ紙キレでも、「価値がある」と信じているその理由は、かつての紙幣は金（ゴールド）に裏付けられていたからです。

かつてお金のことは、「兌換紙幣」と言って、銀行に持って行ったら金と取り換えられたのです。

さらにその前は、国家が通貨を発行していたから、紙キレでも「信用」があり、その「信用」が「価値」になっていました。

しかしいつの間にか、国家が発行する紙幣が、民間の中央銀行が発行する紙幣に変わり、いつの間にか金の裏付けもなくなりました。

明らかに信用は失われてきたにも関わらず、しかし人々は、単なる「紙キレでも価値がある」と信じるようになったわけです。

今現在、「世界の基軸通貨」と言われるドル札を発行しているのは、100%の株式を国際銀行たちが持っている民間銀行の『F R B』です。

円を発行している『日本銀行』も、55%の株は政府が持ちながらも、残りの45%の株は民間が持つ特殊法人です。そのために『日本銀行』は、株式市場『ジャスダック』にコード銘柄「8301」で上場されていて、45%の株を、民間人の誰が持っているのか、一切公開しておりません。こうしたことは、ユーロを発行している『E C B』も同じ構図です。

『F R B』は、自分たちが政府から独立している民間銀行である理由について、「経済の安定を目指すため」などと述べています。しかし『F R B』を経営する国際銀行家たちが、いかなる思想を持っているかを知っていれば、この理由が単なる建前上の言い訳にしか過ぎないことは、容易に予想ができます。

ここで、あえて『タルムード』を今一度、引用します。

非ユダヤ人はイスラエル人の財産に対し所有権を有せず」（シュルハン・アルフ、第3巻正義の楯）。
非ユダヤ人の所有する財産は、本来ユダヤ人に属するものなれど、一時彼らに預けてあるだけである。
汝に何らの代償もなくして、これら財産をユダヤ人の手に収めるも可なり（シュルハン・アルクーショツツェハミツパッド第348条）。



100ドルは日本円で約1万円ですが、100ドル札の原価は、たった約15円です。

ただ民間銀行が発行している紙キレでも、皆が「価値がある」と信じて使っているから、自分も同じように信じて紙キレでも使っている、それが現在のお金なのかもしれません。

しかしなぜ、科学は発展し、生産性が上がり、物は溢れかえっているというのに、多くの国民が貧しい暮らしに苦しんでいるのでしょうか。

その理由の一つに、高い税金があります。

つまり国家の借金(外債)として、あるいは政府の借金(内債)として、アメリカも日本も借金が膨れ上がり続けていて、その借金返済のために税金が上がり続けているわけです。

1913年に『FRB』が設立された時、アメリカの借金はわずか1億ドルでした。しかし当時の大統領ウッドロー・ウィルソンが8年後に大統領を退任する時には、第一次世界大戦の戦費もあって、アメリカの借金は800倍に増えて、800億ドルに増えていました。そして現在、世界最大の借金大国アメリカの借金は31ドルです。

では、アメリカや日本は、果たして誰に借金しているのでしょうか？

誰かが貸しているからこそ、国家や政府の借金が膨れ上がり、税金が上がっているのです。

主な借金の相手は銀行、もしくは外国(外債)です。

日本の場合、国民は『UFJ』や『みずほ』といった市中銀行にお金を預けており、市中銀行がその国民の資産を政府に貸し出すことによって、借金になっております。ですから厳密に言えば、日本政府の借金とは、ただの国民の資産なわけです。(※その他の借金は日銀や金融機関)

アメリカの借金の相手は、日本や中国などの外国、そして『FRB』などです。アメリカ政府は、予算が足りないと通貨の代わりに国債を発行して、それを『FRB』に買い取ってもらっています。こうしてアメリカは、世界一の借金大国となったわけです。しかし国債には利息が発生するために、その利息分はアメリカ国民の所得税で支払われ、税金が膨れ上がる度に、新たな税金が作られたり、税率が上げられてきました。

実は世界の銀行業界には、ピラミッド状に構成されたトップダウンの権力構造があります。このピラミッドの権力構造の末端は市中銀行ですが、この頂点に「バベルの塔」のような建物の『国際決済銀行(BIS)』が君臨しているわけです。

この「銀行の中の銀行」と呼ばれる、スイスのバーゼルに拠点を置く国際的な民間銀行は、あらゆる国家、あらゆる法の影響を受けず、私的な警察まで所有しており、一度も監査を受けたことがありません。

『BIS』の経営者は、ユダヤ人を自称する者なのですから、「バベルの塔」に似たこの『BIS』ビルも、イスラエルに建てたら良かったのですが、あえて軍事的にそれほど強くない、永世中立国スイスが選ばれて、「バベルの塔」のようなビルが建てられました。

この永世中立国のスイスという国は、「グレート・リセット」という世界共産化を企画している『世界経済フォーラム』の本拠地でもあります。

この『BIS』というユダヤ人を自称する者たちが経営する民間銀行こそが、ピラミッド状に構成された銀行制度の頂点にいるために、実は世界の金融をかなり動かしています。

なぜならこの『BIS』の下に、『日銀』や『FRB』といった世界各国の中央銀行があり、その中央銀行の下に市中銀行があり、『BIS』が世界中の「市中銀行」に対して、「BIS規制」をかけて経済活動を制限しているからです。

この「金融の仕組み」を、現在の経済が教えていないから、問題なわけです。

しかしなぜ、ニムロデは「バベルの塔」を建設したのでしょうか？

言われている理由として、「自身の権力を人々に見せつけ、人々がバビロンから離れて行かないようにする」という話があります。しかしイエス磔刑の頃に生まれたフラウィウス・ヨセフスというユダヤ人は、『ユダヤ古代誌』という書物において、ニムロデの「バベルの塔」の理由として別のことを述べています。

それは「大洪水を引き起こした神への復讐」だそうです。

つまり『ユダヤ古代誌』によれば、「アトランティスやムーのように、今後、神が文明を滅ぼすことがないように、その復讐と反逆として、ノアの子孫であるニムロデは塔のバベルの塔の建設を行った」、という説があるわけです。

そして興味深い話として、『「宇宙の法」入門』で明らかにされたことですが、ノアの箱舟の洪水を起こしたのは、エンリルなのです。

エンリル 私は、古代のシュメール、今のイラクの南部において、今から五千年ほど前に指導をした者です。そして、天上界に還ってからは、シュメールの人にとっては最高神として、そして、メソポタミア起源の多くの文明においては、「破壊の神」として知られています。

最も有名なのは何かというと、「ノアの方舟」の大洪水を起こしたのが私エンリルだと、人々には知られております。

地上人類のわがままと神への不信仰が目についたので、地上の人類を滅ぼすべく、大洪水を起こしました。そして、ほとんど、ありとあらゆる町や村を水底に沈めました。

しかし、われわれの仲間の一人のエンキという者が、預言者的資質を持っていたノアに、大洪水の計画があることを教えてしまったために、彼と彼の家族や、彼が考える残すべきものが、大洪水のあとにも残りました。

地球レベルで記録されている、さまざまな大災害や津波、地震、ハリケーン、こうしたものは、主として私が中心となって、人類に教訓を与えるべく、歴史上、起こしてきたものです。

また「ノアの箱舟の洪水」について、『神々が語るレムリアの真実』にはこうもあります。

マヌ 古代シュメールには、アヌという天空神がいて、嵐の神のエンリルがいて、そして、大気の神のエアがいました。エンリルも、エアも、古代シュメールの三大神なのですが、実は、アヌの子供なのです。【中略】

天空神のアヌが、古代バビロニア、古代シュメールの最高神なのですが、この父が亡くなったあとに、エンリルのほうが最高神を名乗り始めたのです。

そのころ、「ノアの洪水」が起きたのですけれども、「あのノアの洪水を起こしたのは自分である」と称して、「破壊の神、人類を恐怖させる神が『最高の神』なのだ」というようなことを言ったのが、エンリルです。そのように、人類を恐怖させました。

そのとき、人類を救おうとしたのがエンキという人です。これがエアですね。エアは、大気の神でもありますが、水の神でもあります。エアが人類を救おうとしたのであり、救世主はエアだったのです。

エアは、親であるところのアヌ、これはエル・カンターレのことですけれども、「エル・カンターレが最高神である」と言っていました。しかし、弟のエンリルが、「自分が最高神だ」と言い出したため、戦争になってしまったわけです。

エンリルが洪水を起こして、エンキが人類を救おうとして、ノアが箱舟で逃げて、その子孫であるニムロデが「バベルの塔」を建てたわけですが、なぜニムロデが塔を建てたのか、本当の理由は分かりません。

しかしニムロデが「神の反逆者」と言われていることは事実です。

そしてEU本部ビルが「バベルの塔」に似ていること、そして一部の人々が、共産主義者として国境を無くしたいことも事実です。

さらには『B I S』のビルも「バベルの塔」のようにも見えることは事実です。

以上のことから、新たな経済学を打ち立て、「金融の仕組み」を広く多くの人々に広めねばならない理由がお分かりになるはずです。

それに何よりも、新たな経済学を打ち立てて、国民一人一人が「金融の簡単なカラクリ」を理解さえすれば、実はフォードが述べたように、明日の朝にでも革命が始まっていくのです。

配当国家へ向けて

なぜなら本当は、「無税国家」を超えた「配当国家」の実現も、実は夢や幻ではないからです。

実際に松下幸之助氏も、「収益分配国家を目指そう」といったことも述べておられました。「収益分配国家」とは、国民が国家にお金を支払う税制システムではなく、逆に国家が国民にお金を支払う税制システムのことです。以下のその松下幸之助氏の発言です。

やり方次第、考え方次第では、年々の剰余金を積み立て、それをもとに「無税国家」といいますか、さらに一步進んだ「収益分配国家」ができるはずですよ。

百年、二百年の後には無税国家、収益分配国家という姿が十分実現できると思うのです。

この「配当国家」について、総裁先生は『国家繁栄の条件』の中で、こうお説きくださっておられます。

(松下幸之助氏の「無税国家」という発想もすごいのですが、「無税国家」よりもさらに進んだことまで言っています。それは、「配当(収益分配)国家」もありうるということです。国が儲かったら国民に配当しても構わない、要するに、「くれる」というわけです。

では、どうしたら、「配当国家」を実現できるのでしょうか。

この「配当国家」ということを、まるで裏付けるかのように、今から約百年ほど前の1930年、経済学者ジョン・ケインズは、『孫の世代の経済的可能性』という論文の中で、次のようなことを述べていました。「およそ100年後には、ほとんどの経済的問題は解決されてしまい、人々の悩みは余暇をどのように使うか、ということになるだろう」

つまりこの言葉、「経済の問題が解決されることによって、人々はお金で悩み苦しむ時代を終えて、時間をどのように使うかで悩む時代へと移り変わる」という意味です。

実はケインズは、経済学の問題点、もしくは「金融的詐欺」に気づいておりました。

なぜなら1929年にニューヨークのウォール街で株価が大暴落して、イェール大学のアーヴィング・フィッシャーら経済学者たち8名が、『シカゴプラン』と呼ばれる銀行改革案を作成したからです。

簡単に言ってこの『シカゴプラン』とは、「現在、民間銀行が行っている通貨の創造を中止して、通貨制度を国有化することによって、政府の借金をゼロにする」というものです。政府の借金がゼロになれば税金も安くなります。

『シカゴプラン』を考え出した経済学者8名たちは、さらに40名の経済学者を選んで、この『シカゴプラン』を極秘に送付しました。その40人の経済学者の中に、ケインズもその中に入っていました。

『シカゴプラン』を受け取ったケインズは、返信の手紙を書き、その中で「貴方が親切に送ってくれた『シカゴプラン』に大変、興味を持ちました」と書いています。

つまりケインズは、経済学の欠点に気づきつつも、「百年後の人々は経済的問題を解決して、お金をどう使うかではなく、時間をどう使うかに悩むだろう」と、予言的に述べたわけです。

実際に、フセイン、プーチンと共に、マスコミから「独裁者」と報じられたリビアのカダフィという方は、実は「無税の配当国家」を実現しました。そのためにリビア国内のイスラム教徒たちは、豊かな暮らしを過ごしながら、お金のためではなく、信仰とウンマ（イスラム共同体）のために働いたのです。

かつてリビア人は言いました。「日本はリビアより豊かだが、しかしリビア人は日本人よりも豊かだ」と。その差は、通貨の創造を国家が行うか、民間が行うかの違いでした。

国家が通貨の創造行えば、借金はゼロに近づくために、税金は減っていき、やがては無税国家、究極には配当国家になりますが、しかし民間が行えば、借金は増え続けて、税金も上がり続けて、やがては共産化していくことということを、実は私たち人類は目の前で体験してきたのです。

しかしリビアのカダフィはフセイン同様に殺害され、イラク同様にリビアの街は「NATO」によって破壊し尽くされ、多くのリビア人が難民となってしまいました。

ですから以上のことを考えても、やはり「新たな経済学」を打ち立てることは急務です。

そしてもしもそれができれば、「配当国家」は確かに実現可能です。

特に日本は可能です。なぜなら日本の南鳥島には莫大な「レアアース」という資源があり、実は日本はリビアに負けるとも劣らない資源大国だからです。

しかし日本人が信仰心に目覚めないまま、もしも日本が「配当国家」になってしまったら、人々は自助努力の精神を忘れて、墮落してしまうことでしょう。

ですからある国家が「配当国家」になっていく最大の条件は、「国民の信仰心」と言えるでしょう。

しかし信仰を中心に据えて「配当国家」になれば、お金は「感謝」に代わるのかもしれませんが。主より私たちは、天上界でも五次元善人界には、まだ貨幣が存在しており、それは「感謝」であると教えて頂いておりますが、そのような黄金の時代を到来させることが、主と共にある私たちはできるのでしょうか。

こうしたことを考えても、『幸福実現党』のイデオロギーが「新たなもの」である理由が分かります。

求められる武士道精神

私は冒頭で、主のお言葉をお借りして、『幸福の科学』の問題点はヒエラルキーであり、上にある者は謙虚になって、下の意見に耳をかさねばならない、しかし下にある者はもっと勇気を出さねばならない」ということもお伝えいたしました。

私は十三年間、出家者として色々な役職の高い方、あるいは役職がそれほど高くない方、もしくは若手職員を見てきましたが、私が感じていることは、「私の見る限り、役職の高い方の中で謙虚さの無い人は一人も見なかった、役職がそれほど高くない方の中で勇気の無い人は一人も見なかった」ということです。

私が接しさせていただいた方々は皆、誰もが「より謙虚にならん」と日々、努力精進されておられ、一見すると勇気が無いように見える若手職員でも、静かに見えていた鍋が、フタを開けてみたら中ではグツグツ煮えたぎっていることがあるように、皆、勇気と情熱に満ち溢れておりました。

在家の方々は仕事をされながら活動され、出家者も朝から晩まで働いて、「みんな真面目で偉いな、自分ももっと頑張らなければならない」と、常々、そう感じさせてきました。

やはり主は偉大であるから、主の教えを学び、そして弘めようとしておられる仏弟子も皆、「我が誇りであり、自慢である」、それは十三年間の私の短い出家人生の感想です。

しかし僧団はイノベーションしなければならず、私はすべてのすべてを覚悟で、これを書いております。

では、僧団がイノベーションするにあたり、何が問題なのでしょう。

なぜ、これまで『幸福の科学』は、あまりイノベーションをすることなく、弟子の力によって力強く法輪が転じられず、伝道があまり進まなかったのでしょうか。

それはやはり、一つには最初に述べましたように、僧団の中に「仏法」と「情報」を同じものに捉えている傾向にあるということです。

そしてもう一つは、あまりにも陰謀が膨大であるために、こんなものを暴いて、「情報」としてまとめる奇人や変人がいなかったことだと私は思っています。

奇しくも私が出家をお許しいただいた年は、『創造の法』を戦略経典とする年であり、「奇人」や「変人」について「あとがき」にこうあります。

あとがき

何が面白いって、この世に新しい価値を生み出すことほど面白いことはない。

人がやってないことをやる。まだ世の中のないものを創り出す。わが子の代には『常識』になっているであろう『非常識』を、現在ただ今の中に見出す。

さんざんバカにされ、冷笑されつつも、一心に努力し、二十年後には、世界中から尊敬されている自分を発見

する。実に痛快ではないか。

既成のエリート・コースからドロップ・アウトして、新しいエリート・コースを自分で切り拓く。まさに人生の醍醐味はここにつける。奇人・変人を尊敬し、自らも誇り高き奇人・変人となろう。「素晴らしいヘソ曲がり」にならなければ、勇気をもって、新文明の旗手になんかなれない。恐れる心を捨てて、チャレンジしていこう。

あくまでも本書は、『大陰謀』のほんの一部を暴いたに過ぎず、コロナウイルスやワクチン、さらには金融経済の奥深い「情報」までは触れられておりませんが、しかしおそらく私が世にも稀な奇人、変人だからこそ、こうした『大陰謀』にたどり着き、そして暴けたのだと思います。

本書では、「レプタリアン」の話にも触れましたが、私は「日本、アメリカを中心とした、こうした『大陰謀』の究極には人間ならざる者がいる」と考えておりますし、おそらく『幸福の科学』の信者ならば、誰もがそう考えていることでしょう。

憶えている方も多いでしょうが、映画『UFO学園の秘密』は、こうやって終わります。

裏宇宙の使者ダハールらしき存在「この地球上で1億2千万年前に渡って、サタンたちに準備させていたことだ。

失敗は許されない。」

中国の国家主席らしき人物「分かりました。」

ドアがノックされる。

秘書らしき人物「国家主席、合衆国大統領が話しをしたいと。」

中国の国家主席らしき人物「ちょうど良かった。こちらにも用があるんだ。」

電話の受話器を受け取る。

中国の国家主席らしき人物「ニーハオ」

その人物の指輪がアップになると、その模様は中国の秘密軍事基地。

『UFO学園』の次の映画『宇宙の法～黎明編』は、約3億3千年前のアルファ様のご降臨された時代が舞台となっており、裏宇宙の使者ダハールとの戦いが描かれておりました。レプタリアンのザムザが信仰に目覚めて、地球を守るために共に地球人と戦ったのです。

次の映画『宇宙の法～エローヒム編』では、約1億5千万年前のエローヒム様のご降臨される地球が舞台となっており、この頃には、イエスの魂であるアモールなどもすでに地球に来られている一方で、まだルシフェルは悪魔になってはおりません。そのためにルシフェルも共に、地球を守るために裏宇宙の使者ダハールと戦い戦いました、

すなわちアルファ様の時も、エローヒム様の時も、明らかに「宇宙戦争」であったわけです。

しかしそれから約三千年後、つまり今から約1億2千万年前に、ルシフェルは「サタン」という名前で地上に生まれ、この時より地獄に堕ちて帝王となりました。

『太陽の法』を読み返してみると、すでに1億5千万年前のエローヒム様の時代には、9次元霊が全員そろっていたことが分かります。

そしてアルファ様、エローヒム様に続く、今回のエル・カンターレの御本体下生の戦いです。この戦いは、前回までとは異なり、「闇宇宙」、「悪質宇宙人」のみならず、さらにルシフェルが墮天したこともあって、「悪魔」との戦いでもあるために、約1億5千万年前の戦いの時よりも、若干、手強くなっていることが分かります。

しかし今から約3万年前に、エル・カンターレの宇宙的存在である「天御祖神」が地球に来られて、日本を建国していただきました。そして武士道精神を説かれました。

日本の神道では今、妖怪や天狗が問題になっておりますが、しかし総裁先生は『「妖怪にならないための言葉」発刊記念対談』の中で、「**神道で表側の神になったのは戦で戦った人**」と仰られております。

天御祖神は武士道の源流であり、日本は本来、武士道の国であり、「神道の表側で神になったのは戦で戦った人」という主のお言葉について考える時、導きされることは、やはり「武士道である」と言えるでし

よう。

この霊界や闇宇宙まで巻き込んだ最終戦争、すなわちハルマゲドンには、明らかに武士道が必要不可欠です。

なぜなら私たちは今、この45億年の地球が始まって以来の、3億3千万年前、1億5千万年前とも異なる未曾有な戦いをしているからです。

身近で壮大な戦い

この戦いが困難なところは、身近で密接でありながら、しかしあまりにも壮大なために、認識しづらいところなのです。

たとえば私たち信仰者は、日本という国が「UFO後進国」であることを実感しておりますが、それも『ザ・ファクト』が明らかにしてくれたように、単なる偶然ではありませんでした。

『ザ・ファクト』の中で、UFO研究家の高野成鮮氏が明らかにしてくださったことですが、日本には一つも存在しないはずの「UFO目撃情報」は、すべてアメリカの機密解除された公式文書におさめられているそうです。

これは一体、どういうことなのでしょう？

『宇宙戦争を告げるUFO 知的生命体が地球人に発した警告』などの書籍を書かれた、元自衛隊員の佐藤守氏によれば、航空自衛隊のパイロットたちは、頻繁にUFOに遭遇しているというのです。そして時には証拠写真におさめ、その事実をきちんと上司にも報告もしております。

しかしそれらの「UFO目撃情報」は、すべてマル秘扱いされて、機密文書化されて、持ち去られてしまうというのです。

そうした「UFO目撃情報」が、機密解除されたアメリカの公式文書にあるわけです。

では、なぜ、航空自衛隊パイロットの「UFO目撃情報」は機密にされて、アメリカに持ち去られてしまうのでしょうか。それを考えるには、「自衛隊」と「米軍」の関係を知る必要があると言えるでしょう。

鹿児島県の阿久根市の元市長で、元航空自衛隊のパイロットでもある竹原信一氏は、次のように証言しています。

日本の現状は実際には米軍が仕切っている。

月二回、「日米合同委員会」というものが開かれています。それは(日本の)外務省、(アメリカの)北米局長を中心とした官僚の最も上の人たちが、米軍の指示を仰ぐというもので、それ(日米合同委員会)によってこの国は動いています。

この構造を実は当時の鳩山総理大臣も、総理大臣になって始めて知った状態で、政治家も本当に何も分かっていなかった。

そういった「日米合同委員会」が、裁判所も動かしている。『日銀』も動かしている。「日米合同委員会」が、すべての省庁を操ってるわけです。

それで政治家はそのことを知らない。だから国会も含めて地方議会まで、議決も「自分たちがやっている(国を動かしている)」と虚勢は張るだけで、本当は何も知らないわけです。

こんな国であるってことはおそらく、まともな(他の)国は日本のことを知ってます。いつも悪いほう(グローバリスト)に付いて、手先になっている(湾岸戦争、イラク戦争等)ということは(他の諸外国は)知ってると思いますよ。

私(竹原)が、自衛隊に当時の事ですが、敵味方識別装置(IFF)というのがありまして、あれはアメリカが造って、そのコードを変えるコードまで、アメリカの指示です。自衛隊と言うのは日本軍ではなくて、米軍の犬。そういう状態。日本政府もそうなんですよ。

日本っていうような国が、実際は無い実際は無いんですよ。(戦後の) スタートからそうだし、今も存在しないんですよ。本当は。

だから日本人が「自分の国」なんて言ってるのは、なんのことなのか、本当は分かっていない。

ユダヤ マフィアの道具に過ぎない。実際は。

「敵味方識別装置 (IFF)」とは、その名前からも分かるように、味方を攻撃すること、つまり「同士討ち」を防ぐために、電波などを用いてレーダー内の航空機や艦艇が味方であることを確認するための装置です。それを航空自衛隊は米軍の支持によって決めており、「實際上、航空自衛隊は米軍の犬に過ぎない」と、元航空自衛隊員が述べているわけです。

以上のことから、たとえ航空自衛隊のパイロットがUFOを目撃しても、その「目撃情報」が機密扱いになって、アメリカに持ち去られてしまう理由が良く分かります。

アメリカの「エリア51米軍基地」に悪質宇宙人が入り込んでいることから、「米軍からの指示でUFO目撃情報が持ち去られている」というよりも、むしろ「悪質宇宙人からの指示で、アメリカ、自衛隊を通じてUFO目撃情報が持ち去られている」と考えるべきでしょう。

だからこそ日本はUFO後進国になっているわけです。

だからこそ元航空自衛隊の佐藤守氏は、「民間航空会社ほど厳しくはないけれども、自衛隊員のパイロットがUFOを目撃した」と言っても笑われない世の中を作るために、多くの書物を書いているそうです。

しかしここで興味深いのは、彼が「民間航空会社ほど厳しくはないけれども」と付けているところです。これは何を意味するのでしょうか。

こんな話があります。それは、とあるテレビ番組で、芸人の「雨上がり決死隊」の宮迫さんが明らかにされたエピソードです。

彼が後輩芸人とバーで飲んでいると、彼らの隣にも先輩と後輩といった感じの男性2人組がお酒を飲んでいたそうです。

そしてその男性2人と、何気なく会話が始まったそうです。そして相手の男性が宮迫さんに対して、「普段は番組を見れないんですけど、DVDを見させていただいてます」と答えたので、宮迫さんが不思議に思って、「なんで普段はテレビ見れないんですか？」とたずねてみました。

するとその相手の男性は、「自分は民間旅客機のパイロットをやっています、それでテレビはあまり見れないんです」と答えたそうです。

そこで宮迫さんは、「もしもいつかパイロットをやっている人に会ったら、絶対に聞いてみたい」と思っていたことがあったので、勇気を振り絞って「UFOって見たことありますか？」と問いかけました。

するとその相手の男性は、飲んでいたグラスをテーブルに「ドンッ」と置いて、しばらく間をおいてから、「そんなのあるに決まってるじゃないですか！」と、勢いよく答えたというのです。

するとその男性の隣にいた後輩らしき人物が、「ダメですって！先輩、先輩！ダメですって！」と急に慌て始めて、間に割って入って止めて、少し二人がメモ始めたのだそうです。

宮迫さんが「どうしたんだろう？何かいけないことを訊いてしまったのか？」と不思議に思っていると、そのパイロットの男性は、「いいんだ。どうせオレは辞めるんだから。もう辞めるから関係無いんだよ」と後輩らしき男性を説得して、さらに宮迫さんに話し続けたそうです。

実はパイロットには定期的に健康検診があって、その検診で必ず何か見なかったか聞かれるのだそうです。しかしもしもそこで、「UFOを見た」と答えると、「そんなものは存在しない」という理由からか、「精神に異常をきたしている」と判断されて、パイロットをクビにさせられ、地上勤務に降格される、というのです。

その男性は、宮迫さんにこうも言ったそうです。「UFOなんか全員見てますよ。もう数なんか数えられないですよ」と。

この経験から宮迫さんは、自分の知り合いで父親がパイロットをしている人物にその話をしてみました。おそらくそれは、彼の芸人で後輩にあたる「劇団ひとり」さんでしょう。なぜなら彼の父親は元航空パイロットで、彼は昔、アラスカに住んでいたからです。

宮迫さんのバーでの話を聞いたその方は、「それ！言っちゃダメなやつですよ！」と慌てたそうです。昔、その方のお父さんの仕事仲間のパイロットが、やはりUFOを目撃したそうです。しかしそのUFOが、あまりにも大きく、しかも航路上にあるために、「自分の飛行機は避けられても、後から来る他の飛行機は事故に遭うかもしれない」と考えて、あえて事故を避けるために管制塔に、「UFOがある」と報告したそうです。

すると次の日から、飛行機を降ろされて、地上勤務になったそうです。

なぜ、このようなことが起きているのでしょうか。元阿久根市長で、元航空自衛隊員の竹原信一氏の「日米合同委員会が日本を動かしている」という言葉を信ずるならば、米国の中に入り込んでいる悪質宇宙人が、日本政府を通じて、そのような支持を『JAL』や『ANA』に出している、ということも十分に考えられます。

CIAによって「陰謀」を語る者が奇異の目で見られ、「おかしな人」とレッテルを貼られるがごとく、UFOの存在を語る人が奇異な目で見られて、「おかしな人」というレッテルを貼られている原因は、やはり同じ理由であったと言えるのかもしれませんが。

このように、この戦いは、とても身近で、そして壮大です。

それはドルが「基軸通貨」と呼ばれ、日本も石油の購入にドル決済を強いられ、しかしそのドルは100%民間の『FRB』が発行権と管理権を持ち、その上には「バベルの塔」にも似た『BIS』があり、この『BIS』が、世界中の市中銀行に対して「BIS規制」というものを掛けることで、世の中に出回るお金の供給量を厳しく管理しております。

そしてどうやらこれらの『大陰謀』の上には、悪質宇宙人が存在し、悪質宇宙人の奥にはカンダハールやアーリマンがおり、彼らは地獄のルシファーたちとも繋がっているわけです。

そして私たち日本人は、ドルと紐づけされた円を使い、石油無しには生きてはいけない暮らしを強いられ、しかも大天使ミカエルによれば、かつてサタンは石油を武器に戦ったそうです。

しかも今、電気ガス水道といったものを使えば使うほど、海外にお金が垂れ流れ、私たち日本国民は貧しくなり、今の銀行制度ならば、政府の借金は膨れ上がり続け、これを理由に税金も上がり続けていくことでしょう。

そして日本の貧困化、弱体化を究極の位置で喜んでいるのは、おそらく人間ではありません。

主エル・カンターレ御本体の御生誕の地、日本が復活できなければ、地球が滅びるのですから。

これらのことから、この戦いは、「身近にして壮大」とやはり言えます。

しかし壮大であっても、身近だからこそ勝てます。

なぜなら私たちの手のひらの中にある千円札で、1ドル札を10枚ほど買えて、このドルがこの「地球」と呼ばれる星では「基軸通貨」と言われ、なおかつ彼らの所有物だからです。

まさに身近で壮大な「手のひらの宇宙戦争」です。

しかし私たちは、主と共にある限り、必ず今回も勝利できます。

しかしこの戦いに勝利するためには、信仰においては主と一体となり、しかし情報においては自立して、一年に千冊の書物を読む気概を持って、より創造的な人間となって、マスコミ的な動きをし、水平権力を立ち上げ、一人一人が武士道精神を宿した侍になっていく以外に、もはや道はないでしょう。

あとがき

最初にも述べましたように、なぜ私がこうした『大陰謀』に気がつくことができたのか、それは私が悪なる世界を見てきたこと、そして奇人変人だからでしょう。悪なる世界とうのは、狐と狸の化かし合いでもあるからです。

陰謀に気づいたキッカケは『ノストラダムス戦慄の啓示』を見て、^{ほのかぐつちのかみ}火之迦具土神がイラクのフセイン大統領として生まれ、アメリカと激しい争いを繰り広げたこと、レプタリアン星人がすでに地球に入り込んでいること、映画の最後にアメリカが海中に没していたことから、「おかしい」と思い、真実を探っていくことで、湾岸戦争で大儲けしている者たちの存在に気がついたわけです。9 1 1 テロからのイラク戦争も不自然でなりませんでした。

そして私はかなりの奇人変人ですから、英語の勉強もしなければならぬというのに、そちらには早めに見切りをつけて、徹底的に陰謀を暴くことに専念してきたわけです。

単純に言って、真実を知れば知るほどに、大救世主ご降臨というこの奇跡の時代は、絶望と希望が交差している時代であることが分かると言えるでしょう。

なぜなら戦争を意図的に望んでいる、思想的に間違っただけの人々が現実に存在していて、彼らが強大な富と権力を持つばかりか、どうやら実は積極的に悪魔崇拜まで行っている、そして彼らは悪質宇宙人とも繋がっている可能性がある、その悪質宇宙人はカンダハールやアーリマンとも繋がっていると見てほぼ間違いのない、これは人類にとっては絶望的な話です。

しかしそんな危機の時代に、主エル・カンターレの御本体、永遠の仏陀にして大救世主がご降臨されている、そして人々が真理と真実に目覚めさえすれば、お金という紙切れごときでは悩み苦しめない大繁栄の時代も確かに見えている、これは人類にとって大いなる希望です。

そして主より、「現状維持は即、脱落」と教えて頂いているように、これまでのやり方の延長上に、『幸福の科学』の未来はありません。

だからこそ「仏法と情報は違う」ということを、仏法真理の観点から述べた上で、様々な情報を述べると共に、「新たな政治的アプローチ」から「宗教的アプローチ」ということを述べてまいりました。

「はじめに」で私は、「すべての法友の存在に対して感謝せずして、『愛に始まり愛に終わる主の教えを学んでいる者』とは言えないから、私は信仰者として『主に感謝し、すべて法友を感謝せんとしている』、そんな思いから本書を書いている」ということを述べました。

私たち信仰者は、まぎれもなく僧団の仲間です。

「仲間のためならば体を張り、時には仲間のために命さえ懸けられる」、それが真の仲間であり、真の友情であり、法友の絆だと私は考えています。

そして主より私たちは、「法友の絆こそが伝道の時間を短縮させる」とも教えていただいております。

ですから私は主に最も感謝し、絶対機に主を愛すると共に、私は僧団の仲間にも感謝を深めるべく、日々、自分なりに「主と僧団に対する反省と感謝の瞑想」を行っております。

本書では、様々な情報から、戦略にいたるまで、いろいろなことを勝手に述べてまいりましたが、どうか弟子力をあげて、伝道に、選挙に力を合わせて、主と共に地球を守り、繁栄させてまいりましょう。

最後に「9 1 1 テロ」の『X (旧 T w i t t e r)』の動画のQRコードを貼り付けておきます。

この動画は1時間と少し長い動画ではありますが、しかしもしもこの「9 1 1 テロ」に関わる情報を、何も知らないならば、おそらくはこの動画をご覧になれば、必ずや常識を逆転させることでしょう。

まずは、貴方の常識から逆転させてください。

つたない文章を読んでいただき、まことにありがとうございました。



与国秀行